

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第25冊

津島岡大遺跡 19

— 第30次調査 —

〔岡山大インキュベータ新営〕

2009年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第25冊

津島岡大遺跡 19

— 第30次調査 —

[岡山大インキュベータ新営]

2009年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

序

岡山大学の津島キャンパスや鹿田キャンパスの地下には、条里の痕跡が残されています。条里制は土地を方眼に区切って管理するシステムで、中国を起源として7世紀ごろに日本に伝わり、くり返し再編を受けながら今日まで伝わってきたとされています。

そのように条里は今も生きているために、条里の区分線は生活に根ざした道路や用水として活用されていることが多く、道路建設に伴う発掘などでもその部分を避けて調査しがちで、条里の最も重要な情報が得にくいという問題があります。しかし、津島キャンパスでは明治時代に陸軍によって大規模な造成が行われており、敷地を東西に貫く座主川のほかは、条里の地上での痕跡はあまり残されていません。そのため、発掘調査の制約は少なく、キャンパスの広い範囲にわたって比較的良好な条里の痕跡を確認することができます。

今回の岡山大インキュベータ新営工事に伴う調査では、幸い古代の条里にかかわる道路の交点となるT字状の遺構が確認されました。これを、キャンパス内の他地点の調査成果などと比較した結果、古代と中世以降では条里の方向が若干異なり、地割りの再編が行われているということがわかってきました。再編の時期は13ないし14世紀と推定されていますが、これは「備中国賀陽郡服部郷図」が残された総社市服部地区周辺の条里の再編とも共通する時期であり、狭い地域にとどまらない広範な動きのひとつとして理解できる可能性が出てきました。

中世というと争乱のイメージがありますが、大規模な用水路の開発や、条里の再編による用水の体系の刷新など、中世の領主層による精力的な開発の姿を、こうした資料から読み取っていくことができるものと思います。そうした方向をはじめとして本報告書をご活用くださいますようお願いいたします。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

センター長（理事）

副センター長（大学院社会文化科学研究科 教授）

北 尾 善 信

新 納 泉

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	(池田 晋)	1
第1節 近隣の遺跡		1
第2節 津島岡大遺跡		3
1. 構内座標の設定		3
2. 遺跡の概要		3
第2章 調査の経過と概要		7
第1節 調査にいたる経過	(野崎貴博)	7
第2節 調査体制		7
第3節 調査の経過		8
第4節 調査の概要	(池田)	9
第3章 調査の記録		12
第1節 調査地点の位置と区割り	(池田)	12
1. 調査地点の位置		12
2. 調査地点の区割り		12
第2節 層序と地形		12
1. 層序		12
2. 地形の推移		16
第3節 縄文時代～弥生時代前期の遺構・遺物		17
a. 焼土・炭化物集中部		17
b. 土坑		18
c. ピット		22
d. 包含層出土遺物		22
第4節 弥生時代～古墳時代の遺構・遺物		27
a. 溝		27
b. ピット		32
第5節 古代の遺構・遺物		33
a. 道路状遺構		34
b. ピット		36
c. 耕作痕		36
d. 包含層出土遺物		37
第6節 中世の遺構・遺物		40
a. 耕作痕		40
b. 包含層出土遺物		40
第7節 近世の遺構・遺物	(野崎)	42
1. 近世下層		42
a. 土坑		42

b. 溝	45
c. 耕作痕	45
2. 近世上層	45
a. 土坑	45
b. 溝	50
c. 畦畔・段	54
d. 耕作痕	54
e. 包含層出土遺物	54
第4章 自然科学的分析	55
1. 放射性炭素年代測定 (株古環境研究所)	55
2. 珪藻分析 (株古環境研究所)	56
3. 植物珪酸体分析 (宇田津徹朗)	57
第5章 考 察	63
津島岡大遺跡における古代から近代の条里遺構 (池田)	63
第6章 結 語	(池田) 73

挿 図 目 次

第1章 地理的・歴史的環境	図16 土坑6	20
図1 周辺遺跡分布図	図17 土坑7	20
図2 津島岡大遺跡構内座標と各調査地点	図18 土坑2・出土遺物	21
	図19 土坑3	21
第2章 調査の経過と概要	図20 土坑8	22
図3 古代の道路状遺構の調査風景	図21 ピット14	22
図4 検出遺構全体図	図22 <11層>・<12層> 出土遺物：土器1	23
	図23 <11層>・<12層> 出土遺物：土器2	24
第3章 調査の記録	図24 <11層>・<12層> 出土遺物：石器1	25
図5 発掘調査地点	図25 <11層>・<12層> 出土遺物：石器2	26
図6 調査区の区割りと断面位置	図26 弥生時代～古墳時代検出遺構全体図	27
図7 調査区断面図1	図27 溝1～5 全景	28
図8 調査区断面図2	図28 溝1・2・5	29
図9 縄文時代後期の地形	図29 溝2～5	30
図10 縄文～弥生時代前期全景	図30 溝2・3・5	31
図11 縄文時代～弥生時代前期検出遺構全体図	図31 溝2・5 出土遺物	32
図12 焼土・炭化物集中部1	図32 溝6	33
図13 土坑1	図33 古代検出遺構全体図	34
図14 土坑4	図34 古代全景	34
図15 土坑5・出土遺物	図35 道路状遺構(溝7～10)・溝9 出土遺物	35

図36	ピット26	36	図55	溝18完掘状況	50
図37	〈8層〉～〈10層〉出土遺物：土器	37	図56	溝18・出土遺物	51
図38	〈8層〉～〈10層〉出土遺物：石器1	38	図57	水門1	52
図39	〈8層〉～〈10層〉出土遺物：石器2・鉄器	39	図58	水門2	52
図40	中世全景	40	図59	水門2部材	53
図41	中世検出遺構全体図	40	図60	溝19～26・畦畔1・段1	54
図42	〈4層〉～〈7層〉出土遺物	41	図61	〈3層〉出土遺物	54
図43	近世下層検出遺構全体図	42			
図44	近世下層全景	43	第4章 自然科学的分析		
図45	土坑9	43	図62	自然科学分析サンプル採取地点	55
図46	土坑10～13	44	図63	珪藻顕微鏡写真	57
図47	土坑14・15・出土遺物	44	図64	各採取地点における試料の採取箇所	59
図48	溝11～17	45	図65	プラント・オパール顕微鏡写真	60
図49	近世上層検出遺構全体図	46	図66	プラント・オパール検出状況	61
図50	近世土坑の分類	46			
図51	近世土坑A類と溝18・水門1の位置関係	47	第5章 考 察		
図52	土坑25・26出土遺物	47	図67	古代における条里遺構の分布	65
図53	近世土坑A類（土坑23～26）・C類（土坑27・28）	48	図68	中世～近代における条里遺構の分布	67
図54	近世土坑B類（土坑16～22）	49	図69	津島岡大遺跡における古代～近代の条里地割	70

表 目 次

表1	津島岡大遺跡文献一覧	6	表5	S1地点のプラント・オパール定量分析結果	62
表2	検出遺構一覧	11	表6	S2地点のプラント・オパール定量分析結果	62
表3	珪藻分析結果	57	表7	S3地点のプラント・オパール定量分析結果	62
表4	E1地点のプラント・オパール定量分析結果	62	表8	S4地点のプラント・オパール定量分析結果	62

図 版 目 次

図版一	縄文土器・弥生土器・中世陶磁器
図版二	石器・鉄器

例言

- 1 本書は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが実施した、岡山大インキュベータ新営工事に伴う発掘調査の報告書である。
調査期間：2007年8月1日～12月17日 調査面積：1035.4㎡
調査地点は、岡山市津島中1丁目1番1号に所在する。
- 2 発掘調査から報告書作成までの諸作業は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会の指導のもとに行われた。委員の諸氏に御礼申し上げる。
- 3 本調査については、その概要を『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』に報告しているが、細部にわたる事実関係は本書をもって正式のものとする。
- 4 調査時の遺構・遺物実測・写真撮影は野崎貴博・池田晋・光本順が担当した。
- 5 報告書作成作業の主な担当は以下の通りである。
＜遺物＞土器・木器・鉄器の実測・浄写・観察表：池田・岩崎志保、石器の実測・浄写・観察表：池田、遺物写真：野崎
＜遺構＞浄写：岩崎・井上佐智
＜整理作業＞井口三智子・片山純子・黒藪美代子
- 6 本書の執筆分担は、目次に示した通りである。
- 7 本書の編集は、新納泉（副センター長）・山本悦世（調査研究室長）の指導のもと、池田晋が担当した。
- 8 本書の作成にあたって、石器石材の同定を鈴木茂之氏（岡山大学大学院自然科学研究科（理学系））に依頼した。植物珪酸体分析については宇田津徹朗氏（宮崎大学農学部）にご協力頂き、玉稿を賜った。記して感謝する。
- 9 本書に掲載した調査の記録・出土遺物等はすべて当センターで保管している。

凡例

- 1 本書で用いる高度地は海拔標高であり、方位は国土座標第Ⅴ座標系（世界測地系）の座標北である。
- 2 遺構・遺物の縮尺は各図に付している。基本的には、調査区平面図を1/400、遺構断面図を1/30に統一している。土器は1/3、小型石器は2/3、大型石器・石製品・鉄器は1/2である。
- 3 本文・挿図中において、基本層序の記載に際しては層番号に〈 〉を付して遺構埋土と区別した。
- 4 挿図中において遺構種類を以下の記号で示す。
土坑：SK、溝：SD、ピット：P
- 5 土器の遺物番号は、原則として遺構別に付し、その他石器等には通し番号を付した。石器・石製品にはS、木製品にはW、鉄器にはMを付して区別している。なお、写真図版の遺物番号は、本文中の遺物番号に一致する。
- 6 遺物の計測値と観察所見は観察表を作成し、実測図と組み合わせて掲載した。観察表の表記基準は以下の通りである。
①観察表中の土器胎土の表記基準は次の通りである。
微砂：径0.5mm未満、細砂：径0.5～1mm未満、粗砂：径1～2mm未満、細礫：径2mm以上
②色調は、欄中に表記している場合は、内面・外面の順で示す。
③遺物法量について、土器の口径・底径は推定復元値を（ ）を付して示す。石器については、破損等により本来の法量が失われている資料の残存の実測値を（ ）を付して示す。
- 7 挿図中において、須恵器の断面は黒塗りで区別した。
- 8 挿図中では鉄分をFe、マンガンをMnと表記している。
- 9 本書で使用した地形図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000地形図「岡山北部」・「岡山南部」（平成6年発行）を合成したものである。

第1章 地理的・歴史的環境

第1節 近隣の遺跡

津島岡大遺跡は、岡山市津島中所在の岡山大学津島地区構内に位置する遺跡の総称である。本遺跡の所在する岡山市津島一帯は、中国地方でも最大の平野である岡山平野の北半を占め、主要河川の一つである旭川の西岸にあたる。北側には半田山・ダイミ山・烏山といった標高150m前後の山塊が連なっている。

岡山平野は、旭川・吉井川・高梁川の三大河川の沖積作用により形成されたもので、縄文時代の前期頃に海進のピークを迎えると、海岸線は次第に後退し始める。そして河川の堆積作用と氾濫等の繰り返しにより自然堤防と後背湿地とが形成される。本遺跡周辺でも旭川旧河道や大小様々な規模の支流と、それらの間に形成された自然堤防状の微高地とが複雑に展開する地形をなしていた。このような平野の中に形成された微高地上に集落が進出し始める。岡山平野で人類の痕跡が認められるのは、今のところ縄文時代前期以降のことである。前期に遡る遺跡は、半田山丘陵の下端に立地する朝寝鼻貝塚⁽¹⁾である。以後、この平野を舞台に、人々の歴史が現代まで連続と展開していく。ここでは、本報告に関連する時期を中心に周辺遺跡の概要を述べることにする。

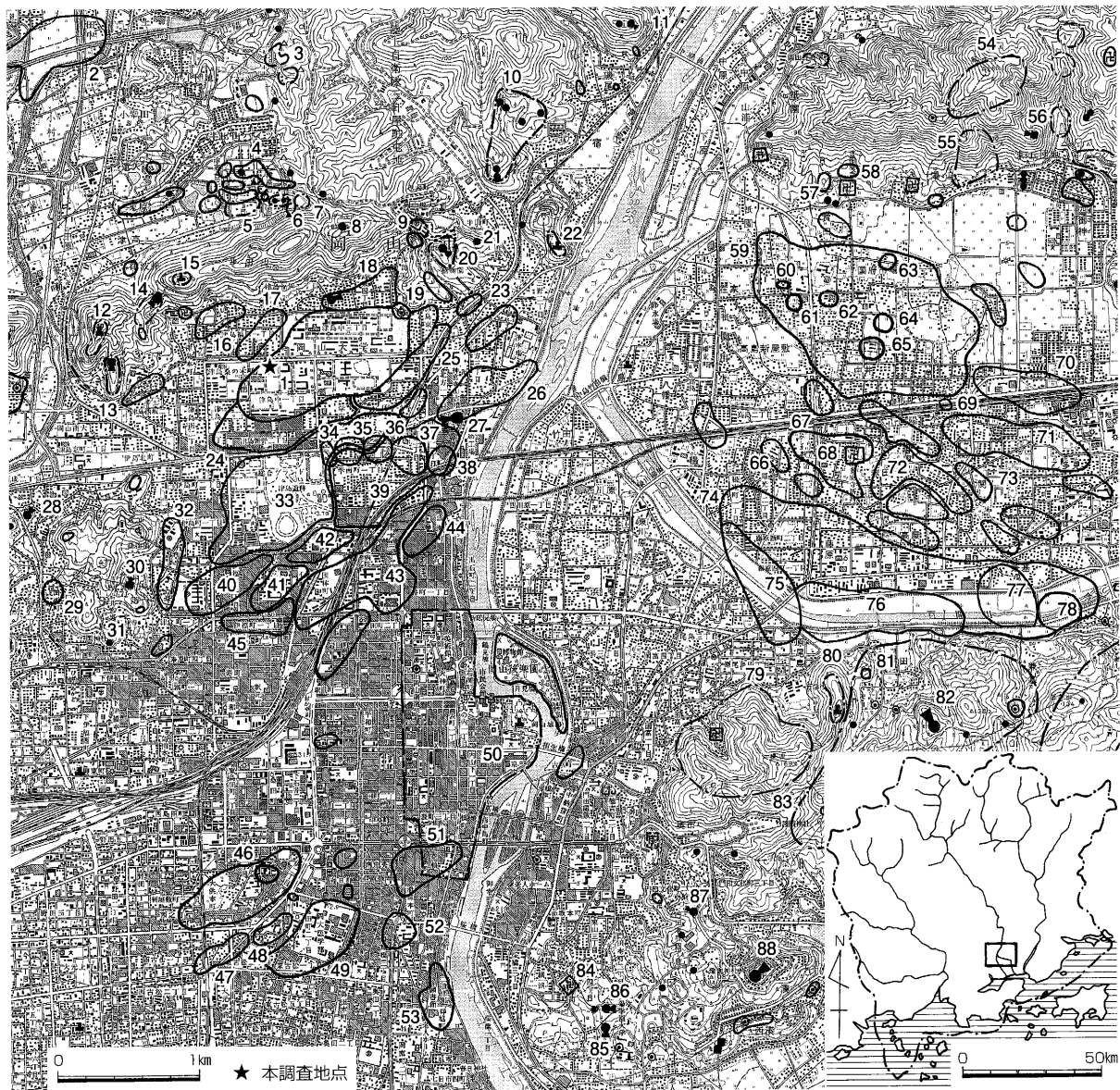
周辺では、縄文時代中期の遺物が百間川沢田遺跡⁽²⁾で認められているが、全体としては希薄な状況である。後期になると遺跡数が増加し、前出の朝寝鼻貝塚のほか、津島岡大遺跡で貯蔵穴・堅穴住居・炉跡などの遺構や、土器・石器等の遺物がまとまって検出されている。縄文時代晩期～弥生時代早期にかけては津島岡大遺跡第3・15次調査地点で貯蔵穴が認められるが、居住域は確認されていない。この時期の遺物は津島岡大遺跡をはじめ、旭川東岸の百間川遺跡群でも認められる。

縄文時代の終わりに北部九州に稲作農耕が導入され、列島各地へと拡散していく過程で、瀬戸内地域へはかなり早い段階に情報もたらされたとみられる。しかし、現在のところ、農耕の存在を示す確実な遺構として縄文時代晩期にまで遡る資料はない。本遺跡周辺における出現期の水田遺構は、弥生時代前期の水田畦畔である。それらは弥生時代早期から前期にかけて形成されたとみられる黒褐色粘質土層上面で検出されており、津島江道遺跡⁽³⁾、北方中溝遺跡・北方地藏遺跡⁽⁴⁾で確認されている。また、国指定史跡である津島遺跡⁽⁵⁾では、弥生時代前期前半に微高地上で堅穴住居・掘立柱建物が、その周辺では水田遺構が確認されている。弥生時代前期から集落の縁辺において水田経営が行われていた状況が窺えよう。

以降も平野部の拡大は続き、農耕技術や水利技術の進展も相俟って生産基盤が安定したことから、微高地上に集落が次々と出現、拡大していく。前出の津島遺跡⁽⁶⁾をはじめ、前期後半から出現する南方遺跡⁽⁷⁾、中期からは絵図遺跡⁽⁸⁾・上伊福遺跡⁽⁹⁾・鹿田遺跡⁽¹⁰⁾、後期には天瀬遺跡⁽¹¹⁾といった、集落遺跡の増加がみられる。

一方、岡山平野の北側の半田山山塊には、弥生時代中期から古墳時代後期にかけて、有力な首長系譜をたどれる弥生墳丘墓、前方後円墳、前方後方墳が相次いで築かれる。すなわち、都月坂2号墳丘墓⁽¹²⁾・1号前方後方墳⁽¹³⁾・七つ坑古墳群⁽¹⁴⁾、ダイミ山古墳、一本松古墳群⁽¹⁵⁾、さらに麓部にはお塚(様)古墳⁽¹⁶⁾が所在している。また、やや東に離れた平野の中に神宮寺山古墳⁽¹⁷⁾が築かれている。これらの墳墓の造営に関わった人々と、本遺跡周辺で検出されている遺構群とは密接な関わりを想定できる。津島遺跡では弥生時代中期から古墳時代初頭にかけても集落域として利用されていた状況がわかっており、津島岡大遺跡では主に耕作域としての利用が窺える水田遺構等が検出されている。

次いで古墳時代後期には、周辺での造墓活動はみられなくなるが、津島遺跡では、遺跡の推定範囲の西端で6世紀初頭の製鉄関連の遺構・遺物が検出されており、注目される。また本遺跡では第6・7次調査地点で水田遺構、第10次調査地点で堅穴住居が検出されており、当該期の集落構造を知る手がかりが少しずつではあるが増加



- | | | | | |
|--------------------------------|----------------------------|----------------------------|------------------------------|-------------------------|
| 1. 津島岡大遺跡 (縄文中期～近世) | 16. 津島福居遺跡 (古墳～室町) | 36. 北方中溝遺跡 (弥生～室町) | 55. 湯迫古墳群 (古墳前期) | 72. 赤田東遺跡・関遺跡 (弥生～室町) |
| 2. 田益田中 (国立岡山病院) 遺跡 (縄文～近世) | 17. お塚 (様) 古墳 (古墳中期) | 37. 北方地藏遺跡 (弥生～近世) | 56. 備前車塚古墳 (古墳前期) | 73. 関遺跡 (弥生) |
| 3. 白壁奥遺跡 (古墳後期) (製鉄他) | 18. 津島東遺跡 (縄文～室町) | 38. 北方敷ノ内遺跡 (弥生～近世) | 57. 唐人塚古墳 (古墳後期) | 74. 百間川遺跡群 (縄文～近世) |
| 4. 津高住宅団地内遺跡群 (古墳他) (製鉄遺跡群を含む) | 19. 朝寝鼻貝塚 (縄文前～後期) | 39. 北方上沼遺跡他 (弥生～近世) | 58. 賞田庵寺 (飛鳥～室町) | 75. 百間川原尾島遺跡 (縄文中期末～近世) |
| 5. 佐良池古墳群 (古墳後期) | 20. 一本松古墳 (古墳中期) | 40. 上伊福遺跡・伊福定国前遺跡 (弥生～近世) | 59. 備前国府関連遺跡 | 76. 百間川沢田遺跡 (縄文中期～近世) |
| 6. 揺鉢池古墳群 (古墳後期) | 21. 不動堂古墳 | 41. 上伊福遺跡 (弥生・古墳) | 60. 備前国府跡 (奈良～平安) | 77. 百間川兼基遺跡 (弥生～室町) |
| 7. 奥池古墳群 (古墳後期) | 22. 妙見山城跡 (戦国) | 42. 絵園遺跡 (弥生～平安) | 61. 備前国府推定地 (南国長) 遺跡 (弥生～鎌倉) | 78. 百間川今谷遺跡 (弥生～古墳) |
| 8. タイミ山古墳 (古墳中期?) | 23. 鎌田遺跡 (弥生他) | 43. 南方遺跡他 (弥生～近世) | 62. 南古市場遺跡 (奈良～平安) | 79. 83. 操山古墳群 (古墳後期) |
| 9. 津島東3丁目第1地点 (弥生・古墳) | 24. 津島新野遺跡 (弥生) | 44. 広瀬遺跡 (弥生) | 63. 北口遺跡 | 80. 妙禪寺城跡 (戦国) |
| 10. 宿古墳群 (古墳前期・後期) | 25. 津島江道遺跡 (縄文～近世) | 45. 上伊福 (立花) 遺跡 (弥生～室町) | 64. ハガ (高島小) 遺跡 (奈良～室町) | 81. 操山219号遺跡 (旧石器) |
| 11. 片山古墳 (古墳前期) | 26. 北方長田遺跡 (弥生～近世) | 46・47. 散布地 | 65. 中井・南三反田遺跡・古墳群 (弥生～室町) | 82. 金藏山古墳 (古墳中期) |
| 12. 烏山城跡 (戦国) | 27. 神宮寺山古墳 (古墳前期) | 48. 鹿田 (県立岡山病院) 遺跡 (平安～鎌倉) | 66. 原尾島遺跡 (弥生～室町) | 83. 操山古墳群 (古墳後期) |
| 13. 七つ坑墳墓・古墳群 (弥生～古墳) | 28. 青陵古墳 (古墳前期) | 49. 鹿田遺跡 (弥生～近世) | 67. 赤田西遺跡 (弥生～室町) | 84. 網浜庵寺 (飛鳥～平安) |
| 14. 都月坂墳墓・古墳群 (弥生～古墳) | 29. 石井庵寺 (奈良?～室町) | 50. 岡山城跡 (室町～近世) | 68. 幡多庵寺 (飛鳥～平安) | 85. 操山109号墳 (古墳前期) |
| 15. 半田山城 (戦国) | 30. 津倉古墳 (古墳前期) | 51. 天瀬遺跡 (弥生～近世) | 69・70. 雄町遺跡 (縄文晩期～平安) | 86. 網浜茶白山古墳 (古墳前期) |
| | 31. 妙林寺遺跡 (弥生) | 52. 新道遺跡 (奈良～近世) | 71. 乙多見遺跡 (弥生) | 87. 操山103号墳 (古墳前期) |
| | 32. 上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡 (弥生～平安) | 53. 二日市遺跡 (弥生～近世) | | 88. 湊茶白山古墳 (古墳前期) |
| | 33. 津島遺跡 (弥生～近世) | 54. 竜ノ口山頂古墳群 (古墳後期) | | |
| | 34. 北方下沼遺跡 (弥生～室町) | | | |
| | 35. 北方横田遺跡 (弥生～室町) | | | |

図1 周辺遺跡分布図 (S=1/50,000・1/2,500,000)

している。この時期、岡山平野で遺跡の活発な動向をたどれるのは旭川の東岸地域で、百間川遺跡群⁽¹⁸⁾・原尾島遺跡⁽¹⁹⁾・湯迫古墳群・操山古墳群等が知られている。

古代においては、岡山平野でも条里制が施行されるが、実際に発掘された遺構例は多くはない。周辺では中溝遺跡⁽²⁰⁾・南方釜田遺跡⁽²¹⁾で条里関連の遺構の検出が認められる。また、津島江道遺跡⁽²²⁾では、古代の建物が発見され、御野郡衙に関連する施設との想定がなされている。本遺跡では第1・3・6・7・9・12・22次調査地点において、東西南北の方位に合致する水田畦畔や東西方向の大溝が検出されている。一方、古代から中世にかけていくつかの荘園の存在が知られており、鹿田遺跡⁽²³⁾・新道遺跡⁽²⁴⁾・大供本町遺跡⁽²⁵⁾では建物群・井戸等の遺構の検出から、撰閑家殿下渡領「鹿田荘」の比定地とされる。この時期には岡山平野の南部でも開墾が一層進んだことが窺える。

中世には耕地造成により、岡山平野北半ではそれまで僅かながら残っていた微高地が消え、平野一面に耕作地が広がったものと推定される。本遺跡でも水田関連遺構が検出されているほか、旭川西岸の鹿田遺跡・二日市遺跡⁽²⁶⁾、東岸の百間川遺跡群⁽²⁷⁾等が当該期の集落遺跡として知られている。近世、特に16世紀以降は、児島湾の干拓が進んで、平野南部は急速に拡大した。水田化はさらに進み、そのなかで本遺跡周辺にあたる御野郡一帯が岡山藩の穀倉地帯となっていたことが知られている。

1907～1908年に御野郡御野村・伊島村に旧陸軍屯営用地が造成された。旧陸軍による造成と、用地利用の痕跡は岡山大学津島地区構内にも随所に認められる。さらに近年の急速な市街化によって、かつての田園風景は一変し、現在に至っている。

第2節 津島岡大遺跡

1. 構内座標の設定

現在、岡山大学津島地区構内では、世界測地系による国土座標第V座標系に基づいて、構内座標を独自に設定している。これは、国土座標系の座標北に軸をあわせたもので、本地区の地割がほぼ東西・南北方向に合致していること、また岡山市街地に残っている条里の地割が正方位となっている状況に対応したものである。

この原点から、一辺50mの間隔で、東西・南北方向に方形の区割りを行った。座標軸の名称は原点を基準に、東西線に関しては北から南へAA～BGライン、南北線に関しては東から西へ00～48ラインとする。50m四方のそれぞれのグリッド名については、東西・南北方向の軸線の名称を組み合わせた北東隅の交点の名称を用いる。したがって、原点はAA00となり、その他の交点についてもAW04、BA08、などと呼称する。

本センターでは従来日本測地系座標に合わせていたが、2002年4月1日に改正された測量法の施行に伴い、2003年度以降に作成する報告書・概報に使用する国土座標を世界測地系へと変更した。変更の際して、構内座標の原点については、従来の構内区割りと整合性を可能な限り保つために、その座標値のみを世界測地系による数値へ変換することとした。原点はこれまで日本測地系による座標値(X = -144,500.0000m、Y = -37,000.0000m)であったものを、新たに世界測地系による座標(X = -144,156.4617m、Y = -37,246.7496m)とした。

2. 遺跡の概要

津島岡大遺跡は、岡山市津島中に所在する岡山大学津島地区にひろがる遺跡の総称である。2007年度までに発掘調査として第30次調査までを終了している(図2)。遺跡の範囲は、大学敷地の西北部にあたる一部地域を除き、構内のほぼ全域にわたると推定される。

旭川に近接する位置かつ半田山丘陵の裾部という立地条件から、縄文時代には数条の流路が入り込んでおり、

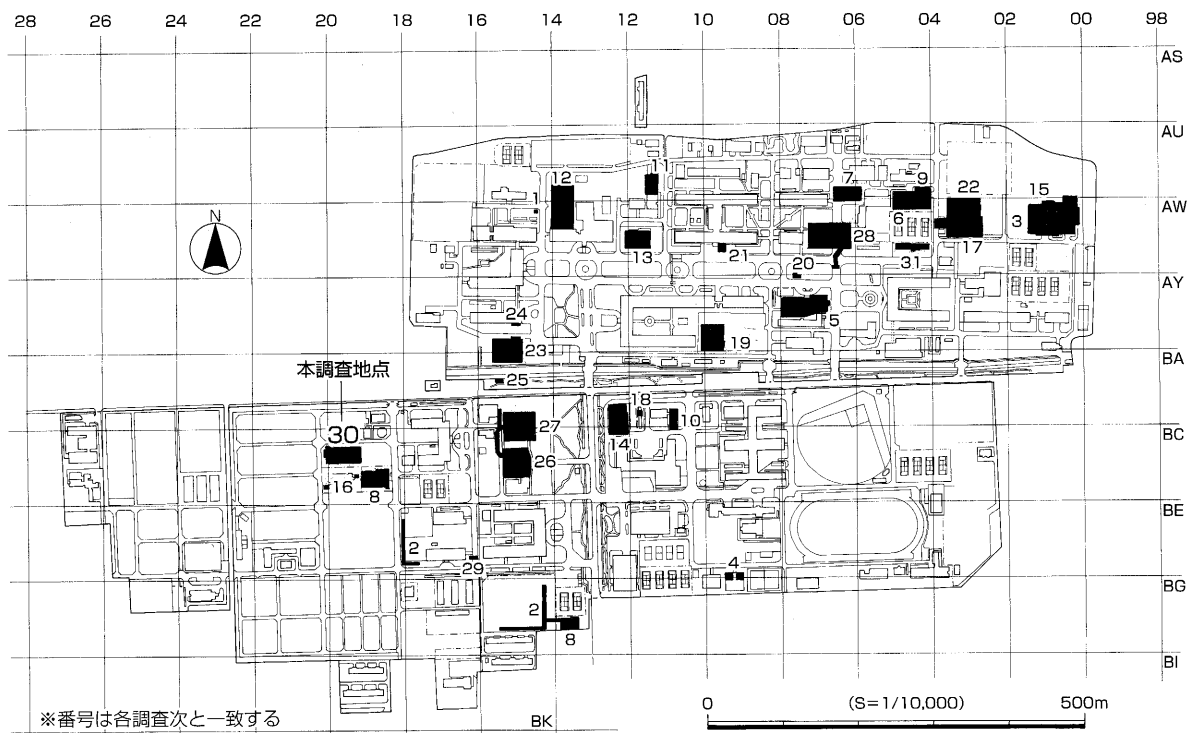


図2 津島岡大遺跡構内座標と各調査地点

低地部と微高地で構成される起伏のある地形が復元される⁽²⁸⁾。また、周辺の植生などの環境についても分析が進みつつある⁽²⁹⁾。

津島岡大遺跡において最も古い遺構・遺物は、第21次調査で確認された縄文時代中期前半頃に属する土坑と土器である。それに続く中期後半では、各地点において遺物の出土が確認されている（第3・15次、17次、19次、27次など）。第17次調査では中期末に比定される土坑2基が検出されているが、大半の地点では遺構の分布は希薄である。

次いで、後期前葉から中葉にかけて、遺構・遺物の出土量は大幅に増加し、集落構造を解明する資料の蓄積が進んでいる。本遺跡の北東部にあたる第3・15次調査地点から第17・22次調査地点を経て第6・9次調査地点に至る東西約300m程度の範囲では、微高地部に竪穴住居・大形土坑・ピット群・炉・焼土遺構・溝、河道部には貯蔵穴群が集中する。出土遺物も質量とも他の地点とは際立った状態を示しており、本遺跡における居住域の実態を示している。河道を挟んだ第5次調査地点では、貯蔵穴群とともに後期中葉の遺物が確認されている。この時期以降の後期後葉から晩期前半の資料は遺跡内で希薄な状況である。一方、居住域周辺部には炉跡と考えられる焼土を伴う遺構が見つかる地点が点在しており（第7・11～13・27・8a次調査など）、居住域周辺にも人間活動がおよんでいたようである。

弥生時代早期から前期には、「黒色土」と呼称している黒褐色の土壌化層が津島地区一帯に確認される。早期の突帯文土器は、「黒色土」中に含まれており、標識資料とされる第3・15次調査地点などの遺跡北東部だけでなく、第2・23次調査・事務局本部棟立会調査地点といった遺跡南東部にも分布がみられる。「黒色土」の上面には、小区画がなされた弥生時代前期の水田畦畔が残されている場合が多く、弥生時代開始期の農耕の実態を解明するうえでも津島岡大遺跡一帯は重要な地域といえる。

弥生時代前期末から中期初頭の時期には、それまで遺跡内で流路を構成していた河道や谷部の多くが洪水によって埋没し⁽³⁰⁾、微高地部の拡大が進行する（第3・15・5・19次調査など）。続く中期の資料は、第8・12次調

査地点などで溝が報告されている。

後期初頭に入ると、新たな集落形成が確認される。居住域は、第10次調査地点周辺に想定され、後期初頭には遺物を多量に含む土坑群が集中し、古墳時代初頭では井戸がみつがっている。耕作関連では、後期から古墳時代初頭にかけて用水路が遺跡全域で確認できる(第3・6・12・15・19・27次調査など)。第12次調査では、整備された後期初頭の大溝から土器・木器が多数出土している。水田畦畔は、第3・5・15次調査で確認される。こうした成果は、弥生時代において中核的集落である津島遺跡の周縁部の様相を解明するうえで重要である。

古墳時代では、引き続き水田経営がなされるが、集落内では、後期の鍛冶の存在が明らかになっている。第10次調査地点において、竪穴住居の周囲に鍛冶関連遺構が検出され、鉄滓・炉壁なども出土しているほか、第19次調査地点でも鉄滓が確認されており⁽³¹⁾、集落内での手工業生産の一端を窺うことができる。

古代には、条里関連の遺構として、坪境と推定される東西方向の大溝が検出されている(第1・3・6・7・9・12・22次調査)。そのほかに水田畦畔が、第3・6・7・9・12・15次調査地点において確認された。集落に関しては、第8・10次調査地点にその可能性が考えられる。

中世後半では、大規模な土地造成がなされる。一定の規模を有する土地造成は、遅くとも古代段階には既に行われていたことが土層の堆積状況から推定されるが、中世層からは、少量ながら円筒埴輪片が幾つかの調査地点から出土しており、当該期の造成が古墳を破壊するほどの従来になく大規模なものであったことが窺える。その結果、広域におよぶ地形の平坦化が大きく進行したようである。また、それに際して、条里関連の溝の形状変化や位置のずれ(第12次調査)あるいは集落の移動(第10次調査)などが認められる。そのほか、耕作関連遺構においても、比較的小規模な区画を残す古代の畦畔が消失し、面積が拡大した田面に多数の鋤痕がみられるようになり、耕作形態の大きな変化を垣間見ることができる(第6・9次調査など)。

近世においても、耕作地として利用された痕跡を随所でみることができる。規格の整った用水路が、東西方向では古代の大溝をほぼ踏襲する位置に確認されている。同様の用水路は、第26次調査地点においても検出されている。これらの用水路にはしばしば水門が設けられており、当時の水利調整構造を窺い知ることができる。また、こういった用水路の縁辺には土坑が設けられていることが多く、その分布は耕作地の区割りを推定する材料となる。

近世のこのような耕作地を主とする土地利用の状況は、1907～1908年に日本陸軍が駐屯地の設営のために大規模な造成によって埋め立てるまで、近代になっても基本的には継続していたようである。

(『津島岡大遺跡18』第1章から転載、一部加筆・修正)

註

- (1) 富岡直人 1998『朝寝鼻貝塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書2
- (2) 二宮治夫 1985『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
- (3) 日本考古学協会静岡大会実行委員会編 1988『津島江道遺跡』『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』
- (4) 岡田 博 1998 岡山県古代吉備文化財センター『北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地藏遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
- (5) 津島遺跡調査団 1969『昭和44年度岡山県津島遺跡調査概報』岡山県教育委員会 1970『岡山県津島遺跡調査概報』
 - 島崎 東ほか 1999『津島遺跡1』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137
 - 平井 勝 2000『津島遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151
 - 島崎 東ほか 2003『津島遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
 - 岡本泰典 2004『津島遺跡5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
 - 島崎 東ほか 2005『津島遺跡6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告190
- (6) 註5および杉山一雄 1999『津島遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告145
- (7) a 岡山市遺跡調査団 1971『南方遺跡発掘調査概報』
 - b 岡山市遺跡調査団 1981『南方(国立病院)遺跡発掘調査報告』
 - c 岡山県教育委員会 1981『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
 - d 内藤善史 1996『絵図・南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
 - e 岡山市教育委員会 1996『上伊福・南方(済生会)遺跡(南方蓮田調査区)Ⅰ・Ⅱ』
 - 『上伊福・南方(済生会)遺跡(上伊福立花調査区)Ⅱ』『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1994年度
 - f 岡山市教育委員会 1997『上伊福・南方(済生会)遺跡(南方蓮田調査区Ⅱ)』『南方(中電)遺跡』
 - 『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995年度

地理的・歴史的環境

- g 澤山孝之・平井泰男 2006『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告196
 h 下澤公明ほか 2006『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告200
- (8) 註7d
- (9) a 岡山県教育委員会 1984「上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』14
 b 中野雅美・根木 修 1986「上伊福九坪遺跡」『岡山県史 考古資料』
 c 杉山一雄 1998『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125
- (10) 吉留秀敏・山本悦世 1988岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第3冊
 小林青樹 2000「鹿田遺跡第9次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』16 1998年度
 喜田 敏・岩崎志保 2000「鹿田遺跡第9次調査追加」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』17 1999年度
- (11) 出宮徳尚 1986「天瀬遺跡」『岡山県史 考古資料』
 (12) 近藤義郎 1986「都月坂二号弥生墳丘墓」『岡山県史 考古資料』
 (13) 近藤義郎 1986「都月坂一号墳」同上
 (14) 七つ坑古墳群発掘調査団 1987『七つ坑古墳群』
 (15) 近藤義郎 1986「一本松古墳」『岡山県史 考古資料』
 (16) 近藤義郎 1988「岡山市津島の俗称『おつか』と称する前方後円墳についての調査の概要報告」『古代吉備』10集
 (17) 鎌木義昌 1986「神宮寺山古墳」『岡山県史 考古資料』
 (18) 宇垣匡雅 1999「百間川原尾島遺跡3」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
 平井 勝 1995「百間川原尾島遺跡4」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
 (19) 宇垣匡雅 1999 岡山県古代吉備文化財センター『原尾島遺跡（藤原光町3丁目地区）』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告139
 (20) 日本考古学協会静岡大会実行委員会 1988「中溝遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』
 (21) 日本考古学協会静岡大会実行委員会 1988「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』
 (22) 高畑知功 1988「津島江遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告18』
 (23) 註10および山本悦世 1990「鹿田遺跡Ⅱ」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第4冊
 松木武彦 1993「鹿田遺跡3」岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊
 (24) 草原孝典 2002『新道遺跡』
 (25) 岡山市教育委員会 2006「大供本町遺跡発掘調査現地説明会資料』
 (26) 出宮徳尚 1985「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』35
 (27) 註18および岡山県教育委員会 1981「百間川長谷遺跡 当麻遺跡Ⅰ」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告46
 同 1982「百間川当麻遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
 同 1984「百間川原尾島遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
 岡山県古代吉備文化財センター 1989「百間川米田遺跡3」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74
 柳瀬昭彦 1996「百間川原尾島遺跡5」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
 (28) 山本悦世 2004「縄文時代後期の集落構造とその推移」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2003』
 (29) 山本悦世 2006「構内遺跡における発掘調査資料の自然科学的分析」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』
 (30) 野崎貴博 2003「岡山平野における弥生時代前期～中期の洪水と集落の動態」『津島岡大遺跡12』
 (31) 川鉄テクノリサーチ 2004「津島岡大遺跡（第10次・第19次調査）出土鉄滓類の分析」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2004』

表1 津島岡大遺跡文献一覧

記号	調査次	文 献	発行年
a	1	岡山大学津島北地区小橋法日黒遺跡（AW14区）の発掘調査（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第1集）	1985
b	2	岡山大学津島地区遺跡群の調査Ⅱ（農学部構内BH13区他）	1986
c	3	津島岡大遺跡3（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第5冊）	1992
d	4	岡山大学構内遺跡調査研究年報4	1987
e	5	津島岡大遺跡4（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第7冊）	1994
f	6・7	津島岡大遺跡6（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第9冊）	1995
g	8	津島岡大遺跡5（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第8冊）	1995
h	9	津島岡大遺跡10（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第14冊）	1998
i	10・12	津島岡大遺跡11（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第16冊）	2003
j	11	津島岡大遺跡7（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第10冊）	1995
k	13	津島岡大遺跡8（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第12冊）	1997
l	14	津島岡大遺跡9（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第13冊）	1996
m	15	津島岡大遺跡14（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊）	2004
n	16	岡山大学構内遺跡調査研究年報14	1997
o	17・22	津島岡大遺跡16（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊）	2005
p	18	岡山大学構内遺跡調査研究年報16	2000
q	19・21	津島岡大遺跡12（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第17冊）	2003
r	20	岡山大学構内遺跡調査研究年報16	2000
s	23・24	津島岡大遺跡17（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第22冊）	2006
t	25	岡山大学構内遺跡調査研究年報18	2001
u	26	津島岡大遺跡15（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第20冊）	2005
v	27	津島岡大遺跡13（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第18冊）	2003
w	28	津島岡大遺跡18（岡山大学構内遺跡発掘調査報告第24冊）	2008
x	29	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002	2003
y	30	本書	2009

第2章 調査の経過と概要

第1節 調査にいたる経過

2007年、岡山大学津島地区に岡山大インキュベータの新設が計画され、新営予定地として津島南地区西半に位置する薬学部棟西側の区画が割り当てられた。予定地周辺では、これまでに第8次調査（遺伝子実験施設）、第16次調査（動物実験棟）の2件の発掘調査を実施していた。その成果から、①縄文時代後期には微高地が広がり、その間に南北方向の低地が通る地形が展開すること、②遺構・遺物の密度は高くはないものの、縄文時代後期から近世にいたるまでの各時期にわたる遺構・遺物が分布すること、が予測された。また、新営予定地は、近世・近代の条里の里境にあたとみられる東西方向の区画溝を確認した第26次調査（事務局本部棟）地点から西に約200mの延長線上に位置している。したがって、当地点でも条里の区画を明示する遺構が確認されることが予測された。そのため、施設の建設に先立ち、発掘調査を実施することとした。なお、周辺の発掘調査成果を参考にすることで、包含層の厚みおよび遺構・遺物の有無が推測できたため、試掘・確認調査は実施しなかった。

発掘調査は2007年8月1日～12月17日まで、約4ヶ月半の期間で実施した。調査面積は1,035.4㎡で、調査員2名がこれにあたった。

第2節 調査体制

調査主体	岡山大学	学長	千葉 喬三
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	梶原 憲次
調査研究員	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	助 教	野崎 貴博（主任）
	〃	助 教	池田 晋

運営委員会

【委員】 発掘調査年度（2007年度）	【委員】 報告書作成年度（2008年度）		
センター長（理事）	梶原憲次	センター長（理事）	北尾善信
副センター長（大学院社会文化科学研究科教授）	稲田孝司	副センター長（大学院社会文化科学研究科教授）	新納 泉
大学院社会文化科学研究科教授	新納 泉	大学院社会文化科学研究科教授	久野修義
大学院社会文化科学研究科教授	久野修義	大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚愛二
大学院医歯薬学総合研究科教授	大塚愛二	大学院自然科学研究科教授	柴田次夫
大学院自然科学研究科教授	柴田次夫	大学院環境学研究科教授・環境理工学部長	沖 陽子
大学院環境学研究科教授・環境理工学部長	沖 陽子	埋蔵文化財調査研究センター教授（調査研究室長）	山本悦世
埋蔵文化財調査研究センター准教授（調査研究室長）	山本悦世	施設企画部長	山下隆幸
施設企画部長	入江良広		

第3節 調査の経過

発掘調査に先立ち、近・現代の造成土〈1層〉と近代の耕作土〈2層〉については、2007年7月23～30日の期間に重機を用いて除去した。調査地点には1907（明治40）年以降、終戦まで旧陸軍第十七師団歩兵聯隊等が駐屯し、兵舎等が建造されていたことが記録されている。造成土除去の際に、記録に合致する旧陸軍歩兵第十聯隊兵舎建物の基礎を確認することができた。

重機による造成土掘削は6日間で終了し、2007年8月1日より、調査員2名が担当して本格的な発掘調査を開始した。近・現代の造成土と近代の耕作土を除去した段階で近・現代の攪乱の清掃と〈3層〉



図3 古代の道路状遺構の調査風景

上面の精査を実施し、水門を伴う条里の区画溝と土坑群、耕作地内に地割に沿って縦横に掘削された小溝群を検出した。以降、近世、中世から古代へと遡りながら耕作地の調査を進めた。なお、近世・中世の遺構面については、調査区の周囲と中央に設定した東西・南北方向の土層観察用断面で堆積状況と遺構の状況を確認し、浅い溝状の耕作痕や溝の存在が確認された〈3層〉、〈4層〉、〈8層〉上面で遺構検出を行った。その結果、近世の耕作面である〈3層〉、〈4層〉上面においては土坑群や耕作痕、中世の耕作面である〈8層〉上面においては鋤溝と考えられる耕作痕を確認した。

10月中旬には中世層の調査を終了させ、古代層と考えられた〈9層〉の調査に着手した。〈9層〉の調査では、調査区西半の土層観察用断面において溝状の落ちこみを確認した。この落ちこみはいくつかの断面で確認され、それらをつなぎ合わせると、ほぼ正方位に合致する南北方向、東西方向にのびる溝状の遺構であることが予測できた。調査の進行にともない、2条の溝が並行して側溝となる道路状遺構の様相が次第に明らかとなった。古代の道路状遺構の調査成果については、11月19～29日の期間で一般に公開した。そのほか、岡山大学文学部考古学講座、理学部地質学講座が講義の一環として発掘現場を見学し、その際、調査成果についての説明を行った。

調査区西半における古代の道路状遺構の調査成果の公開期間には、調査区東半の北側から調査を進行させ、東西方向に掘削された溝群を検出した。これらの溝群は出土した土器や層位から、弥生～古墳時代後期の溝群であると考えられるものであった。

これらの溝群の調査終了後、津島地区で広く認められ、上面で弥生前期の水田が検出される「黒色土」と呼称している〈11層〉の精査を行った。特に調査区東半では、上面がややたわんで低くなっていたため、前期水田を検出できる可能性があると考え、検出に努めたものの、畦畔は残存しておらず、水田遺構の確認には至らなかった。そこで〈11層〉を除去して縄文時代後期の基盤層まで掘り下げることとした。その過程で、調査区東半をほぼ南北に通る低位部に厚く堆積した〈11層〉中から一定量の突帯文土器や石器が出土した。

その後、縄文時代後期の基盤層である〈12層〉では、微高地上で土坑群やピットを検出したほか、低位部斜面で焼土・炭化物集中部を検出し、これらの調査をすべて終了した12月17日に本調査を終了した。

なお、調査終了後、2007年12月18日に愛媛大学田崎博之氏、宮崎大学宇田津徹朗氏によるプラント・オパール分析のための土壌サンプル採取を実施した。

第4節 調査の概要

①縄文時代～弥生時代前期

調査区西半では北側に向けて緩やかに高まる微高地を、調査区東半では南北に谷状にのびる窪地部を確認した(図4)。窪地部は第8次調査で確認した微高地に向けて高まっていくものとみられる。この微地形の起伏は弥生時代前期まで継続している。微高地上で土坑8基、ピット15基を確認した。遺構の分布は希薄だが、比較的まとまった量の突帯文土器の出土がみられ、遺構の多くはこの時期に帰属するとみられる。窪地部の底面に近い東側斜面では、¹⁴C測定の結果、縄文時代後期前葉の年代が得られた炭化物・焼土の集中部が確認され、この時期頃からすでに少なからず人間活動が及んでいたことが明らかになった。サヌカイト剥片の一定量の出土とともに、遺構密度の割に石鏃の出土が比較的多いことも、生活域との関係を検討する上で注意される。

②弥生時代～古墳時代

溝6条、ピット1基を検出した。溝5条は切り合い関係をもちながら、調査区北辺を東西に横断している。これらの溝群はいずれも東から西へ流れる水路として、場所をわずかに移しながら繰り返し掘削されたものと考えられる。これらの溝群の下限は古墳時代後期である。もう1条は、調査区南西隅において北側の肩の一部を確認した、やはり東西方向の溝である。この時期の堆積層の多くは古代の土地造成の際に失われていると考えられ、地形については不明だが、これらの溝の掘削方向は縄文時代以来の自然地形の起伏の影響を受けていた可能性がある。この時期の出土遺物は非常に少量である。

③古代

道路状遺構(溝5条)、ピット11基、耕作痕を確認した。溝5条は、2条で対となり、いずれも道路状遺構の側溝となるものである。これらの溝に挟まれた空間は、周囲よりもわずかに高まっており、道路および耕作域を区切る畦畔として機能していたものとみられる。溝は、ほぼ正確に東西南北を指向しており、道路部分は北・東・西にのびる逆T字状の三叉路となっている。道路状遺構の幅は、側溝の芯々間で計測して南北方向が3.7～4.1m、東西方向が1.6～3.6mである。時期は、溝の出土遺物から10世紀と考えられる。ピットは、道路状遺構の周辺に分布する傾向があるものの、明瞭な規則性はみられない。中世・近世段階の耕作面にみる地割とやや位置を移しているものの、これらは条里に関連する遺構とみることができる。

検出した道路状遺構は、岡山平野の条里の推定地割にしたがえば、南北方向の道路部分は坪境に、東西方向は里境に相当する。同じく古代後半の坪境の区画をなすとみられる第1・3・6・7・9・12・22次調査で確認した東西にのびる一連の大溝とは、芯々間の距離を測ると、第12次調査地点とは327m、22次調査地点とは340mを測り、およそ3町分に相当することになる。

④中世

調査区のほぼ全域にわたって鋤溝とみられる耕作痕を確認した。調査区のほぼ中央部を境にして(19-50ラインより東へ1m)、西側では南北方向に、東側では東西方向に耕作痕が走向しており、耕作地の区画の境界を反映している可能性がある。この境界線の位置は、古代の道路状遺構の側溝の芯の中軸から測ると、東へ12～13mほど移動している。出土遺物から13世紀の耕作面の状況と考えられ、10世紀を挟む期間に耕地の再編が存在した可能性を示唆する成果として注意すべきものである。

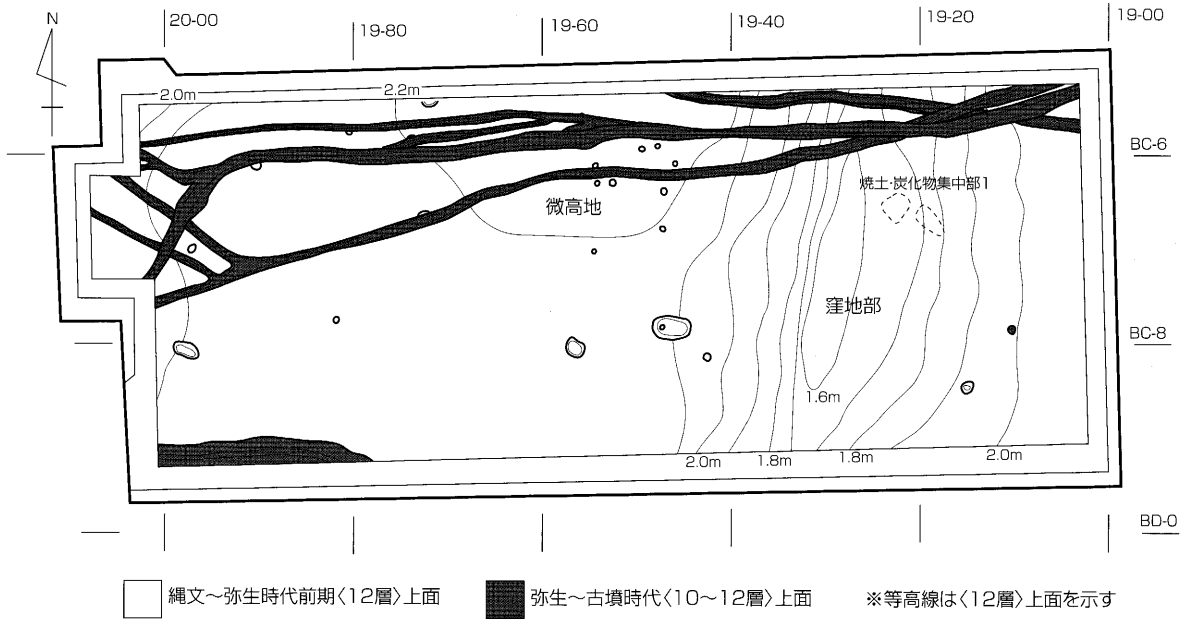
⑤近世・近代

近世の遺構は上層・下層の2面で確認した。近世下層では、土坑7基、溝7条、耕作痕を検出した。溝・耕作痕の掘削方向は、中世の耕作面の状況と非常に似ている。近世上層では、土坑13基、溝10条(水門2基、杭集中部1箇所を含む)、畦畔・段・耕作痕を検出した。土坑は、里境にあたりとみられる東西方向の溝18および中世以

調査の経過と概要

来の地割ライン付近に分布する傾向がある。溝18内に設置された水門およびこれらの土坑を接続するように縦横に走る小溝は、同時期の灌漑施設として機能していた可能性がある。なお、溝18は陸軍造営の際の造成土で埋没しており、1907年までは使用されていたものである。掘削時期が近世のどの段階まで遡るかは、北側の肩部を陸軍兵舎の基礎で破壊されており、不明である。

<縄文時代～古墳時代の遺構>



<古代～近世の遺構>

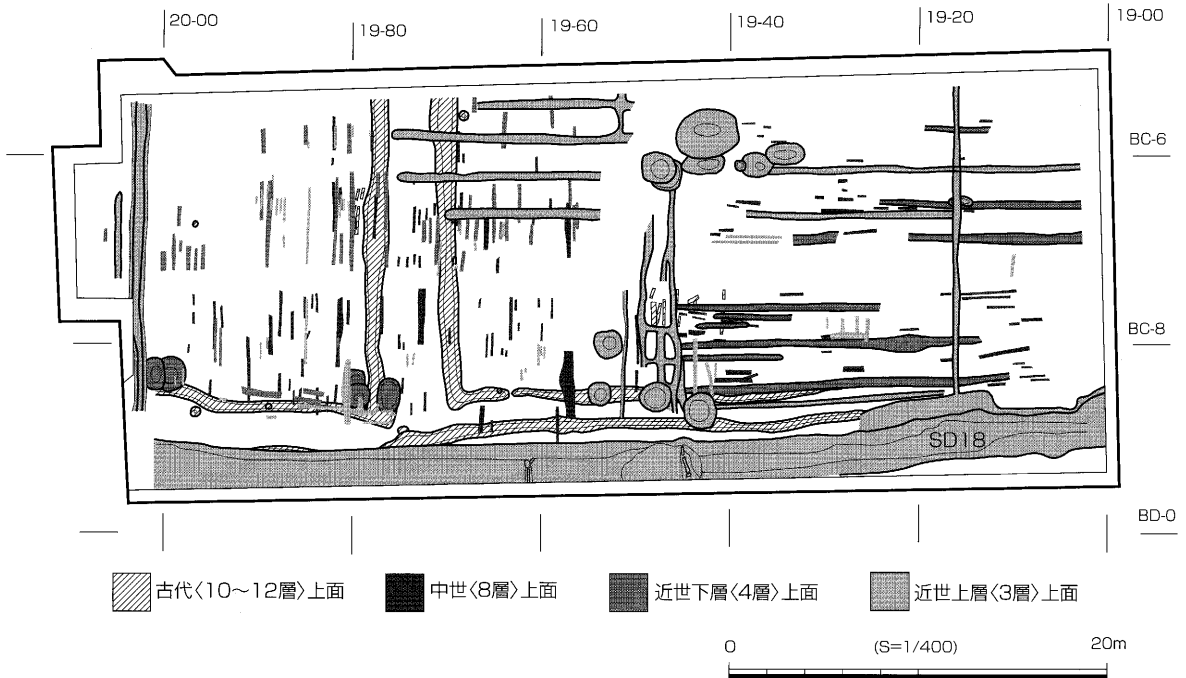


図4 検出遺構全体図

表2 検出遺構一覧

a. 焼土・炭化物集中部

番号	時期	地区	平面形	断面形	規模 (cm)			底面標高 (m)
					長辺	短辺	深さ	
1	縄文時代後期	BC19-16・26	-	-	290	180	-	1.41

b. 土坑

番号	時期	地区	平面形	断面形	規模 (cm)			底面標高 (m)
					長辺	短辺	深さ	
1	縄文時代後期	BC19-18	円形	U字形	65	60	30	1.59
2	弥生時代早期	BC19-47	楕円形	皿形	201	130	20	1.92
3	縄文後期～弥生早期	BC19-58	不整形円形	皿形	107	88	10	2.00
4	弥生時代早期	BC19-75	不整形円形	皿形	64	(32)	12	2.13
5	弥生時代早期	BC19-75	不整形円形	U字形	59	57	26	1.94
6	弥生時代早期	BC19-76	不整形円形	U字形	73	66	30	1.87
7	弥生時代早期	BC19-96	楕円形	逆台形	104	(57)	34	1.81
8	縄文後期～弥生早期	BC19-98	不整形楕円形	皿形	146	79	17	1.99
9	近世	BC19-78	隅丸方形	箱形	164	108	50	2.12
10	近世	BC19-78	-	-	(52)	(18)	-	-
11	近世	BC19-78	-	-	(40)	(76)	-	-
12	近世	BC19-78	(隅丸方形)	逆台形	(70)	92	60	2.10
13	近世	BC19-78	不整形円形	半円形	132	108	53	2.15
14	近世	BC19-98	円形	逆台形	176	(150)	150	1.38
15	近世	BC20-08	方形	逆台形	144	94	96	1.74
16	近世	BC19-16	長楕円形	不整形	102	39	8	2.78
17	近世	BC19-35～36	長楕円形	すり鉢形	179	96	42	2.12
18	近世	BC19-36	楕円形	U字形	150	102	86	1.84
19	近世	BC19-36	方形	丸底	47	-	10	2.60
20	近世	BC19-46	長楕円形	U字形	122	61.5	48	2.19
21	近世	BC19-46	長楕円形	U字形	186	(83)	45	2.22
22	近世	BC19-45	楕円形	半円形	297	231	71	2.05
23	近世	BC19-46	円形	箱形	153	-	41	2.29
24	近世	BC19-46	不整形円形	箱形	164	144	71	2.12
25	近世～近代	BC19-48	円形	箱形	177	171	81	2.05
26	近世	BC19-48	円形	箱形	155	144	59	2.26
27	近世	BC19-57～58	隅丸方形	逆台形	117	108	92	1.83
28	近世	BC19-58	隅丸方形	(逆台形)	98	90	(23)	(2.50)

c. 溝

番号	時期	断面形	方向	規模 (cm)		底面標高 (m)
				幅	深さ	
1	弥生～古墳時代	逆台形	西北西-東南東	40～70	43～57	E1.88→W1.73
2	弥生～古墳時代	U字形	東北東-西南西	30～70	11～29	2.05～2.10
2a	弥生～古墳時代	U字形	北西-南東	30～45	24	1.97
2b	弥生～古墳時代	皿形	北西-南東	30	7	2.12
3	弥生～古墳時代	皿形～逆台形	東-西	25～40	7～10	E2.19→W2.13
4	弥生～古墳時代	皿形	東北東-西南西	20～45	3～8	E2.26→W2.20
5 (古)	弥生～古墳時代	-	-	115	-	(1.98)、(2.05)
5 (新)	古墳時代後期	U字形	東-西、北東-南西	50～120	26～49	E2.05→W1.88
5a	古墳時代後期	皿形	北西-南東	45～70	12～22	W2.10→E2.00
5b	古墳時代後期	皿形	東-西	20	3	2.18
6	弥生～古墳時代	皿形	東-西	(135)	31	2.01
7	古代後半	皿形	北-南、東-西	30～140	12	2.19
8	古代後半	皿形	北-南、東-西	40～160	16	2.07
9a	古代後半	皿形	東-西	30～65	20	2.12
9b	古代後半	皿形	東-西	30～130	12	2.17
10	古代後半	皿形	北東-南西	50	7	2.28
11	近世	皿形	東-西	16	3	2.65
12	近世	皿形	東-西	32	6	2.63
13	近世	皿形	東-西	32	4	2.61
14	近世	丸底	東-西	34	6	2.61
15	近世	丸底	東-西	18	3	2.63
16	近世	丸底	東-西	24	4	2.63
17	近世	丸底	東-西	36	7	2.62
18	近世～近代	逆台形～U字形	東-西	292	72	2.42
19	近世	箱形～逆台形	北-南	20～40	6	2.78
20	近世	箱形	東-西	20～30	8	2.76
21	近世	箱形～逆台形	北-南、東-西	25～35	12～15	2.67～2.75
22	近世	皿形	東-西	34～60	4	2.84
23	近世	(皿形)	東-西	30～40	2	2.85
24	近世	(皿形)	東-西	28～48	3～5	2.72
25	近世	皿形	東-西	30～46	3～4	2.72
26	近世	逆台形	北-南	20～30	3	2.60～2.66

() は残存の実測値を示す

第3章 調査の記録

第1節 調査地点の位置と区割り

1. 調査地点の位置

本調査地点は津島南地区西半、薬学部西側に位置している(図5)。津島地区構内に設定している構内座標ではBC19・20区にあたる。津島岡大遺跡の西端にあたり、津島地区におけるこれまでの発掘調査の中でもっとも西側に位置する調査地点の一つとなる。調査以前は駐車場として利用されており、それ以前には動物飼育施設が置かれていた。調査地点西側には農場が広がっている。

本調査地点の南側には第8次調査A地点(遺伝子実験施設)、第16次調査地点(動物実験棟)が位置する。また、東約200mの地点に、第26次調査地点(事務局本部棟)、第27次調査地点(創立五十周年記念館)が位置する。

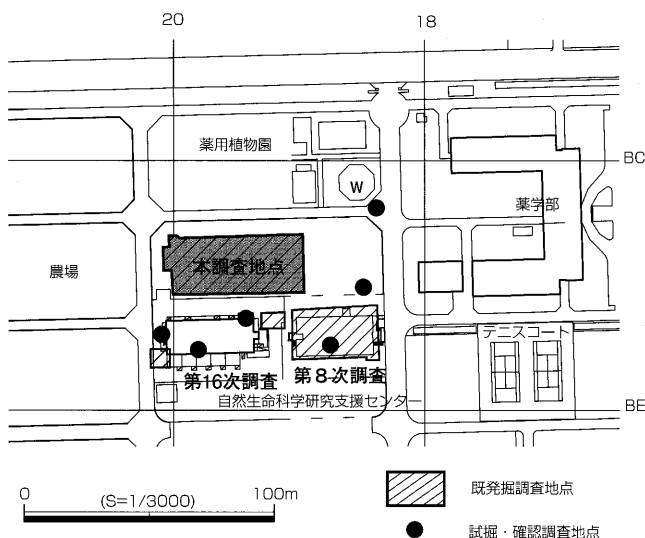


図5 発掘調査地点

2. 調査地点の区割り

遺構の位置の記載に際して、50m区画の構内座標をさらに5m区画に細分した区割りを使用している。その区割りに従うと、調査区は東側がBC19-05~BC18-99、西側がBC20-15~BC20-09の間に収まることになる(図6)。

発掘調査にあたって、調査区を便宜的に4等分し、包含層出土遺物の取り上げの単位とした。分割線は、南北が19-50ラインから西へ2.0m、東西がBC-7ラインから南へ1.5mに位置する。区画名は、北東を1区、南東を2区、北西を3区、南西を4区とした。

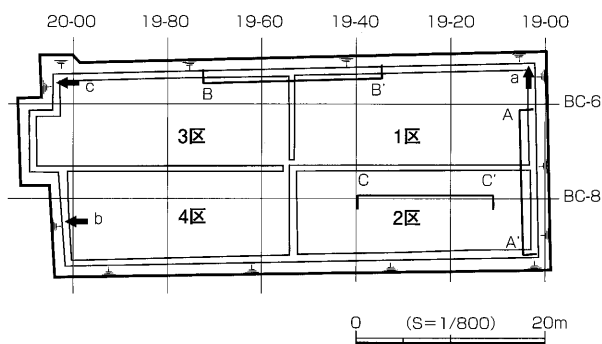


図6 調査区の区割りと断面位置

第2節 層序と地形

1. 層序

断面観察用ベルトは、調査区中央の区割りの分割線に沿わせるように十字に設定した(図6)。また、堆積状況を確認するためのサブトレンチ・断面観察用ベルトを、区割りをさらに等分するかたちで随時設定した。基本層序を記録したのは、調査区四周、中央の南北・東西ベルト、1区・2区内にそれぞれ設定した東西ベルト(〈10層〉~〈12層〉のみ記録)である。

ここでは、自然地形の推移をよく示す北壁中央部（B断面）・2区東西ベルト（C断面）に加えて、調査区全体の基本的な堆積状況を示す東壁（A断面）の断面図を示した（図7、8）。その他の地点については、調査区隅の堆積状況を柱状図に示し、調査区全体の地形の変化を代表させた（a～c断面）。

〈1層〉 造成土である。1907～1908年に実施された旧日本陸軍駐屯地造営に伴う造成土である黄橙褐色砂質土（真砂土）、および岡山大学設置以降の造成土（褐色土）である。現地表面の標高は3.65～4.0mである。

〈2層〉 灰色砂質土である。近代の耕作土層で、形成時期の下限が1907年である。径2～4mm程度の細礫を多く含み、層下部に管状に鉄分の沈着が特徴的に認められる。上面の標高は約2.9～3.0mである。

〈3層〉 明橙褐色砂質土で、近世の耕作土層である。上面の標高は約2.75～2.9mである。調査区東半では層厚約20cm、西半では約10cmとなり、調査区のほぼ中央の19-50ライン付近に位置すると考えられる当時の条里の坪境付近で東西の耕作面に比高差が存在する。東半では4層（a～d層）に細分でき、層内に複数の耕作面が存在した可能性が高い。〈3 a層〉は明橙褐色砂質土で、鉄分を多く含む。〈3 b層〉は黄褐色砂質土、〈3 c層〉は淡黄褐色砂質土である。〈3 d層〉は灰白色細砂で、〈4層〉上面を覆う洪水砂である。調査区東端一帯でのみ確認できた。〈3 a層〉～〈3 c層〉はこの洪水砂を母材にして形成された耕作土層と考えられる。〈3 d層〉は、〈4層〉上面の耕作痕の埋土としても観察され、上層からの攪拌が及ばなかった範囲にのみ残存したものと考えられる。〈3層〉中からは微量ながら近世陶磁器片が出土している。

〈4層〉 灰黄褐色土で、近世の耕作土層と考えられる。マンガンが顕著に認められる点の特徴である。上面の標高は約2.6～2.7mである。〈4～7層〉は地点によって包含物の量や層相に多少の変異は認められたが、類似した層相・色調を呈す。〈4 a層〉は北壁の一部で確認でき、上層との攪拌によって生じたものとみられる。

〈5層〉 灰褐色土で、中世～近世の耕作土層と考えられる。上面の標高は約2.55～2.65mである。〈4層〉よりもマンガンの含有量が少ない。

〈6層〉 灰黄褐色土で、中世～近世の耕作土層と考えられる。上面の標高は約2.5～2.55mである。

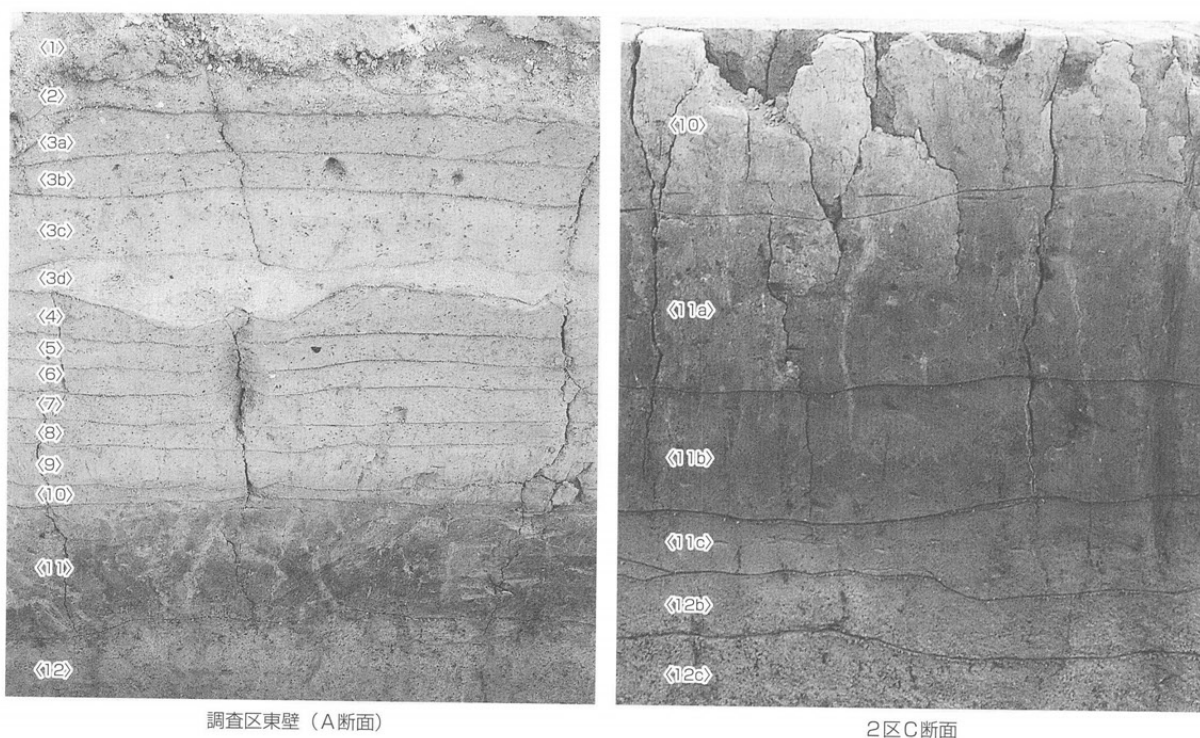


図7 調査区断面図1

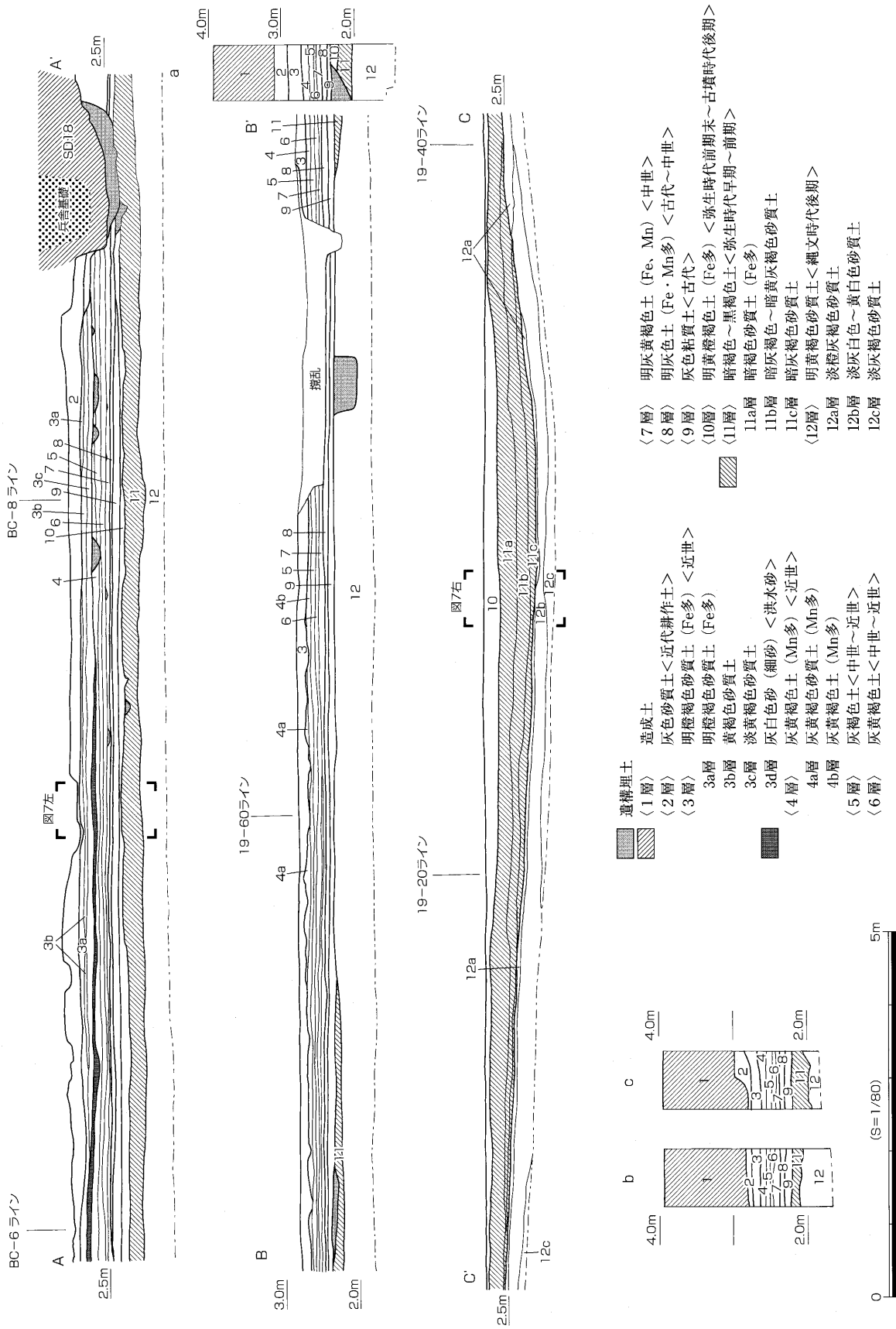


図 8 調査区断面図 2

〈7層〉 明灰黄褐色土で、中世の耕作土層と考えられる。上面の標高は約2.4～2.5mである。〈4層〉から〈7層〉の出土遺物は、13世紀後半から14世紀を主体とするが、少量ながら近世に入るとみられる遺物が含まれており、〈4層〉は近世の耕作土層になる可能性がある。

〈8層〉 明灰色土で、古代後半から中世の耕作土層と考えられる。〈8層〉上面からは亀山焼・青磁碗の破片が出土しており、13世紀頃の耕作面をなすと考えられる。鉄分の沈着、マンガンの集積が顕著に認められる。層相・色調は〈9層〉に類似しており、上層における耕作の影響を受けて〈9層〉が変質したのと考えられる。上面の標高は約2.35～2.45mである。

〈9層〉 灰色粘質土で、古代後半の耕作土層と考えられる。上面の標高は約2.3～2.4mである。〈9層〉には、地点によって下面に接する層に違いがあり、不整合面がみられる。つまり、〈9層〉は、縄文時代以来の微高地である調査区中央部の北端では〈12層〉上に、1・2区の窪地部では〈10層〉上に、微高地と窪地部の間では〈11層〉上に堆積している。〈8・9層〉の出土遺物は10世紀から13世紀前半が主体となる。一方で、石鏃をはじめとするサヌカイト製石器や弥生時代早期の突帯文土器、7世紀前葉の須恵器を含んでおり、それ以前の包含層を破壊していることが出土遺物からも窺える。したがって本地点では、〈9層〉の堆積時期を下限とした期間にそれまでの原地形の起伏を均す土地改変があったことが考えられる。

〈10層〉 明黄橙褐色土で、1・2区の窪地部でのみ確認できた(図7・8-C断面)。窪地部の最も低い地点で、層厚20cmを測り、微高地に向けて次第に薄くなる。本来は、微高地部の〈11層〉も覆っていたものとみられるが、後世の削平の結果、窪地部を除いて除去されたと考えられる。出土遺物が少なく時期の限定が難しいが、〈10層〉上面から古墳時代後期の溝が掘削されているため、堆積時期は弥生時代前期末から古墳時代後期の幅におさまる。石鏃が数点出土していることを考慮すると弥生時代前期から中期の堆積層になる可能性が高い。

〈11層〉 津島岡大遺跡で「黒色土」と呼称している、鍵層となる土壤化層である。暗褐色～黒褐色を呈する粘質～砂質土で、津島地区一帯に拡がり確認されている。本地点では、調査区中央部北端を除くほぼ全範囲で拡がり確認した。1・2区の窪地部の最も低い地点では層厚50cmを測り、微高地に向かって次第に薄くなる。上面の標高は約2.1～2.35mで、窪地部と微高地部の比高差は約0.3mである。〈11層〉がみられない地点は、本来〈11層〉の分布が拡がりさらに高まっていた地形が、人為的な改変を受けて削平されたのと考えられる。改変は、〈10・11層〉上面において条里に関連する遺構が確認できた古代後半(10世紀)には及んでいたものとみられる。

〈11層〉の堆積の厚い窪地部では、色調の濃淡を主な基準として3層に細分が可能であった。〈11a層〉は、暗褐色砂質土である。鉄分の沈着、マンガンの集積が著しく、上層での耕作の影響を受けたものであろう。突帯文土器を比較的多く含む層である。窪地部最深部における上面の標高は約2.1mである。〈11b層〉は、暗灰褐色～暗黄灰褐色砂質土である。最深部上面の標高は約1.85mである。〈11c層〉は、暗灰褐色砂質土である。上層より色調が淡くなる漸移的な層である。最深部上面の標高は約1.75mである。

〈11層〉中には本来複数の生活面が存在する可能性があるが、〈11a層〉～〈11c層〉の変化は漸移的なもので、最深部においてもなんら間層を挟まない。〈11層〉からは、縄文時代中期末から弥生時代前期末の土器が出土したが、小片が大半である。早期の突帯文土器が量としてはもっとも多く、縄文時代後期以前・弥生時代前期の土器はいずれもわずかで、積極的な評価は難しい。本地点での〈11層〉は遅くとも弥生時代早期から形成がはじまり、弥生時代前期まで土壤化の作用する地表面として機能していたと考えられる。細分層と形成時期の対応をとることは上述の理由から難しいのが現状である。

〈12層〉 土壤化層である〈11層〉の母材となる基盤層である。調査区全域で分布を確認した。上面の標高は約1.6～2.2mである。窪地部では、下層の堆積状況を確認する目的で深く掘り下げたため、3層に細分できる。〈12a層〉は、淡橙灰褐色砂質土である。暗褐色土ブロックを含む漸移的な層である。〈12b層〉は、淡灰白色～黄白色砂質土である。〈12c層〉は、淡灰褐色砂質土である。マンガンの集積が顕著にみられる。

2. 地形の推移

以上に概説した層序・層相の検討から、本調査地点の地形の推移と土地利用のありかたを時期ごとにまとめておきたい。

①縄文時代～弥生時代前期〈11～12層〉

本調査地点では、出土遺物が認められる縄文時代後期までには〈12層〉が堆積し、以後の人間活動が展開する原地形が形成されていたとみられる。したがって、〈12層〉上面は後期の地形をほぼ反映している

と考えられる。ただ、〈12層〉中においても焼土・炭化物の集中部や土器小片を検出しており、〈12層〉上面より下位に一時的な地表面の存在した可能性はある。〈12層〉上面の地形は、調査区東半に南北方向の谷状の窪地部、西半に微高地が広がる。微高地（標高2.2m前後）と窪地部（標高1.6m前後）の比高差は最大で0.7mを測り、以後の地形はこの起伏を減じる方向に推移する。窪地部は谷といえるほどの深さ・傾斜ではなく、沖積化の過程で形成された微地形とみられる。窪地部西側の微高地は、北側に向かって次第に高くなる。また、本調査地点の南東約10mに位置する第8次調査地点においても微高地が確認されており、窪地部の東斜面はその微高地に向かって高くなっていくものとみられる。

弥生時代早期～前期では、土壌化が進行し、〈11層〉が形成される。この時期の地形は、縄文時代の地形を踏襲しているが、微高地部と窪地部の比高差は〈11層〉上面で0.3mを測り、起伏はなだらかになっている。

②弥生時代～古墳時代〈10層〉

弥生時代から古墳時代にかけて、〈11層〉上には〈10層〉が堆積し、地形の起伏はさらに緩慢になっていったと考えられる。古墳時代後期までの期間に、調査区北辺では東西方向の溝が繰り返し掘削されている。溝の掘削方向と地形との関係は古代の土地造成のために明確でないが、溝は縄文時代以来の調査区北側の地形の高まりに沿うように分岐・湾曲しているとみられる。したがって、古墳時代後期までは溝の掘削方向に影響を及ぼす程度に、自然地形が残っていた可能性がある。

③古代〈9層〉

〈9層〉の下面には〈10～12層〉の各層の上面が接しており、非連続的な堆積状況を呈している。堆積状況からは、それまでの自然地形の起伏を、微高地を削平するかたちで均し、平坦に耕作地化した状況を窺うことができる。したがって、〈10層〉堆積後～〈9層〉堆積以前の時期に本調査地点では地形変化に大きな画期が存在したことになる。この時期の遺構として、条里に関連するとみられる10世紀の正方位を指向する溝が〈10層〉から〈11層〉の上面で確認できる。溝は2条で対となり、道路状遺構の側溝を構成するものである。また、溝間の〈11層〉上面は周囲よりも高まっており、畦畔としても機能していたとみられる。したがって、〈9層〉下面の地形は10世紀頃の耕作面の状況をよく反映していると考えられるべきで、地形変化の画期はこの時期の土地造成に伴うものとするのがもっとも有力である。

④中世以後〈1～8層〉

〈9層〉より上層では、耕作土とみられる層がほぼ水平に堆積する。したがって、中世以後は、洪水砂である〈3d層〉を挟みながらも、耕作地としての利用が続いたとみられる。13世紀頃の耕作面である〈8層〉上面の地割は古代の道路状遺構の地割と位置が移動しているものの、それ以降は近代の陸軍による大規模な造成の直前までほぼ同じ地割を踏襲していたようである。



図9 縄文時代後期の地形

第3節 縄文時代～弥生時代前期の遺構・遺物

縄文時代から弥生時代前期に属する遺構には、基盤層である〈12層〉上面で検出した土坑8基・ピット15基に加え、〈12層〉中で検出した焼土・炭化物集中部1箇所がある(図10、11)。〈12層〉上面は、調査区中央北側がもっとも高く、東半の谷状の窪地部に向けて下がっていく地形をなしている(図11)。大半の遺構は、西側の微高地部に散在して見つかった。調査区中央北側の地形がもっとも高まる地点では、古代の包含層である〈9層〉を取り除いた段階で〈12層〉を検出した。それ以外の範囲では土壌化層である〈11層〉(「黒色土」)が〈12層〉上を覆っていた。ここで報告する遺構には、〈12層〉中あるいは上面に帰属するものと、本来〈11層〉中から掘り込まれた遺構を〈12層〉上面で検出したものが含まれている。

a. 焼土・炭化物集中部

焼土・炭化物集中部1 (図12)

調査区東半の窪地部東斜面(BC19-16・26区)に位置する。〈12層〉中で検出した。南北1.8m、東西2.9mの範囲に焼土・炭化物が分布しており、窪地部最深部付近にとりわけ大型の焼土片・炭化物が集中している。出土レベルは標高1.41～1.63mである。

既往の調査では〈12層〉上面が縄文時代後期の検出面となる場合が多く、それよりも10cmほど下位の〈12層〉中に焼土・炭化物が分布していたため、掘り込みを伴う遺構の存在を想定して調査を進めた。しかし、明瞭な掘り込みや、燃焼面と判断できるような硬化面、炉跡と判断できる焼土・炭化物の出土状況は確認できなかった。焼土・炭化物の垂直分布を検討してみると、ややばらつきがみられるものの、〈12c層〉の堆積する傾斜とほぼ平行して一定のレベルに

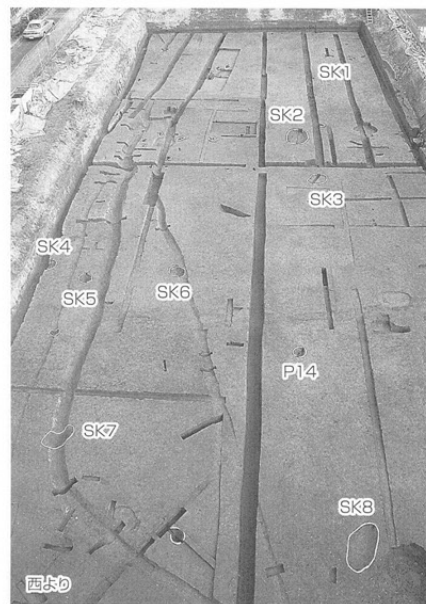


図10 縄文～弥生時代前期全景

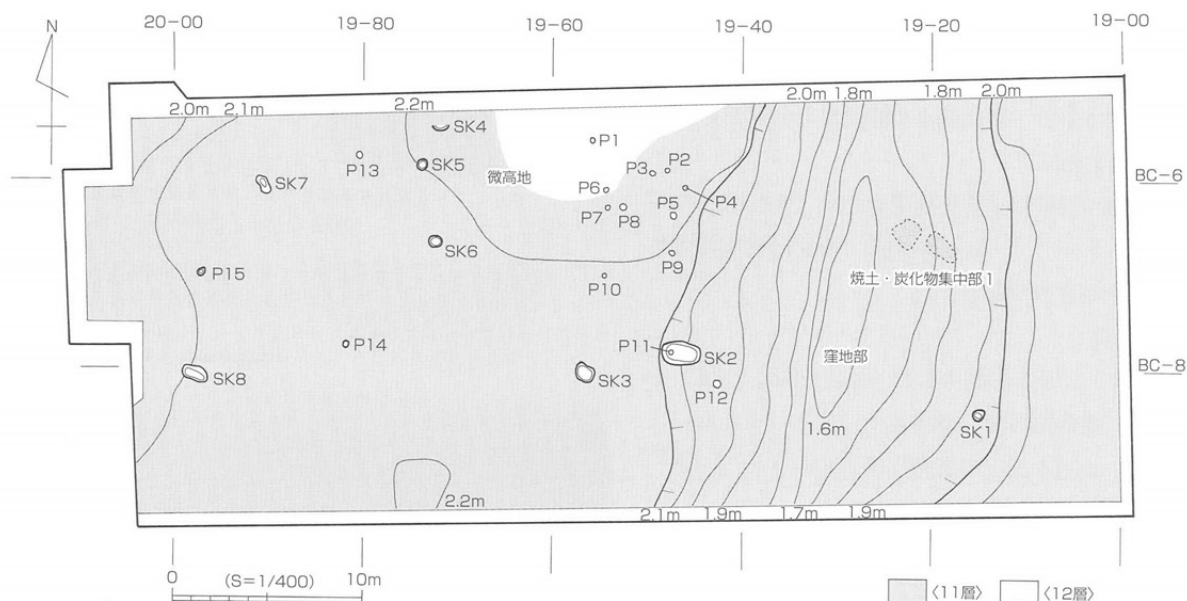


図11 縄文時代～弥生時代前期検出遺構全体図

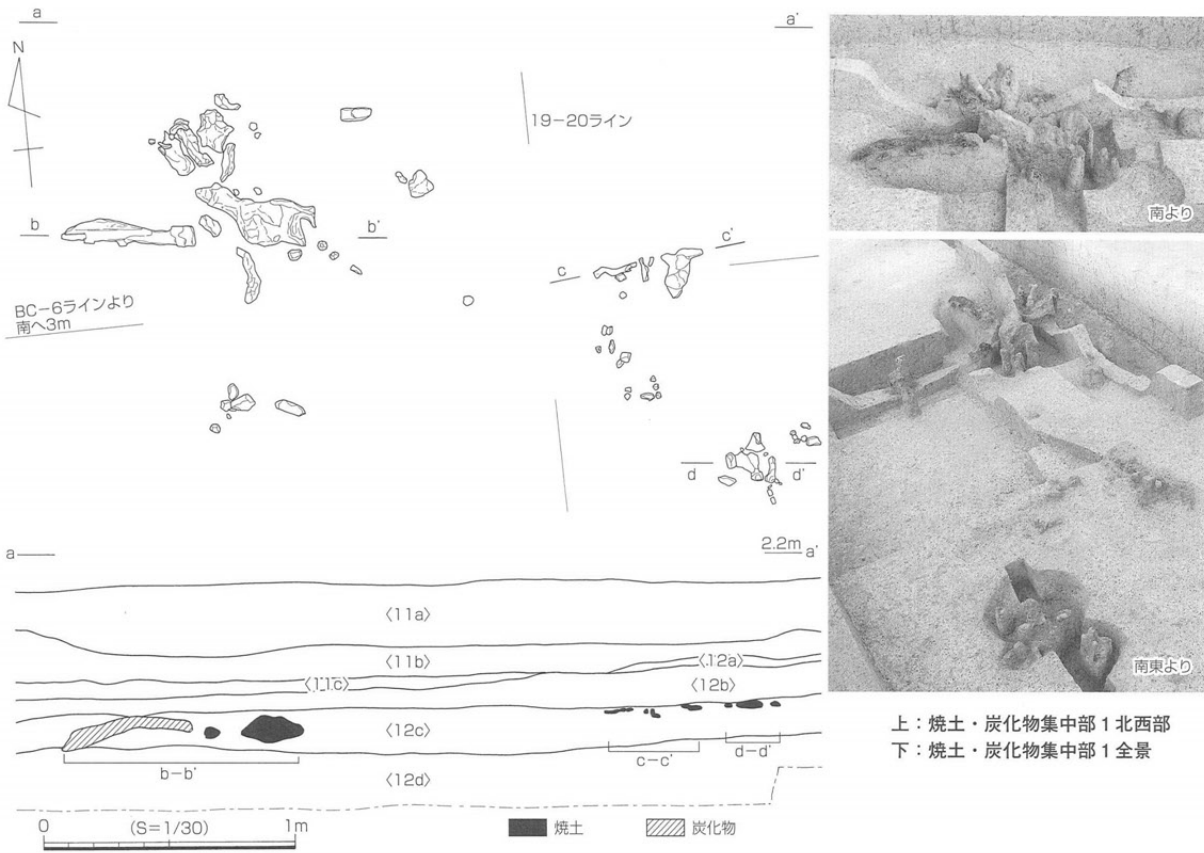


図12 焼土・炭化物集中部 1

分布している。そのため、掘り込みではなく、<12層>堆積中のある期間に非安定的な地表面が存在し、その面上に焼土・炭化物が残された可能性が考えられる。ただ、明瞭な燃焼面がみられなかったこと、微高地から0.7mほど下がった窪地部に位置することを考慮すると、別の地点で燃焼が行われた可能性も考えられる。

炭化物の放射性炭素年代測定では、 $3915 \pm 25BP$ の値が得られており（第4章参照）、縄文時代後期前葉に相当するものである。

b. 土坑

土坑は、計8基を検出した（図13～20）。土坑1を除いて、窪地部西側の微高地に分布している。ここでは、土坑を埋土の特徴と断面形によって、A～C類に分類して報告することにしたい。

(1) 土坑A類

A類は黄褐色系埋土を主とし、土坑1が該当する。

土坑1（図13）

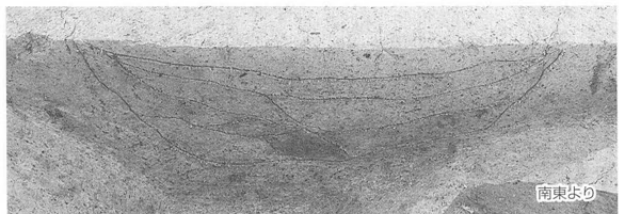
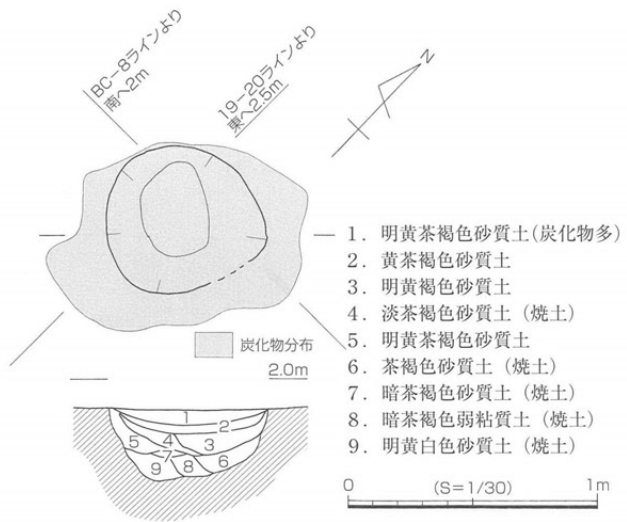


図13 土坑1

BC19-18区に位置する。〈12層〉上面で検出した。検出面の標高1.89m、底面の標高1.59mである。やや不整の円形をなしており、直径が60～65cm、深さが30cmである。上面に炭化物の散布がみられ、これを手がかりに土坑を認識した。埋土は9層に細分できる。上層（1層）に炭化物が含まれ、下層（6～9層）では焼土片が加わる。硬化面などの明瞭な燃焼の痕跡は確認できなかったものの、炉として機能した可能性がある。

出土遺物は土器小片3点である。埋土の色調から、西側の微高地上で検出した他の土坑と時期が異なる可能性が高く、縄文時代後期のものと考えられる。

(2) 土坑B類

土坑B類は、暗褐色系の埋土を基本とし、平面形は不整の円形から楕円形をなす。深さは12～34cmで、炭化物を含むものがあることから確実に人為的な掘り込みによるものと判断できるものである。土坑4～7が該当し、3区の微高地に偏在する傾向がある。土坑B類は、埋土の色調から〈11層〉形成途上のある時期に構築・放棄されたものと考えられる。土坑5から突帯文土器片が出土していることを考慮すると、その他のものも弥生時代早期に帰属する可能性が高い。

土坑4 (図14)

BC19-75区に位置する。〈12層〉上面で検出した。検出面の標高2.25m、底面の標高2.13mである。残存部は不整の方形をなすが、北側の半分を側溝掘削時に失っており、他の土坑と同様に不整形であった可能性がある。直径が64cm、深さが12cmである。埋土は2層で、焼土・炭化物はみられなかった。埋土の色調から〈11層〉形成時に掘り込まれたものと考えられる。微高地部分の〈11層〉は後世に削平されており、本来はもっと深い遺構であったと思われる。出土遺物はない。

土坑5 (図15)

BC19-75区に位置する。〈12層〉上面の標高2.20m、底面の標高1.94mで検出した。やや不整の円形をなし、直径が57～59cmである。断面形はU字形だが、底面にやや凹凸がみられる。深さは26cmである。埋土は5層に分か

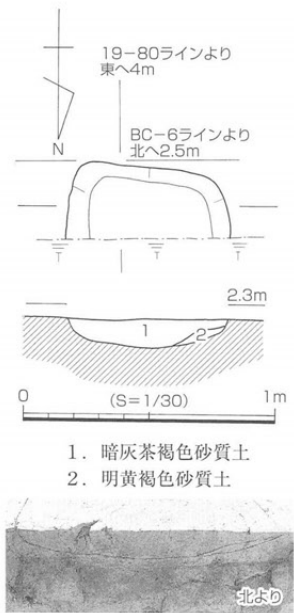
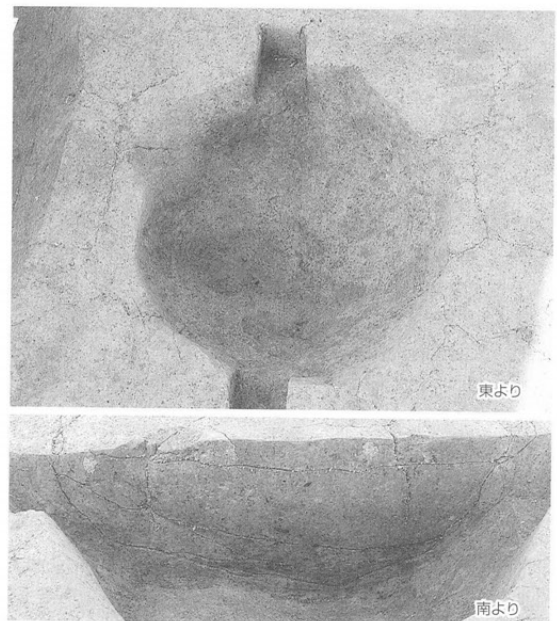
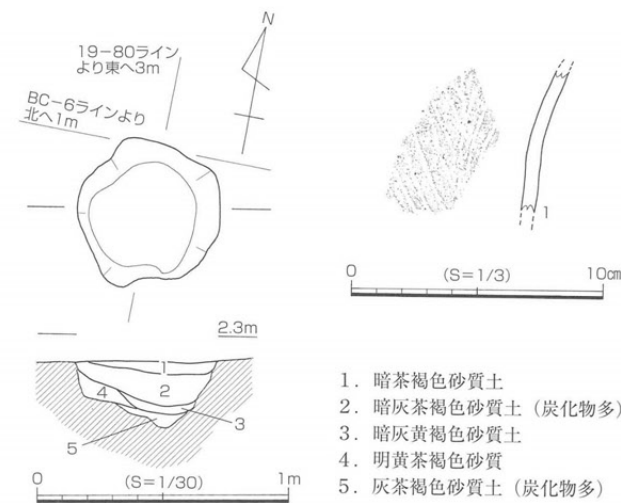


図14 土坑4



番号	器種	特徴	胎土	色調(内/外)
1	突帯文土器・深鉢	(内)摩滅、(外)沈線文	粗砂～細礫	にぶい黄橙/にぶい赤褐

図15 土坑5・出土遺物

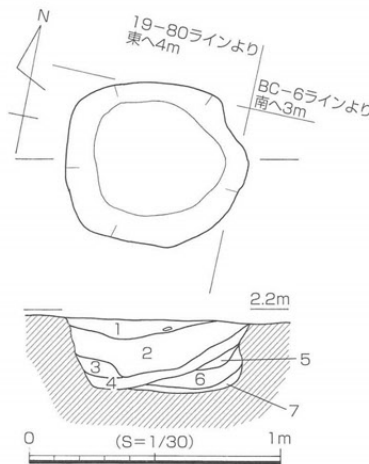
れ、2層と5層に炭化物が多く含まれる。4層は明るい色調の砂質土で、炭化物を含まない間層となっている。そのため、間層を挟んで複数回炭化物を形成する活動があったことが窺える。ただし、燃焼の痕跡は確認できなかった。

土器小片8点が出土し、1点を図化した。突帯文深鉢の胴部で、沈線が施されている。したがって、本遺構の帰属時期は弥生時代早期である。なお、埋土に含まれた炭化物を放射性炭素年代測定しており、 $2545 \pm 25BP$ の値が得られている（第4章参照）。

土坑6（図16）

BC19-76区に位置する。〈12層〉上面の標高2.17mで検出した。底面の標高1.87mである。やや不整の円形で、直径が70cmである。断面形はU字形で、深さは30cmである。埋土は7層に分かれ、4層から7層にやや大きめの炭化物がみられる。3層・6層はブロックを含む黄白色砂質土で、〈12層〉に似る。そのため、本土坑についても土坑5と同様に、流入土と考えられる間層を挟みつつ、炭化物を形成する活動が複数回あった可能性がある。燃焼の痕跡は確認していない。

土器小片3点が出土したが、図化できるものはない。土坑5との形態・埋土の類似から、帰属時期は弥生時代早期と考えられる。



1. 暗褐色砂質土（炭化物）
2. 暗灰褐色砂質土
3. 灰褐色混黄白色砂質土
4. 灰褐色砂質土（炭化物）
5. 灰黄褐色砂質土（炭化物）
6. 灰褐色混黄白色砂質土（炭化物）
7. 淡灰褐色砂質土（炭化物）

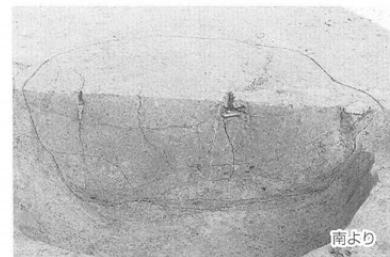
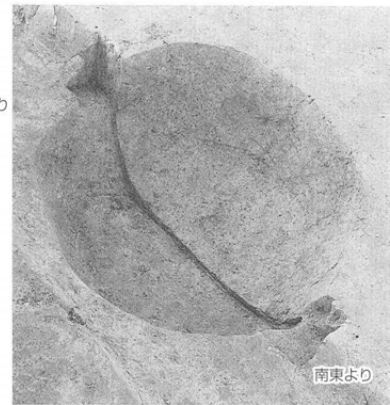
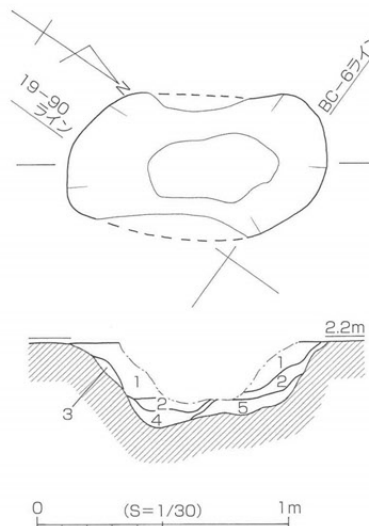


図16 土坑6

土坑7（図17）

BC19-96区に位置する。〈12層〉上面で検出した。検出面の標高2.19m、底面の標高1.81mである。古墳時代後期の溝5に中央部を切られているものの、肩部と底部が残存しており、平面形は楕円形と考えられる。長径が104cm、短径がおよそ60cm程度であろう。断面形は角のとれた逆台形で、底面にはやや凹凸がみられる。埋土は5層に分かれる。暗褐色系の埋土（1・2・4層）に黄褐色系の埋土（3・5層）がブロック状に混じり、使用後に埋め戻されたことが窺える。出土遺物はないものの、埋土の色調から弥生時代早期と考えられる。



1. 暗褐色弱粘質土
2. 暗灰褐色砂質土
3. 明黄褐色砂質土
4. 黒褐色弱粘質土
5. 明黄色砂質土

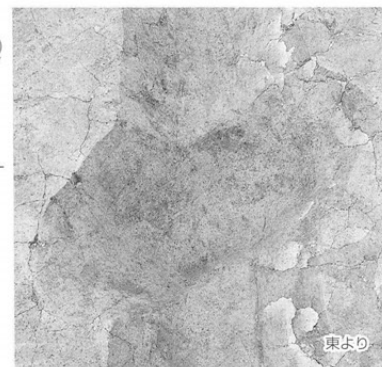


図17 土坑7

(3) 土坑C類

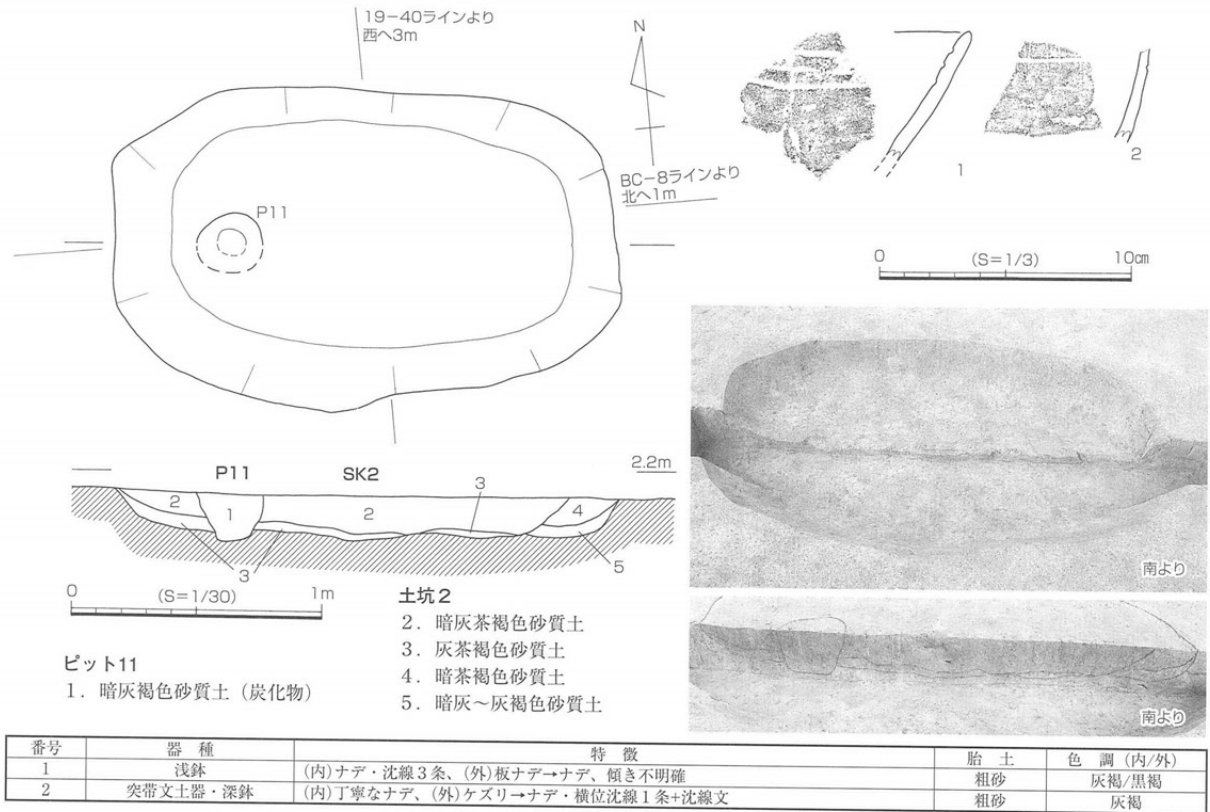


図18 土坑2・出土遺物

土坑C類は、灰褐色から暗褐色系の埋土を基本とし、平面形は不整の円形から楕円形をなす。断面形は、皿形を呈し、深さも10～20cmと浅い。土坑2・3・8が該当する。土坑3・8については、埋土が「11c層」に類似し、平面形・断面形も人為的な掘り込みとするには不定形なため、自然地形のたわみの可能性がある。C類は、西側微高地の南側に分布するが、偏在する傾向はみられない。

土坑2 (図18)

BC19-47区に位置する。〈12層〉上面で検出した。検出面の標高2.12m、底面の標高1.92mである。平面形は隅丸長方形に近い楕円形で、長径201cm、短径130cmである。断面形は皿形を呈し、深さは20cmである。断面精査時にピット11を確認しているが、本土坑の埋土を切っており、有機的な関係をもつものではない。埋土は4層にわかれ、いずれも褐色系の砂質土である。

出土遺物には土器小片17点があり、2点を図化した。1は浅鉢口縁部で、内面に3条の沈線がある。2は突帯文深鉢胴部で、横位の1条沈線で画された上に、沈線文が施される。いずれも弥生時代早期のものと考えられ、本土坑もこの時期に帰属する。

土坑3 (図19)

BC19-58区に位置する。〈12層〉上面で検出した。検出面の標高

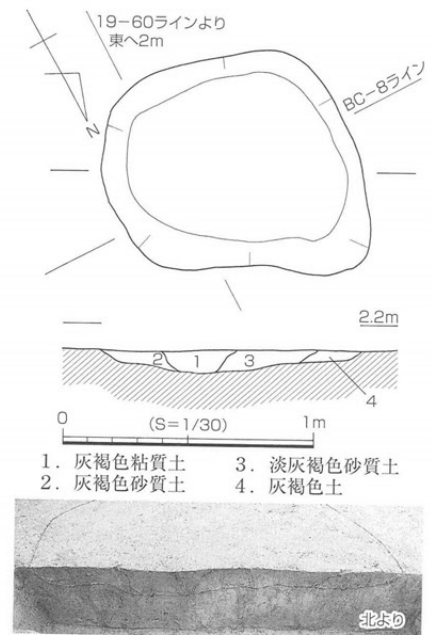


図19 土坑3

2.10m、底面の標高2.00mである。平面形は不整の円形で、直径が88～107cmである。断面形は皿形を呈し、深さは10cmである。埋土の4層はいずれも灰褐色系の砂質土で、〈11c層〉に類似する。平面形も安定しないため、本土坑は自然地形のたわみの可能性があるだろう。出土遺物はなく、検出面から判断すると、縄文時代後期～弥生時代早期のものと考えられる。

土坑8 (図20)

BC19-98区に位置する。〈12層〉上面で検出した。検出面の標高2.16m、底面の標高1.99mである。平面形は不整の楕円形で、長径146cm、短径79cmを測る。断面形は皿形を呈し、深さは17cmである。埋土の3層は、褐色～灰褐色の砂質土で、〈11c層〉に似るため、たわみの可能性がある。検出面から縄文時代後期～弥生時代早期と考えられる。

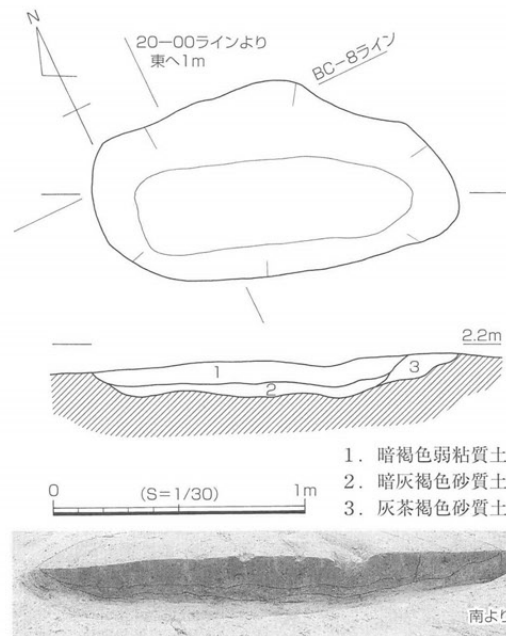


図20 土坑8

c. ピット

15基検出し、埋土の色調によってa～c類に分ける。

① **a類 (ピット1・13・14)**

a類は黒褐色～暗褐色の埋土で、炭化物を含む。3基あり、径は16～38cm、深さは16～24cmである。ピット14を典型として報告する。時期はピット14の出土遺物から、弥生時代早期になると考えられる。

ピット14 (図21)

BC19-87区の〈12層〉上面で検出した。径38cm、深さ24cmで、底面が一部窪む。埋土の色調、炭化物の含み具合が土坑5・6と類似するため、土坑B類の上半が削平されたものの可能性がある。突帯文深鉢含む土器小片4点が出土した。

② **b類 (ピット2～12)**

b類は灰褐色砂質土の埋土を基本とし、径20～45cm、深さ12～28cmである。調査区中央部北側の微高地上に9基が集中して分布する傾向があるものの、構造物の柱穴としての規則的な配置は確認できなかった。

③ **c類 (ピット15)**

BC19-97区で1基検出した。淡褐色土を埋土とし、炭化物・焼土の小片を含む。径47cm、深さ27cmである。

d. 包含層出土遺物

縄文時代から弥生時代前期の遺物は、〈11層〉・〈12層〉で出土した土器・石器である。〈11層〉からは2,231点の土器が出土し、大半は摩滅の著しい小片である(平均重量3.5g/点)。早期の突帯文土器が主体となる。〈11層〉にはごく少量ではあるが縄文時代中期末・後期・弥生時代前期の土器が含まれているものの、後期以前の遺物については攪拌・巻き上げによる混入の可能性がある。したがって、形成時期は弥生時代早期から前期と考えておきたい。突帯文土器は、1・2区の窪地部あるいはその周辺の〈11層〉上部から出土する傾向があった。

土器 (図22、23)

1～9は、縄文時代中期末～後期中葉の土器片である。1・6には摩滅のため縄文がみられないが、後期前葉

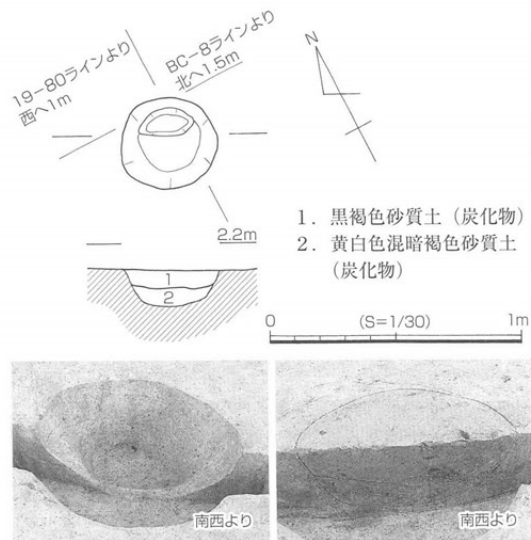
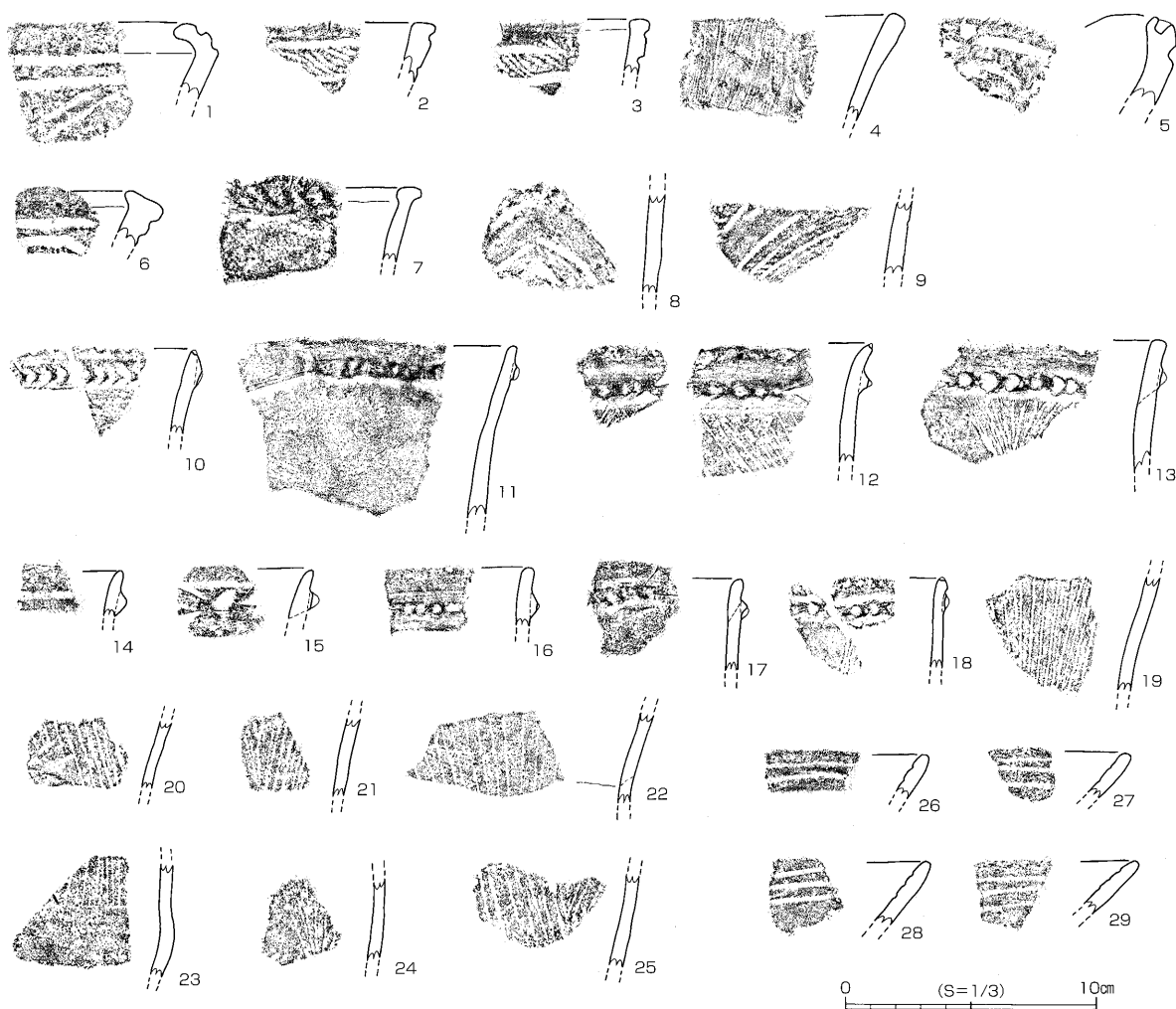


図21 ピット14



番号	出土層位	器種	特徴	色調(内/外)	胎土
1	11層	縄文土器・深鉢	(内)・(外)摩滅、福田K 2式	淡黄/黄灰	粗砂～細礫
2	11層	縄文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)平行沈線文・縄文(RL)、福田K 2式	にぶい黄橙/灰黄褐	細砂
3	11層	縄文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)平行沈線文・縄文(RL)、福田K 2式	にぶい橙	微砂
4	11・12層	縄文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)条痕	灰白/灰褐	細砂
5	11層	縄文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)沈線・刺突、縄文不明	にぶい黄橙/褐灰	微砂
6	11層	縄文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)2本沈線・摩滅/縄文不明、福田K 2式	にぶい黄橙	細砂
7	11・12層	縄文土器・深鉢	(内)・(外)摩滅、口縁肥厚部に縄文(RL)	灰白	粗砂
8	11層	縄文土器・深鉢	(内)ミガキ、(外)沈線3本・磨消縄文、中津式	黒褐/黄灰	細砂
9	11層	縄文土器・深鉢	(内)摩滅/ナデ、(外)沈線5本・磨消縄文、福田K 2式	褐灰/灰黄褐	細砂
10	11層	突帯文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)摩滅/ナデ、突帯：三角形(低い)・右D字・口縁部に右D字刻みあり	褐灰/灰白	粗砂
11	11層	突帯文土器・深鉢	(内)ヨコナデ、(外)ナデ(不明瞭)、突帯：カマボコ形・開V字	橙/にぶい橙	微砂～細砂
12	11層	突帯文土器・深鉢	(内)ヨコナデ、(外)ナデ→沈線文、突帯：三角形・右D字、口縁部に右D字もしくはO字の刻みあり	褐灰/灰黄褐	細砂
13	11層	突帯文土器・深鉢	(内)摩滅/ナデ、(外)ナデ→沈線文、突帯：三角形・右D字	にぶい黄橙/にぶい橙	粗砂
14	11層	突帯文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)ヨコナデ、突帯：三角形・刻みなし?	にぶい橙/にぶい黄橙	細砂
15	11層	突帯文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)ナデ、突帯：三角形・右D字	灰白/にぶい橙	粗砂
16	11層	突帯文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)ヨコナデ、突帯：三角形・O字、摩滅著しい	褐灰/にぶい黄橙	細砂
17	11層	突帯文土器・深鉢	(内)摩滅/ナデ、(外)摩滅/ナデ、突帯：三角形・O字	橙/にぶい黄橙	細砂
18	11層	突帯文土器・深鉢	(内)摩滅/ミガキか?、(外)ナデ・沈線、突帯：三角形・右D字、口縁部にO字の刻みあり	にぶい褐/灰褐	微砂
19	11層	突帯文土器・深鉢	(内)摩滅/ナデ、(外)ナデ→沈線文	灰褐/黒褐	細砂～粗砂
20	11層	突帯文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)摩滅/沈線文	黒褐/灰黄褐	細砂
21	11層	突帯文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)沈線文(細)	にぶい黄橙/灰黄	粗砂
22	11層	突帯文土器・深鉢	(内)摩滅、(外)沈線文(細)	にぶい黄橙/灰黄褐	細砂
23	11層	突帯文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)ナデ・横位沈線1条+沈線文	浅黄/黒褐	細砂
24	11層	突帯文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)摩滅/ナデ・沈線文	にぶい黄橙/灰黄	細砂
25	11層	突帯文土器・深鉢	(内)ナデ、(外)沈線文(細)	にぶい黄橙/灰褐	粗砂～細礫
26	11層	浅鉢	(内)ナデ・沈線2条(3条の可能性あり)、(外)ナデ、傾き不明確	灰白/灰黄	粗砂～細礫
27	11a層	浅鉢	(内)ナデ・沈線3条、(外)ナデ(丁寧)	灰白/褐灰	細砂
28	11層	浅鉢	(内)丁寧なナデ・沈線3条、(外)ケズリ→ナデ、傾き不明確	灰黄褐/褐灰	粗砂
29	11層	浅鉢	(内)摩滅/ナデ・沈線3条、(外)ナデ、傾き不明確	灰白/黒	粗砂

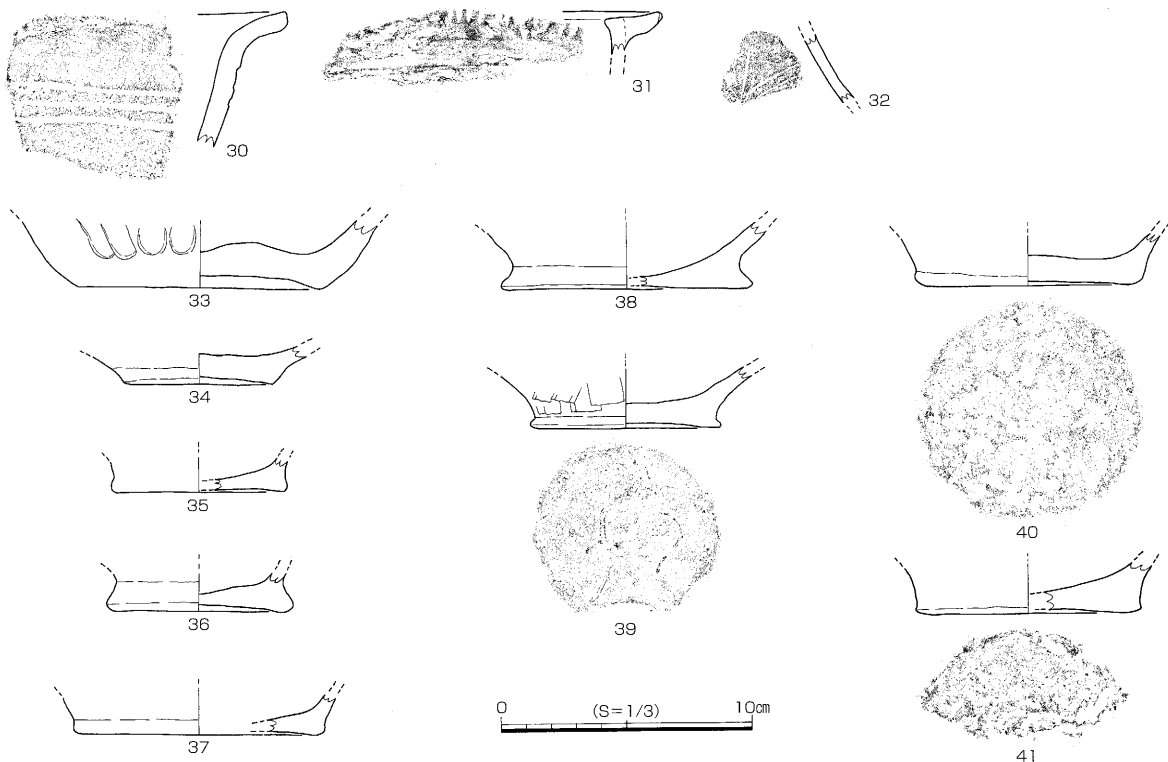
図22 (11層)・(12層)出土遺物：土器1

と考えられる。2・3には2本の沈線間に磨消縄文を施しており、後期前葉に位置付けられる。4は深鉢口縁部で、外面に縦方向の条痕が施される。5は中期末に位置付けられると考えられる波状口縁となる深鉢である。7は口縁部を肥厚させ、端面に縄文を施す。後期前葉の新相～後期中葉に位置付けられよう。8、9は深鉢の胴部で、それぞれ後期初頭、後期前葉のものと思われる。

10～29は、弥生時代早期の突帯文土器である。10～18が深鉢口縁部、19～25が深鉢胴部である。小片が大半のため、器形については不明な点が多いが、胴部の突帯と判断できる資料は出土していない。突帯は口縁直下に付く10を除き、口縁のやや下方に取り付く。突帯幅は7～13mm、高さが2～5mmと、小さめの傾向を示す。突帯の刻みは、右D字・O字が多いものの、刻みのないものもみられるようである(14)。胴部に沈線文をもつものが比較的多くみられ、細めの沈線を密に施したものが多い。23は、横位に1条の胴部沈線を施している。突帯文土器に伴うとみられる浅鉢(26～29)は、いずれも口縁部内面に2条から3条の沈線が施されている点が特徴的である。

30～32は弥生時代前期の資料である。30・31は甕の口縁部で、端部に刻みがみられる。30が前期中葉、31が前期末葉～中期初頭に位置付けられる。32は、前期前半の壺胴部に施された木葉文の一部と考えられる。

33～41は底部片である。33は縄文土器の底部とみられるが、厚手のもので中期に遡る可能性がある。34につい



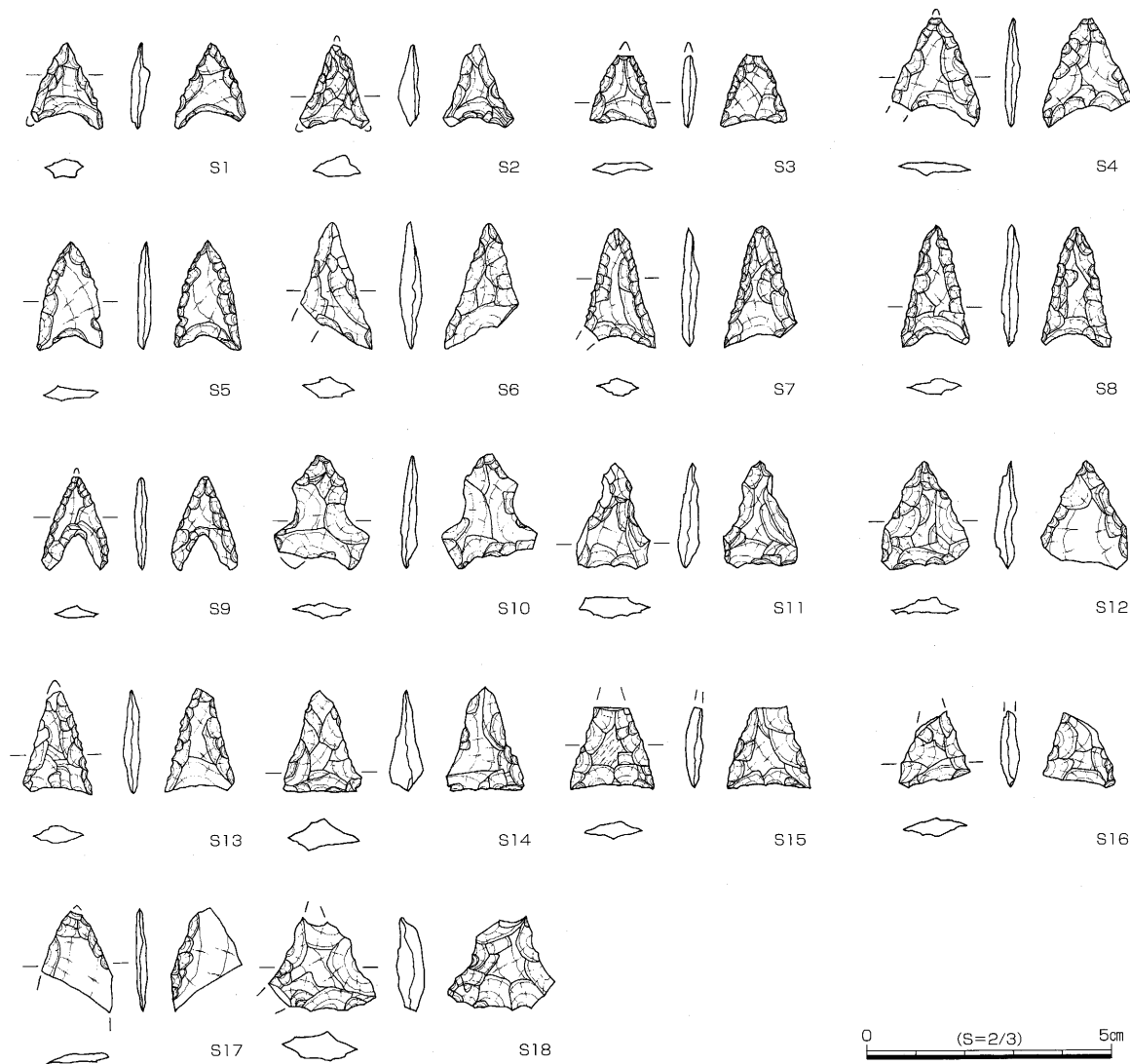
番号	出土層位	器種	法量 (cm)		特徴	色調 (内/外)	胎土
			底径				
30	11層	弥生土器・甕	-		(内)摩滅/ナデ?、(外)ヨコナデ、口縁端部に刻み(残存不良)、沈線3条	灰褐/にぶい橙	粗砂
31	11層	弥生土器・甕	-		(内)ヨコナデ、(外)ヨコナデ、口縁端部に刻み	にぶい橙/灰褐	細砂
32	11層	弥生土器・壺	-		(内)摩滅/ミガキ?、(外)ナデ・木葉文(沈線5条)	灰黄褐	細砂～細礫
33	11・12層	底部	(9.8)		(内)ナデ、(外)表面剝落/指オサエ	にぶい黄橙/黒褐	粗砂～細礫
34	11層	底部	(5.8)		(内)ナデ、(外)ヨコナデ	灰褐	細砂
35	11層	底部	-		(内)ナデ、(外)ナデ	褐灰/明赤褐	粗砂～細礫
36	11層	底部	6.8		(内)摩滅/ナデ、(外)ヨコナデ	灰/明赤褐	細礫
37	11層	底部	-		(内)ナデ、(外)摩滅/ナデ	にぶい黄橙/にぶい赤褐	微砂
38	11層	底部	-		(内)ナデ、(外)ナデ(不明瞭)、表面にFe附着	灰褐	細砂
39	11層	底部	7.6		(内)ナデ(板ナデ?)、(外)板ナデ	灰黄褐/にぶい黄	粗砂
40	11層	底部	8.0		(内)ナデ、(外)摩滅/ナデ?、底面に粗圧痕?あり	にぶい黄橙/灰黄褐	粗砂
41	11層	底部	(8.0)		(内)ナデ、(外)ヨコナデ	にぶい黄橙/にぶい褐	細砂

図23 〈11層〉・〈12層〉出土遺物：土器2

ては縄文時代後期のものとみられるが、残りの多くは弥生時代早期の底部と考えられる。

石器 (図24、25)

石器には、石鏃18点、スクレイパー 2点、石斧未成品 1点、楔形石器 4点がある。サブトレンチ内で出土した



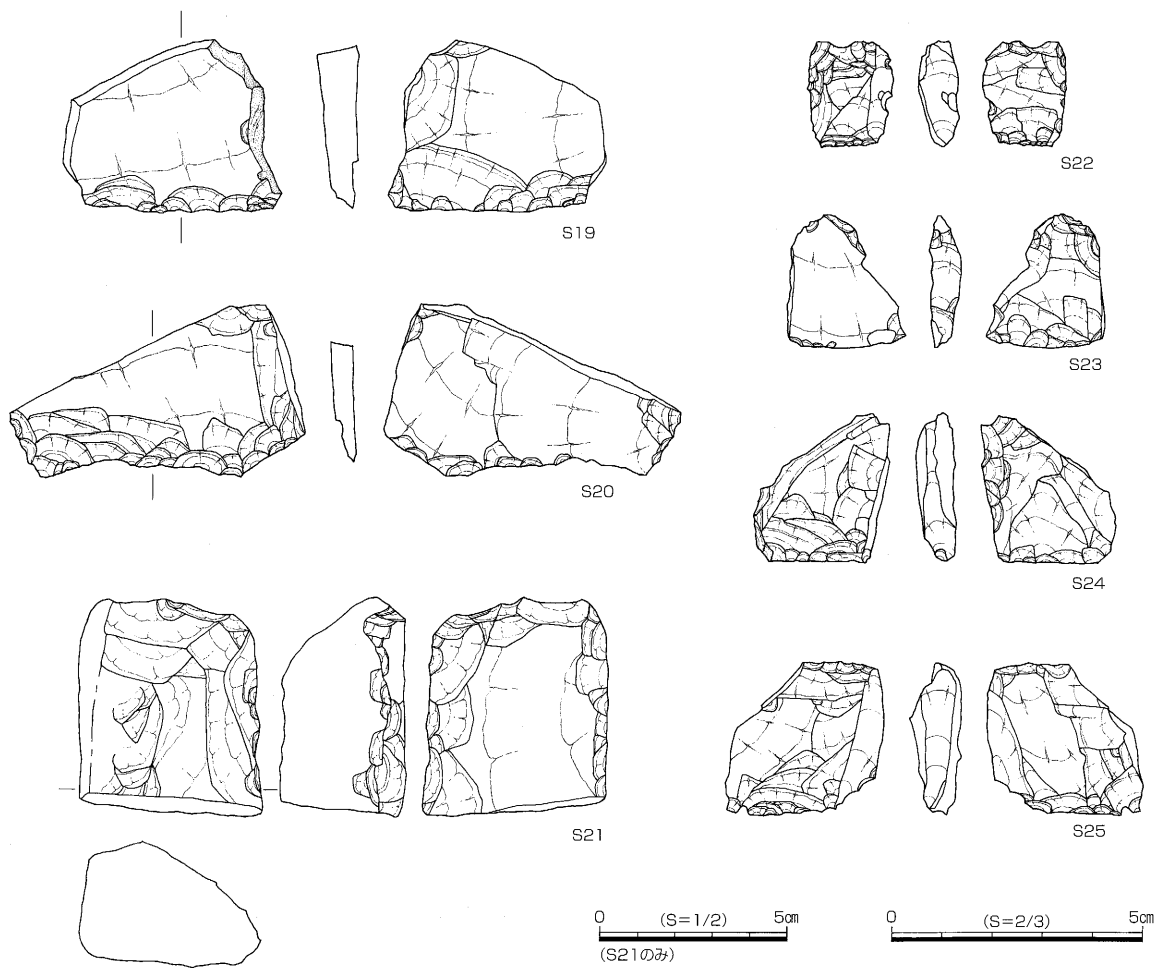
番号	出土層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S1	11層	石鏃	1.72	(1.48)	0.37	0.5	サヌカイト	基部をわずかに欠損、凹基式
S2	11～12層	石鏃	1.69	(1.44)	0.41	0.6	サヌカイト	基部を一部欠損、先端わずかに欠損、凹基式
S3	11層	石鏃	(1.47)	1.36	0.28	0.5	サヌカイト	先端欠損、凹基式
S4	11層	石鏃	2.22	(1.81)	0.27	0.7	サヌカイト	基部欠損、先端わずかに欠損、凹基式
S5	11～12層	石鏃	2.19	1.35	0.27	0.8	サヌカイト	完形、凹基式
S6	11層	石鏃	2.60	(1.50)	0.45	0.9	サヌカイト	基部欠損、凹基式
S7	11層	石鏃	2.30	(1.45)	0.32	0.8	サヌカイト	基部欠損、凹基式
S8	11層	石鏃	2.45	1.40	0.34	0.8	サヌカイト	完形、凹基式
S9	11層	石鏃	1.94	1.34	0.25	0.4	サヌカイト	ほぼ完形、凹基式
S10	11層	石鏃	2.17	1.49	0.44	1.1	サヌカイト	凹基式
S11	11層	石鏃	(2.09)	1.43	0.35	0.7	サヌカイト	先端わずかに欠損、凹基式
S12	11層	石鏃	2.31	1.94	0.32	0.9	サヌカイト	基部欠損、凹基式
S13	11層	石鏃	2.15	1.64	0.64	1.4	サヌカイト	完形、平基式
S14	11層	石鏃	2.20	1.80	0.47	1.2	サヌカイト	完形、平基式
S15	11層	石鏃	(1.68)	1.69	0.33	0.8	サヌカイト	先端を欠損、平基式
S16	11層	石鏃	(1.55)	1.47	0.38	0.7	サヌカイト	先端破損、平基式
S17	11層	石鏃	(2.09)	(1.44)	0.20	0.5	サヌカイト	基部破損、型式不明
S18	11～12層	石鏃	(1.93)	(2.19)	0.57	1.9	サヌカイト	先端・基部欠損、平基式

図24 〈11層〉・〈12層〉出土遺物：石器 1

帰属層位の不明確な資料を除くと、すべて〈11層〉から出土したものである。そのほか、図化した器種以外に剥片・碎片が〈11層〉から257点出土している。石斧未成品を除いて、すべてサヌカイトを素材とする。

S 1～18は、石鏃である。S 1～10が凹基式、S 11～16が平基式である。S 17は基部を破損しており、型式不明である。S 18は、やや不定形な平面形をなし、表面左側の欠損部分が先端になる可能性がある。凹基式は、平面形が正三角形に近いもの（S 1～4）、やや縦長になるもの（S 5～8）、基部の挟りが深いもの（S 9）、両側縁に挟りをもつもの（S 10）の4つに細分できそうである。最大長はいずれも2.6cm以内に収まる。

S 19・20は、スクレイパーである。S 19には両面から、S 20は主として片面から刃部調整が加えられている。S 21は石斧の基部である。研磨はみられないが、打製石斧としては厚みがあるため、磨製石斧の製作途上で破損した未成品と考えられる。安山岩製である。S 22～25は、楔形石器である。いずれの資料にも片側側面に剪断面がみられる。



番号	出土層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S19	11層	スクレイパー	3.42	4.33	0.95	17.5	サヌカイト	自然面残存
S20	11層	スクレイパー	3.41	5.87	0.56	11.2	サヌカイト	風化著しく、白灰色呈す
S21	11層	石斧	(5.70)	4.89	3.29	148.9	安山岩	未成品
S22	11層	楔形石器	2.12	1.67	0.80	3.6	サヌカイト	片側に剪断面あり
S23	11層	楔形石器	2.65	2.38	0.61	3.9	サヌカイト	片側に剪断面あり
S24	11層	楔形石器	2.96	2.68	0.81	6.7	サヌカイト	片側に剪断面あり
S25	11層	楔形石器	3.03	3.13	1.02	9.5	サヌカイト	片側に剪断面あり

図25 〈11層〉・〈12層〉出土遺物：石器2

第4節 弥生時代～古墳時代の遺構・遺物

弥生時代から古墳時代に帰属する遺構には、〈10層〉上面から〈12層〉上面において検出された溝6条・ピット1基がある。古代層である〈9層〉を除去した時点で、〈10層〉から〈12層〉の平面分布を確認した(図26)。〈10層〉は、調査区東半の、縄文時代以来の自然地形を踏襲した窪地部に堆積している。基盤層である〈12層〉は、調査区中央部の北端のみで露呈し、本来はこの地点に向けて高まる微高地であったとみられる。〈9層〉を除去した面の調査区全体の比高差は約15cmと、ほぼ水平である。〈9層〉堆積前にそれまでの自然地形の起伏を均すような土地造成のあったことが窺える。したがって、〈9層〉を除去した面では、弥生時代から古代までの遺構が混在して検出された。ここで報告するのは、〈9層〉および〈10層〉を除去した面で検出した遺構のうち、後述する古代に帰属する遺構を除いたものである。遺構からの出土遺物はきわめて少なかったため、時期の判定には、切り合い関係や遺構埋土の色調、遺構の構造などを参考とした。なお、弥生時代から古墳時代の遺物の多くは、上述の理由から古代の包含層に混在していたため、第5節において一括して報告している。

a. 溝

溝の分布は、切り合い関係をもちつつ調査区の北半を横断する溝1～5の一群と、調査区南西部において単独で検出した溝6に分かれる。溝1・2・5は、切り合い関係から1⇒2⇒5の順で掘削されている。溝3・4は、溝5の付け替え以前のものと思われることから、溝2と溝5の間の時点で掘削された可能性が高い。もっとも新しいと判断される溝5からは古墳時代後期の須恵器が出土しているため、これら溝群の下限をこの時期に求めることができる。掘削時期の上限は、これらの溝群が〈10層〉を切り込んでいることから、弥生時代前期末である。溝2～5は、いずれも調査区内を東西に横断し、北西(西)および南西に向かって分岐するように掘削されている。そのため、溝2～5は近接した時期に連続して掘削されたと考えられる。

溝1 (図27、28)

調査区北東隅を横断し、北側・東側の調査区外へと伸びる溝である。溝2・溝5に切られており、調査区北半

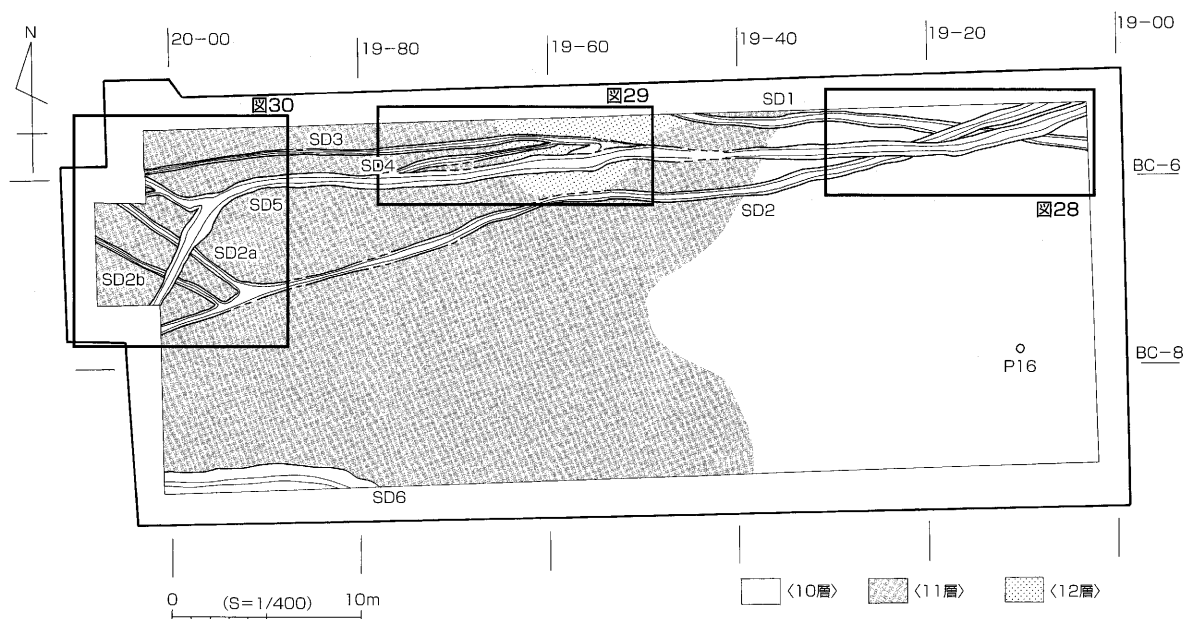


図26 弥生時代～古墳時代検出遺構全体図

の溝群（溝1～5）の中では、もっとも古いものとみられる。検出面の標高は2.23～2.34mで、〈10層〉上面で検出した。溝の幅は40～70cm、深さは43～57cmを測る。

溝1は断面形に特徴があり、高さのある逆台形を呈す。埋土は、6層から8層に分かれ、淡灰色～暗灰色粘質土を基本とする。最下層には〈11層〉・〈12層〉をブロックで含む淡黒灰色砂質土が堆積しており、溝の機能時に包含層を攪拌して堆積したものと考えられる。底面の標高は、a断面で1.73m、c断面で1.86mを測り、西側に向かって下がる。

出土遺物には土器小片25点があり、弥生時代早期の突帯文土器と判断できるものが1点あるが、包含層からの混入であろう。

溝2（図27～31）

溝2は、北東隅から西南西の方向に調査区を斜めに横切り、調査区西端で北西に向かう溝2aと溝2bに分岐する。検出面の標高は2.17～2.31mで、〈10層〉および〈11層〉上面で検出した。溝の幅は、調査区東側で50～70cm、西側では30～60cmとやや狭くなる。深さは東側で23～27cm、西端で11cm、溝2bは7

cmと浅くなるが、溝2aは24cmを測り、しっかりした掘り込みをもっている。断面形は、調査区東側では皿形に近いU字形（図28）、西端では皿形（図30f断面）、調査区中央部と溝2aでは立ち上がりの急なU字形となっている（図29b断面、図30d断面）。埋土は、2～3層で灰色～灰褐色粘質土を基本とし、最下層にやや暗色の強い層が堆積する。底面の標高は調査区東側で2.05～2.1m、西端で2.09mを測り、ほぼ水平である。しかし、溝2aでは1.97mを測り、調査区西側の溝2aに向けてやや下がる傾向がみられるようである。

溝2と2aは切り合い関係をもたず、同時存在である。溝2と2bの分岐地点については、側溝掘削時に破壊しており、切り合いの有無の確認ができなかった。そのため、分岐する3条の溝がすべて同時に機能していたかどうかについて、層位的な確証はない。しかし、溝2bが溝2と接続するものであることは、溝2bが交差部より南側にのびないことから確実である。後述する溝5が北西方向に二手に分かれる同様の掘削針路をとることを考慮すると、溝2・2a・2bの分岐する3条は掘り直しの結果ではなく、すべて同時に機能していた可能性が高いと考えられる。

出土遺物には土器小片35点のほか、平基式とみられる石鏃が1点ある（図31）。

溝3（図27、29、30）

溝3は、BC19-55区において溝5（古）から分岐し、調査区西半の北辺を横断する。BC19-55区で溝4と分岐する可能性がある。検出面の標高は2.19～2.34mで、〈11層〉および〈12層〉上面で検出した。溝の幅は25～40cm、深さは7～10cmを測り、周辺の溝に比べると浅い。断面形は、皿形から緩い逆台形を呈す。埋土は1層で、灰色粘質土である。底面の標高は2.15m前後とほぼ水平だが、図29c断面で2.19m、図30a断面で2.14mを測り、東側がやや高くなる。出土遺物は土器小片2点である。

溝4（図27、29）

BC19-55・65・75区の〈11層〉および〈12層〉上面で検出した。検出面の標高は2.26～2.33mである。溝の幅は20～45cm、深さは3～8cmと非常に浅く、本来溝が掘り込まれた地表面は失われているとみられる。断面形は皿形を呈す。底面の標高は、2.25m前後を測り、ほぼ水平である。

溝4は、よく残存している箇所においても深さが5cm程度と非常に浅く、溝3・5との交点における切り合い

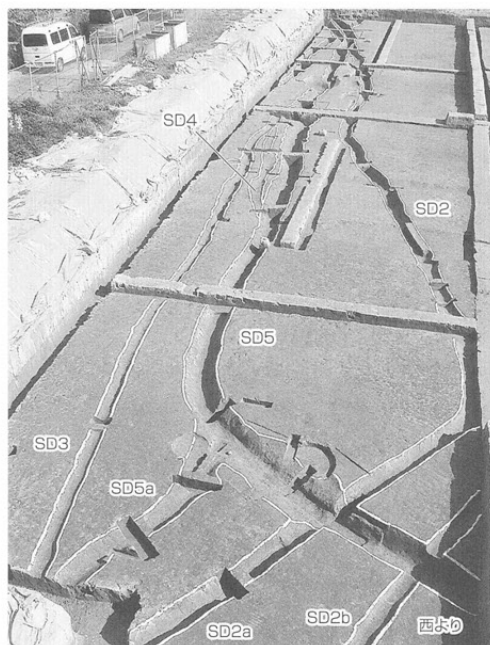


図27 溝1～5全景

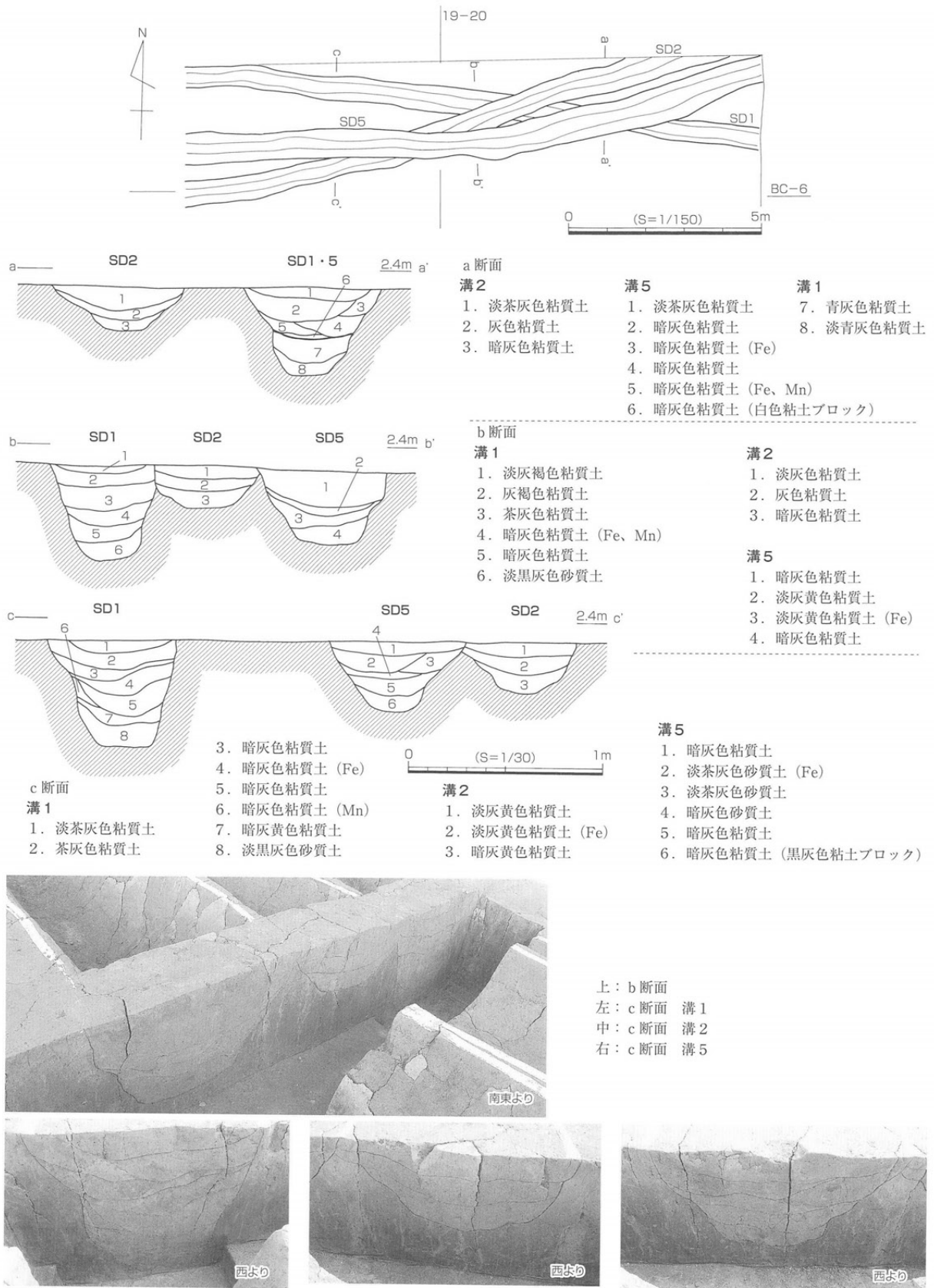


図28 溝1・2・5

関係の断面観察を十分に行うことができなかった。しかし、溝3・5との交差部よりも延長して溝4が検出されなかったことから判断すると、切り合い関係の有無はともかく、溝4は溝3・5と有機的な関係をもって掘削されたものとみられる。一方で、これら3条の溝をすべて同時に機能していたと考え、溝4の掘削位置の合理的な解釈が困難となる。したがって、溝4は、溝3との構造の類似性や掘削方向から、溝3とは同時に機能していた時期があったとみられるが、溝5とは切り合い関係をもつ可能性が高い。ただし、溝3には溝5の古段階とも同時に機能する時期があったとみられるため、先後関係としては溝3・4⇒溝3・5（古）が考えられる。

溝4の出土遺物には土器小片8点がある。図化できるものはない。

溝5（古）（図27、29、30）

溝5（古）は、BC19-55区（図29）およびBC19-96区（図30）の溝5（新）の肩部において埋土の一部を確認したのみである。BC19-55区では〈12層〉上面の標高2.25mで、BC19-96区では〈11層〉上面の標高2.20mで

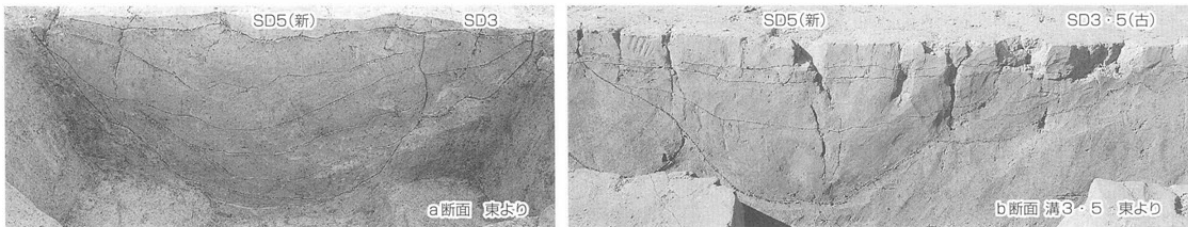
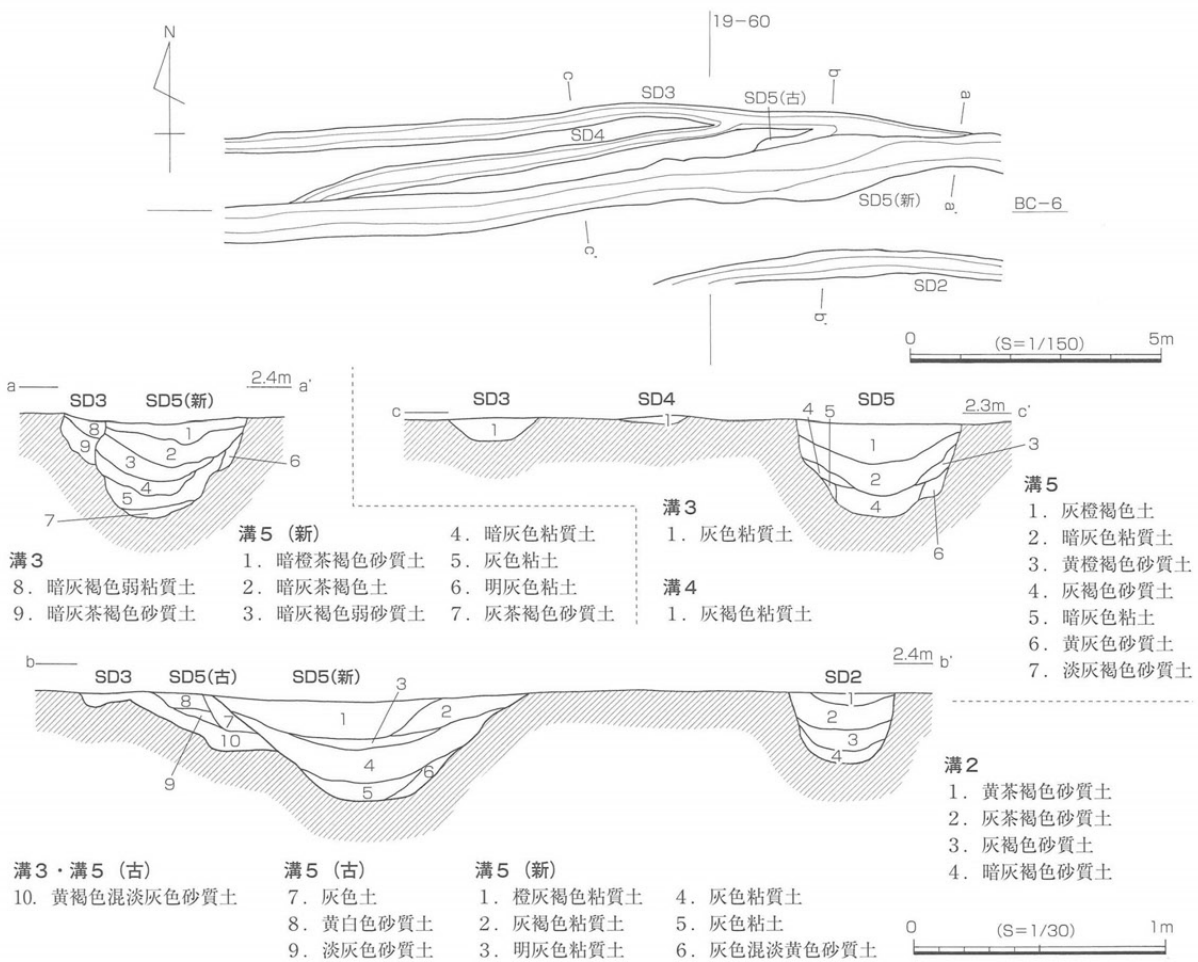


図29 溝2～5

検出した。残存部から推定すると溝5（古）は、新段階よりも浅く、緩やかな断面形であったとみられる。

溝5（古）には溝3と同時に機能していた時期があったと考えられるが、図29 b 断面の堆積状況を検討すると、溝3埋没後にも機能していた可能性がある。溝5（古）が検出されたのは、それぞれ溝5の古段階・新段階の分岐地点にあたり、分岐路の付け替えに伴って、溝5（新）が新たに掘削されたことを示唆する。

溝5（新）（図27～31）

溝5（新）は、調査区北半を東西方向に横断し、BC19-96区において南西に大きく湾曲する。また湾曲地点において北西方向に向かう溝5 aに分岐する。溝5 aは分岐して3mほどの地点でさらに西側に向かう溝5 bに分岐する。標高2.17～2.33mで検出した。検出面は〈10層〉から〈12層〉上面である。溝の幅は最大で120cm、狭い地点で50cm程度である。分岐したものは規模が小さくなり、溝5 aでは幅45～70cm、深さ12～22cm、溝5 bでは幅20cm、深さ3cmとなる。断面形は、調査区東側では逆台形に近いU字形、中央部から西側ではやや不定形のU

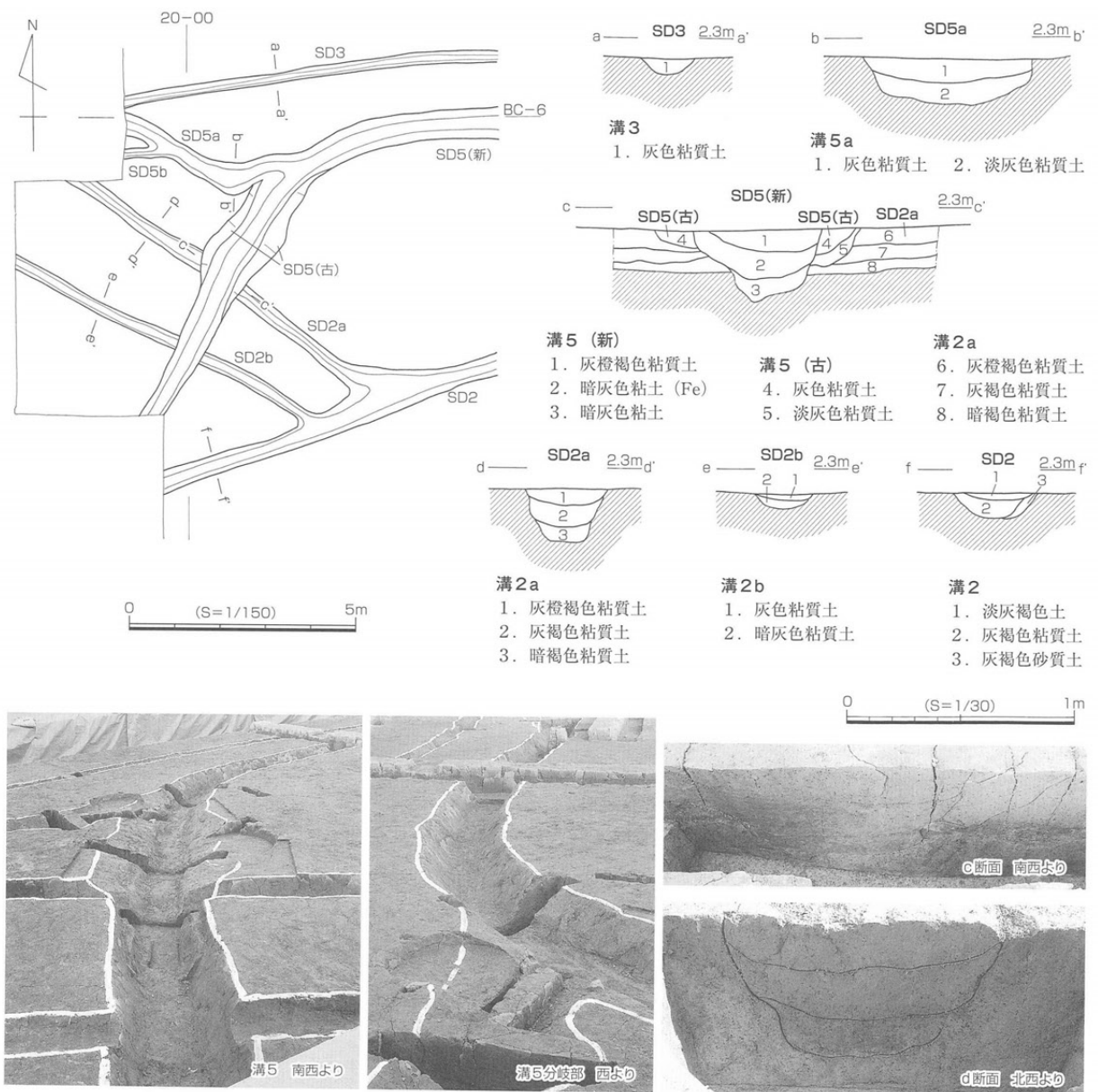
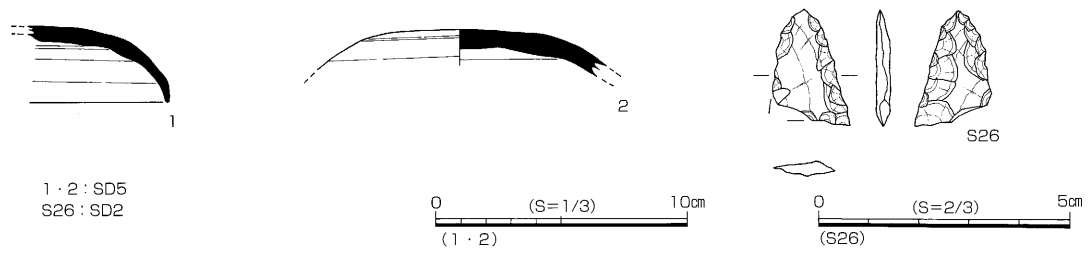


図30 溝2・3・5



番号	器種	特徴	色調(内/外)	胎土
1	須恵器・杯蓋	(内)・(外)回転ナデ	淡青灰	微砂・堅緻
2	須恵器・杯蓋	(外)一部に暗緑灰の自然釉	淡青灰/暗灰	微砂・堅緻

番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	特徴
S26	石鏃	2.29	(1.53)	0.29	0.9	サヌカイト	基部を一部欠損、平基式

図31 溝2・5出土遺物

字形となる。埋土は3～7層に分かれ、灰色～暗灰色の粘質土～粘土を基本とする。地点によっては、〈12層〉をブロック状に含む砂質土が間層としてみられ、溝機能時の流入土と考えられる。底面の標高は、調査区東側で1.97m、中央部で1.89m、西側で1.90mを測り、西に向けてわずかに低くなる。溝5 aは2.0m、5 bは2.17mを測る。

須恵器杯蓋が2点出土しており、TK209型式に相当するとみられる(図31)。したがって、溝5(新)は古墳時代後期に帰属する。

〈溝2～5の掘削方向と時間的推移〉

調査区北半で検出した溝2～5にはいくつかの共通点を見出すことができる。第一に、いずれの溝も振れ幅はあるものの基本的に東西方向を指向する点である。新しい溝ほど東西の指向方向が正方位に近くなることも注意される。第二に、溝4を除くすべての溝の底面の標高が西側に向かって下がる傾向をもつ点。第三に、溝2・溝5にとりわけ顕著にみられる共通点ではあるが、いずれの溝も調査区内で南西方向と北西方向に向かって分岐している点である。北西方向に向かう溝をそれぞれ2条ずつ有する点でも、両者の掘削針路はきわめて似ている。また、溝3・4が同時に機能していたとするなら、本来はそれぞれ西側・南西側に向けてのびる、同様の針路をもつものであった可能性がある。これらの溝はいずれも東から西へ流れる水路として機能していたと考えられ、分岐地点を移動させながらも、基本的には同じ目的をもって繰り返し掘削されたものとみられる。溝の幅・深さをもとに分岐における主流と副流の別を読み取るなら、当初の溝2、溝3・4の時点では、北西(西)に向かう分岐が主流であったのに対し、溝5では南西に向かう分岐が主流となっている。底面の標高をみると、2 a (1.97 m) < 2 (2.09m)、3 (2.19m) < 4 (2.25m)、5 (1.90m) < 5 a (2.0m) となり、主流とみられる溝の底面の標高が低くなる傾向をみることができる。

溝6(図32)

調査区南西隅のBC19-79・89・99区を、東西に横断する溝である。やや蛇行しており、東端は南側の調査区外へのびている。標高2.18～2.27mの〈11層〉上面で検出した。後述の、古代溝である溝9と同一面で検出し、埋土の識別から別遺構と判断した。南側の肩が調査範囲外に位置するため正確な規模は不明だが、幅は現存で135cm、深さが31cmを測る。断面形はやや凹凸があるものの、皿形を呈す。埋土は2～4層に分かれ、灰褐色～暗灰褐色砂質土が主体である。底面の標高は西側で2.00m、東側で1.99mを測り、ほぼ水平である。

出土遺物には土器小片13点があるが、図化できるものはない。検出面および埋土の特徴から判断すると、弥生時代から古墳時代に帰属すると考えられる。

b. ピット

弥生時代から古墳時代に帰属するとみられるピットは2区の〈11層〉上面で検出したピット16の1基のみである。埋土は明灰褐色土で直径26～30cm、深さ7cmである。

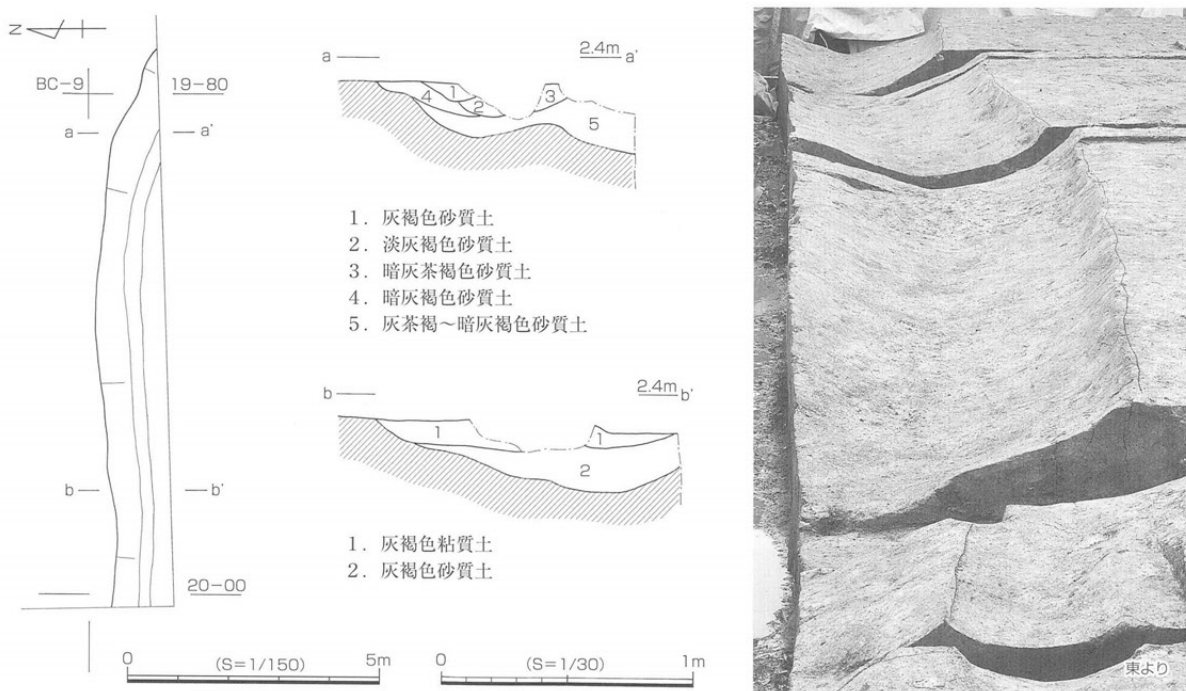


図32 溝6

第5節 古代の遺構・遺物

古代に帰属する遺構として確認したのは道路状遺構（溝5条）、ピット11基、耕作痕である（図33、34）。これらは先述のように、弥生時代から古墳時代に帰属する遺構と同じ検出面である、〈9層〉を除去した面で確認した。各遺構の帰属時期の判断に際しては、弥生～古墳時代、古代の遺構ともに出土遺物が少なかったため、埋土の色調等を参考とした。したがって、ピットの帰属時期の判定には不確実な部分があると思われる。しかし、ここで報告する古代の溝については、弥生～古墳時代の溝群と調査区内の複数箇所でも切り合い関係をもっており、いずれの箇所においても弥生～古墳時代の溝群を切っていることが確認でき、少なくともこれらより新しい遺構であることは確実である。

古代の溝は、場所によってわずかに歪みをもちながらもほぼ正確に東西・南北を指向しており、条里に関連する遺構とみることができる。〈9層〉を除去した面の比高差は15cm程度を測り、ほぼ水平となる。しかし、わずかな標高の変化を検討すると、溝7・溝8および溝9に挟まれた南北・東西方向に帯状にのびる空間のみ、周囲から5～15cmほど緩やかに高くなっている。これらの溝の周辺で検出した鋤痕とみられる小溝の存在から当該期には耕作地として利用されていたとみられ、2条の溝に挟まれた空間は耕作地を画する道路および畦畔として機能していたと考えられる。したがって、〈9層〉を除去した面の地形は、古代の耕作面の状況をよく反映しているものとみることができる。古代以前に自然地形の改変が進んでいた可能性はあるものの、古代の条里に関連する遺構の掘削と整地に伴って、それ以前の包含層が少なからず掘削されたことはほぼ間違いない。本調査地点では、中世以降の土地造成が深くまで及ばなかったために、古代の耕作面が比較的良好に残存したようである。しかし、調査区東半の〈10層〉上面で検出した溝は、非常に浅く、残存状況が悪かった。

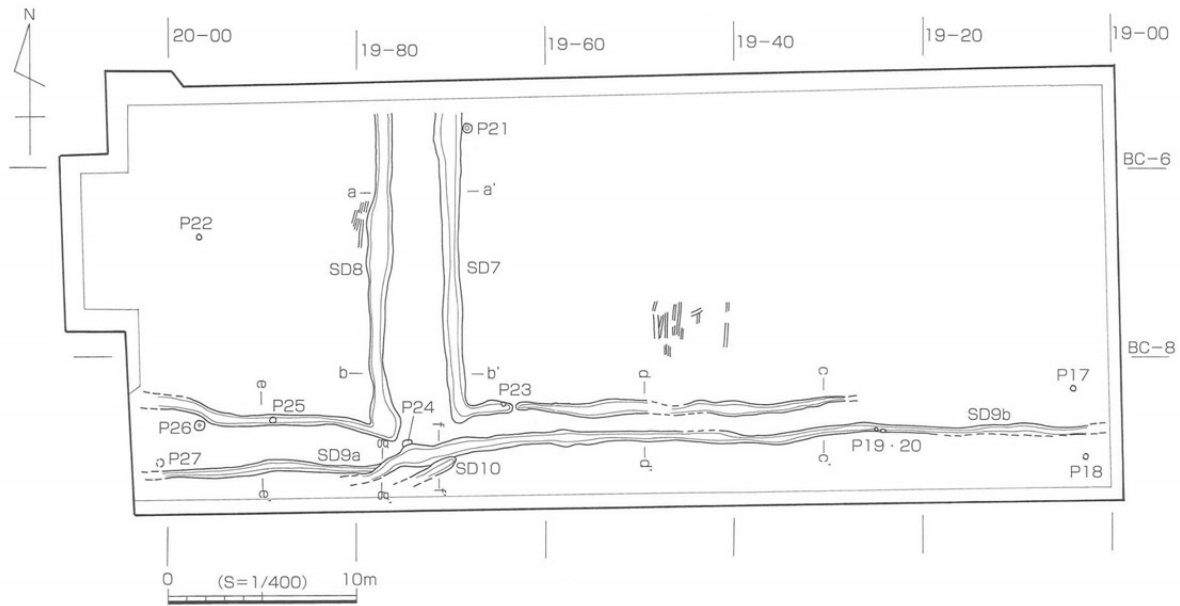


図33 古代検出遺構全体図

a. 道路状遺構 (図35)

〈10層〉・〈11層〉上面において、溝7～10を検出した。溝10については一部を確認したのみで正確な方向は不明だが、これらの溝はいずれも東西・南北方向を指向する。2条の溝がほぼ一定の間隔で並行すること、規模や埋土の類似性から、2条で対をなすと考えられる。溝に挟まれた空間は、周囲よりも高まっており、とりわけ溝7・8間では顕著にその傾向が観察された。これらのことから、溝7～10とそれらに挟まれた空間は耕作地を画する畦畔であるとともに、両脇に側溝を伴う道路として機能していたと考えられる。ここでは、溝7～10およびそれらに挟まれた空間を道路状遺構として扱い、溝同士の関係について言及する。

溝7・8は、それぞれBC19-68区・BC19-78区において東側・西側に直角に屈曲しており、溝9は東西方向にはほぼ直進する。そのため、これらの溝に挟まれた道路部分は、北・東・西にのびる三叉路となる。道路状遺構は、溝の芯々間で計測した場合、溝7・8間

で幅が3.7～4.1m、溝7・9 b間で1.6m、溝8・9 a間で2.2～3.6mを測り、南北方向の道路が東西方向に比べてやや広くなる。ただし、溝9 bはBC19-79区以西ではやや南に逸れて調査範囲外にのびるため、溝8・9 b間は南北方向と同程度の幅であった可能性がある。断面を検討すると(図35)、南北方向の道路が周囲の耕作面より5～15cm程度高まるのに対し、東西方向では南北方向ほど明瞭な高まりがみられなかった。道路の中軸線は、溝7・8間では19-80ラインから東へ3.0m、溝7・9 b間ではBC-8ラインから南へ3.5m、溝8・9 a間ではBC-8ラインから南へ4.5mに位置する。したがって、東西道路の軸線は三叉路部を境にして1.0mほどずれが存在するこ

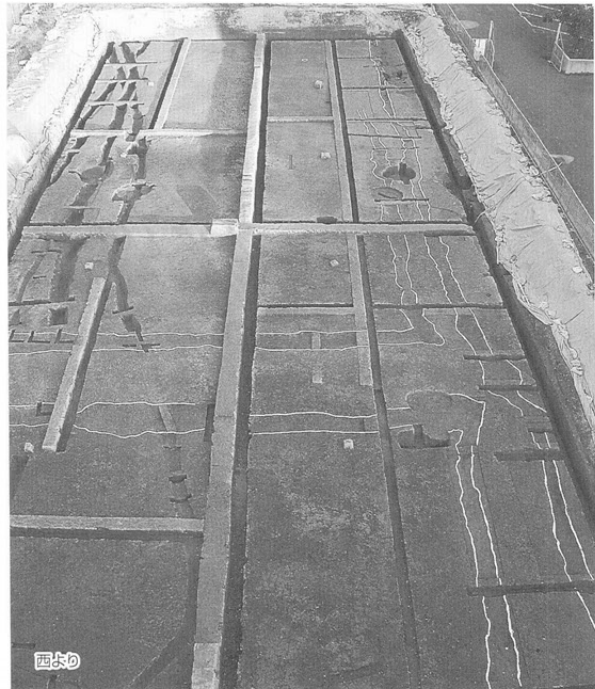
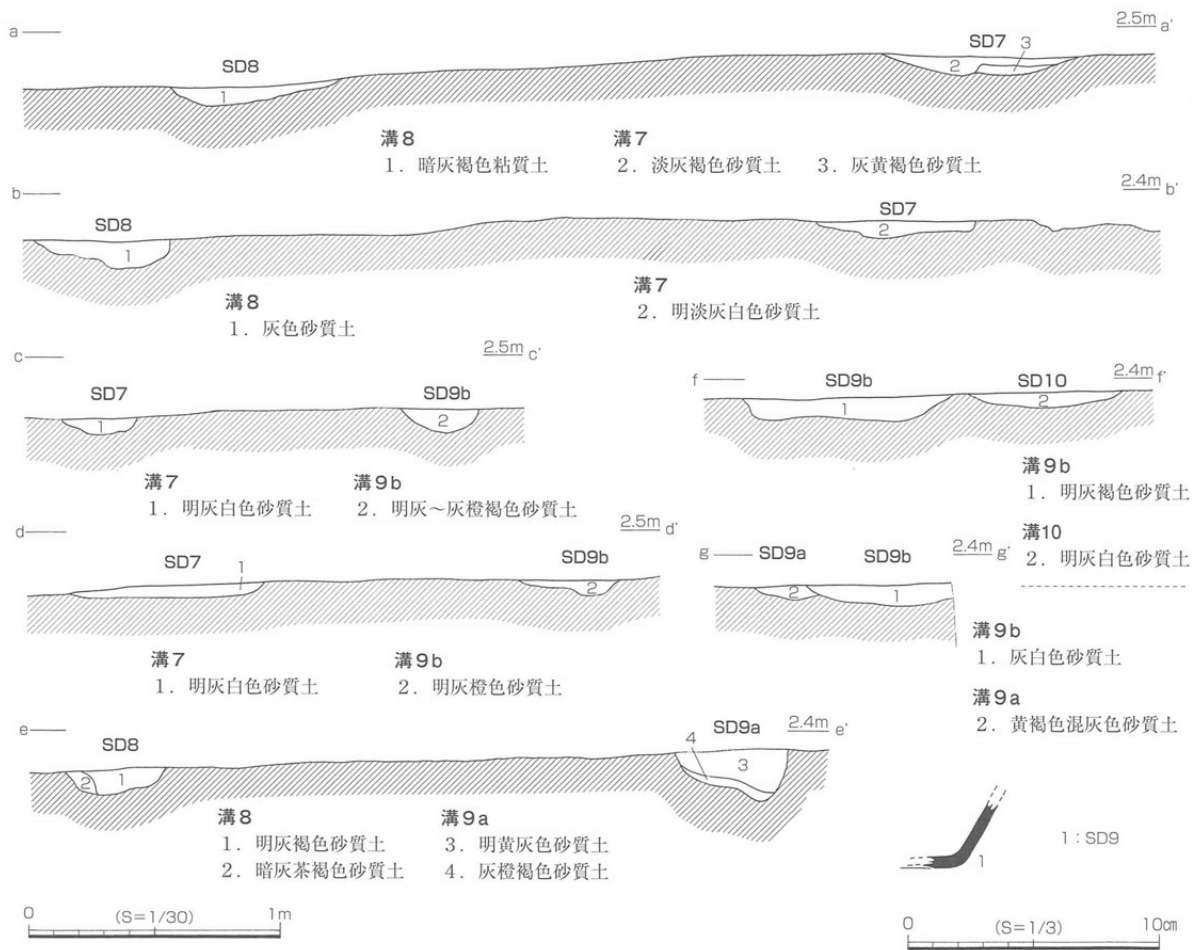


図34 古代全景



番号	器種	特徴	色調(内/外)	胎土
1	須恵器・杯身	(内)・(外)回転ナデ	灰白	微砂・堅緻

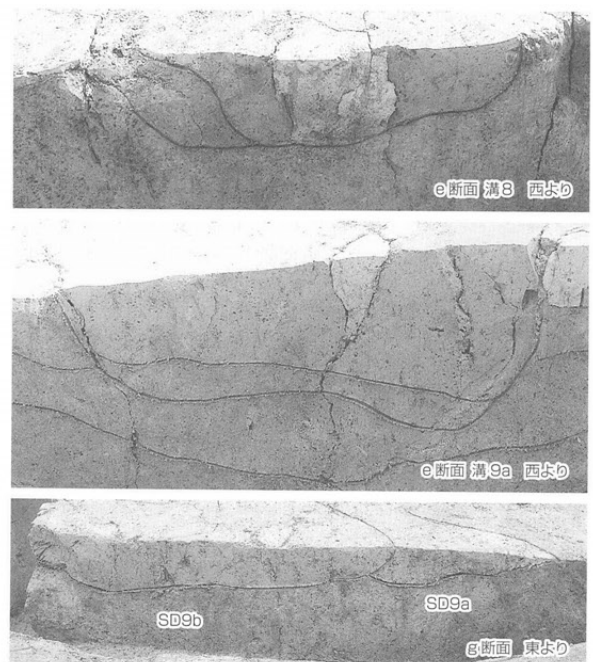


図35 道路状遺構(溝7~10)・溝9出土遺物

とになる。溝9bの歪みおよび溝9a⇒9bの掘り直しによってずれが拡大している点に注意される。

溝7 (図35)

19-70ラインを南北に走り、BC19-68区で東に直角に曲がる溝である。幅は南北方向で90~140cm、東西方向で30~90cmを測る。深さは南北方向で12cm、東西方向では7cmと浅くなるためにBC19-28区より東側では検出できなかった。また、BC19-68区では浅いために途切れている箇所がある。屈曲部ではやや南に広がっている。

溝8 (図35)

19-80ラインから1.3m東を南北に走り、BC19-78区で西に直角に曲がる溝である。幅は南北方向で70~160cm、東西方向で40~70cmとなり、東西方向がやや狭くなっている。深さは南北方向で16cm、東西方向で13cmである。東西方向の溝は、BC19-98区からやや北側に曲っている。また、屈曲部ではやや東側に広がっている。

溝9a (図35)

BC-9ラインより0.9m南を東西方向に通る溝である。BC19-79区で溝9bに切られており、溝9bの前段階の溝と考えられる。幅は30~65cm、深さは20cmを測る。

溝9b (図35)

BC-9ラインより0.9m北を東西方向に通る、道路の三叉路部付近から西側では南に曲って調査範囲外へと続いている。溝9aを切っており、BC19-79区以東ではほぼ同じ位置を踏襲して掘り直したものと考えられる。幅は、狭い箇所30cm、道路の三叉路部付近では130cmと広がっている。深さは6~12cmである。調査区西端では、近世溝である溝18によって南側の肩を失っていた。

溝10 (図35)

BC19-79区でのみ確認した。埋土の色調や、掘削方向が溝9bと並行することから古代の遺構と判断した。幅が50cm、深さが7cmである。溝9bとの重複部分が少なく、浅い遺構であったため溝9bとの切り合い関係を断面で確認することができなかった。平面観察の限りでは溝10が9bを切っており、その場合は9a⇒9b⇒10の順番に南側へ位置を移しながら溝の掘り直しが行われたこととなる。

溝7~10出土遺物 (図35)

溝7~10からは土器片が44点出土した。遺構の時期を示すものとして、10世紀の須恵器杯身底部が2点あり、1点を図化した。溝9からの出土で、9a・9bの切り合いを把握する前に出土したため帰属は不明である。

b. ピット

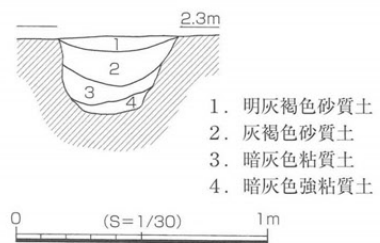
古代に帰属するピットは11基あり (P17~27)、道路状遺構の側溝周辺に分布する傾向がある (図33)。溝7~9の底で検出したものが4基、溝の際で検出したものが5基ある。径は16~47cm、深さは5~30cmである。これらは道路状遺構に伴う構築物の痕跡の可能性があるが、柱痕はいずれも観察されなかった。埋土は、〈9層〉に似る灰~灰白色系の粘質~砂質土である。もっともしっかりした形状をもつピット26を代表例として挙げる。

ピット26 (図36)

BC19-98区で検出した。径47cm、深さ30cmを測る。検出面の標高は、2.26mである。ピット26を避けるように溝8が北側に逸れているため、溝8と同時に機能していた構築物の痕跡の可能性があろう。

c. 耕作痕

BC19-47区、BC19-76区の2地点で検出した。幅が10~25cm、深さ1~2cmの小溝で鋤痕とみられる。2地点とも南北方向を指向している。埋土は、灰~灰白色の粘質~砂質土である。



- 1. 明灰褐色砂質土
- 2. 灰褐色砂質土
- 3. 暗灰色粘質土
- 4. 暗灰色強粘質土

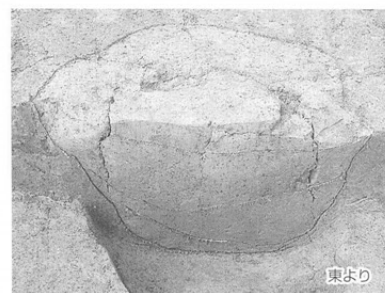
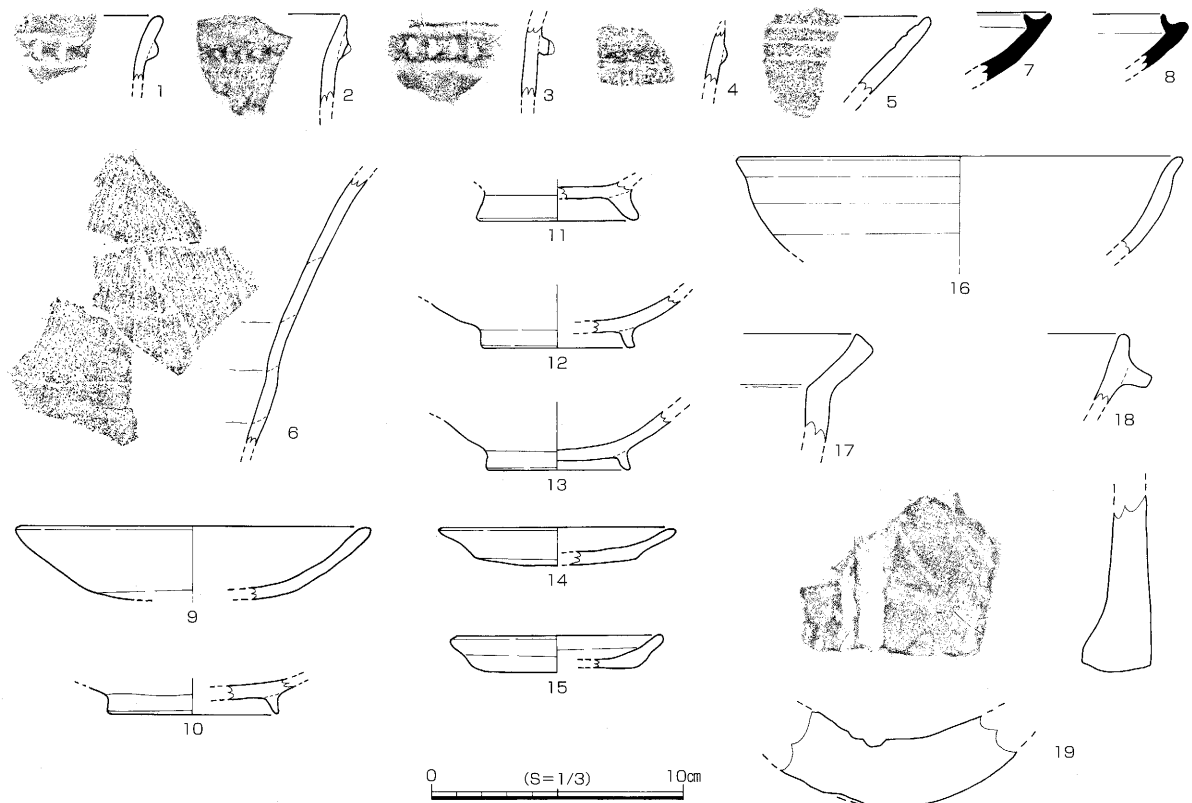


図36 ピット26

d. 包含層出土遺物

〈8～10層〉からは、コンテナ約2箱分の遺物が出土した。堆積時期は弥生時代から中世におよぶ。古代～中世層である〈8・9層〉には古代以前の遺物も含まれており、既存の包含層を破壊した際の混入と考えられる。**土器** (図37) 1～4、6は弥生時代早期の突帯文深鉢、5は同時期とみられる浅鉢である。〈11層〉からの混入・巻き上げとみられる。7、8は須恵器杯身で、7世紀初頭～前葉のものである。10～13は土師質土器碗である。12世紀後半～13世紀前半のものである。14・15は土師質土器皿で11世紀後半から13世紀のものであろう。16は〈8層〉上面で出土した龍泉窯系の青磁碗である。文様はみられないが、13世紀後半のものともみられる。17は土師質鍋で10世紀～11世紀前半、18は瓦質釜の口縁部で14世紀頃のものである。19は古代の平瓦である。内面に



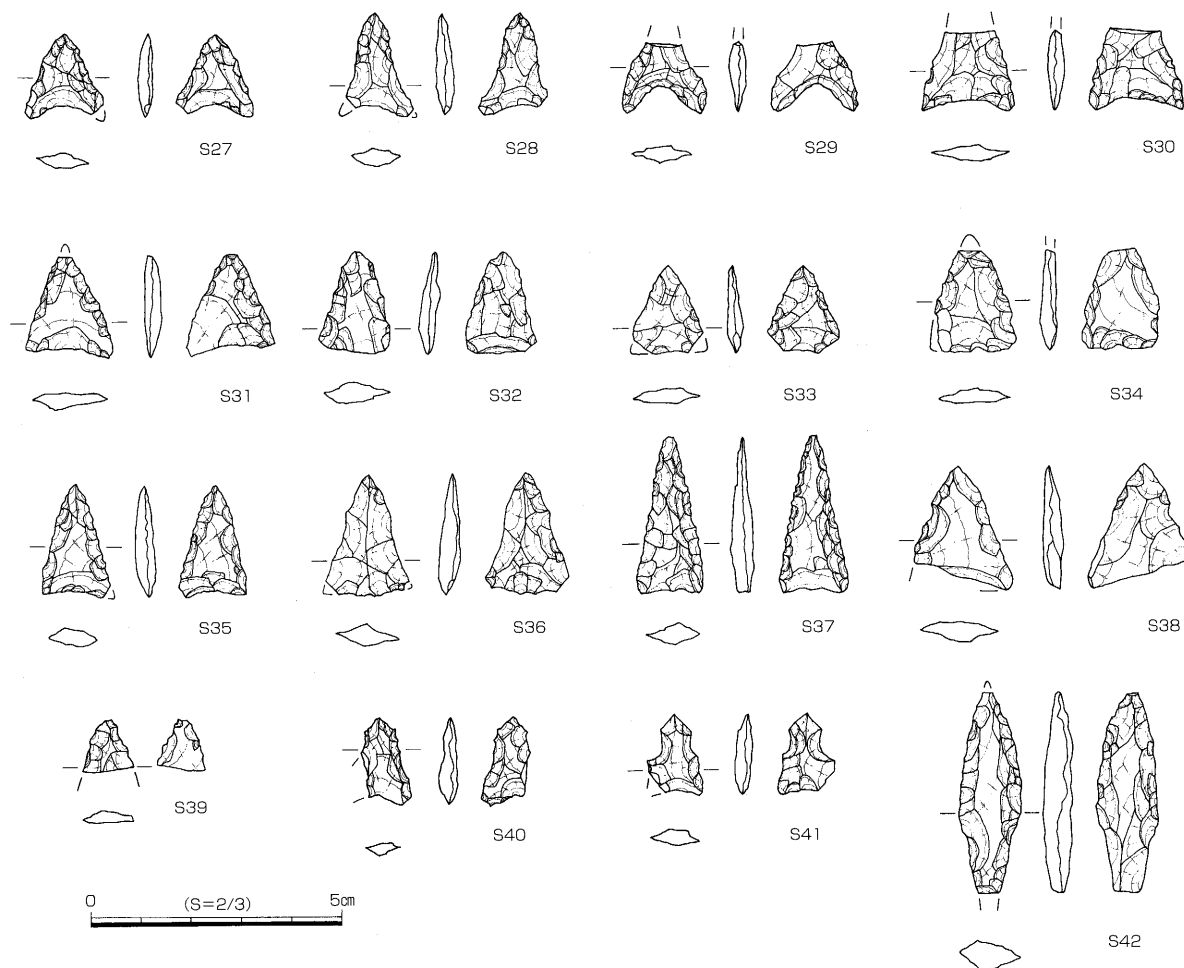
番号	出土層位	器種	法量 (cm)		特徴	色調 (内/外)	胎土
			口径	底径			
1	10層	突帯文土器・深鉢	-	-	(内)・(外)摩滅、突帯：三角形・V字	灰黄褐/褐灰	細砂
2	9～11層上面	突帯文土器・深鉢	-	-	(内)摩滅/ナデ・沈線文、(外)摩滅/ナデ、突帯：三角形・開V字	灰白/明黄褐	細砂
3	10層	突帯文土器・深鉢	-	-	(内)摩滅/ナデ、(外)摩滅/ナデ、突帯：カマボコ形・右D字	にぶい橙/にぶい黄橙	粗砂～細礫
4	8～9層	突帯文土器・深鉢	-	-	(内)ナデ、(外)ナデ→沈線文、突帯：三角形(低い)・刻みなし	橙褐/淡黄褐	粗砂
5	8～9層	浅鉢	-	-	(内)ナデ→沈線3条、(外)摩滅/ナデ	茶褐/淡褐	微砂～細砂
6	9～11層上面	突帯文土器・深鉢	-	-	(内)ナデ、(外)ナデ→横位沈線1条+沈線文	にぶい黄橙/灰褐	粗砂～細礫
7	8～9層	須恵器・杯身	-	-	(内)回転ナデ、(外)回転ナデ・緑灰色の自然釉付着	灰	微砂・精良
8	9層	須恵器・杯身	-	-	(内)回転ナデ、(外)回転ナデ	灰白	微砂
9	8～9層	土師質・杯	-	-	(内)ナデ、(外)かなり丁寧なナデ	淡橙	微砂～細砂
10	8～9層	土師質・碗	-	(6.8)	(内)・(外)丁寧なナデ	茶褐	微砂
11	8～9層	土師質・碗	-	(6.2)	(内)丁寧なナデ、(外)ナデ	淡灰黒/淡褐	細砂
12	8～9層	土師質・碗	-	(6.0)	(内)ナデ・重ね焼き痕、(外)ナデ	淡黄白褐	微砂・精良
13	8～9層	土師質・碗	-	(5.7)	(内)・(外)丁寧なナデ、底部はヘラ切り→丁寧なナデ	黄橙褐	微砂・精良
14	9層	土師質・皿	(9.4)	(6.4)	摩滅/ナデ?	橙	細砂
15	8～9層	土師質・皿	(8.5)	(6.2)	(内)・(外)ナデ	暗茶褐～褐/淡茶褐	細砂
16	8層上面	青磁・碗	-	-	うすく丁寧な施釉、内・外ともに貫入、龍泉窯系	淡オリブ灰	微砂・堅緻
17	8～9層	土師質・鍋	-	-	(内)横方向のナデ、(外)ナナメハケメ→ヨコナデ	茶褐	微砂・鉾物粒
18	8～9層	瓦質・釜	-	-	(内)・(外)ヨコナデ	灰	微砂
19	9層	平瓦	-	-	(内)布目、(外)丁寧なナデ	灰	微砂

図37 〈8層〉～〈10層〉出土遺物：土器

格子状の布目がみられる。18のみ14世紀代とやや新しくなるものの、上層を除去しきれていなかったための混入とみられる。したがって、〈8層〉・〈9層〉の堆積時期はおよそ10世紀～13世紀前半とみることができる。

石器 (図38、39) 石器には、石鏃16点、スクレイパー2点、楔形石器4点、石核1点、砥石1点がある。泥岩製の砥石を除くと、すべてサヌカイトを素材としている。

石鏃には凹基式のもの5点 (S27～30、S40)、平基式のもの9点 (S31～38、S41)、凸基有茎式のもの1点 (S42) がある。S39は基部側を破損しており、型式不明である。S27～29、S37が〈10層〉からの出土資料で、それ以外



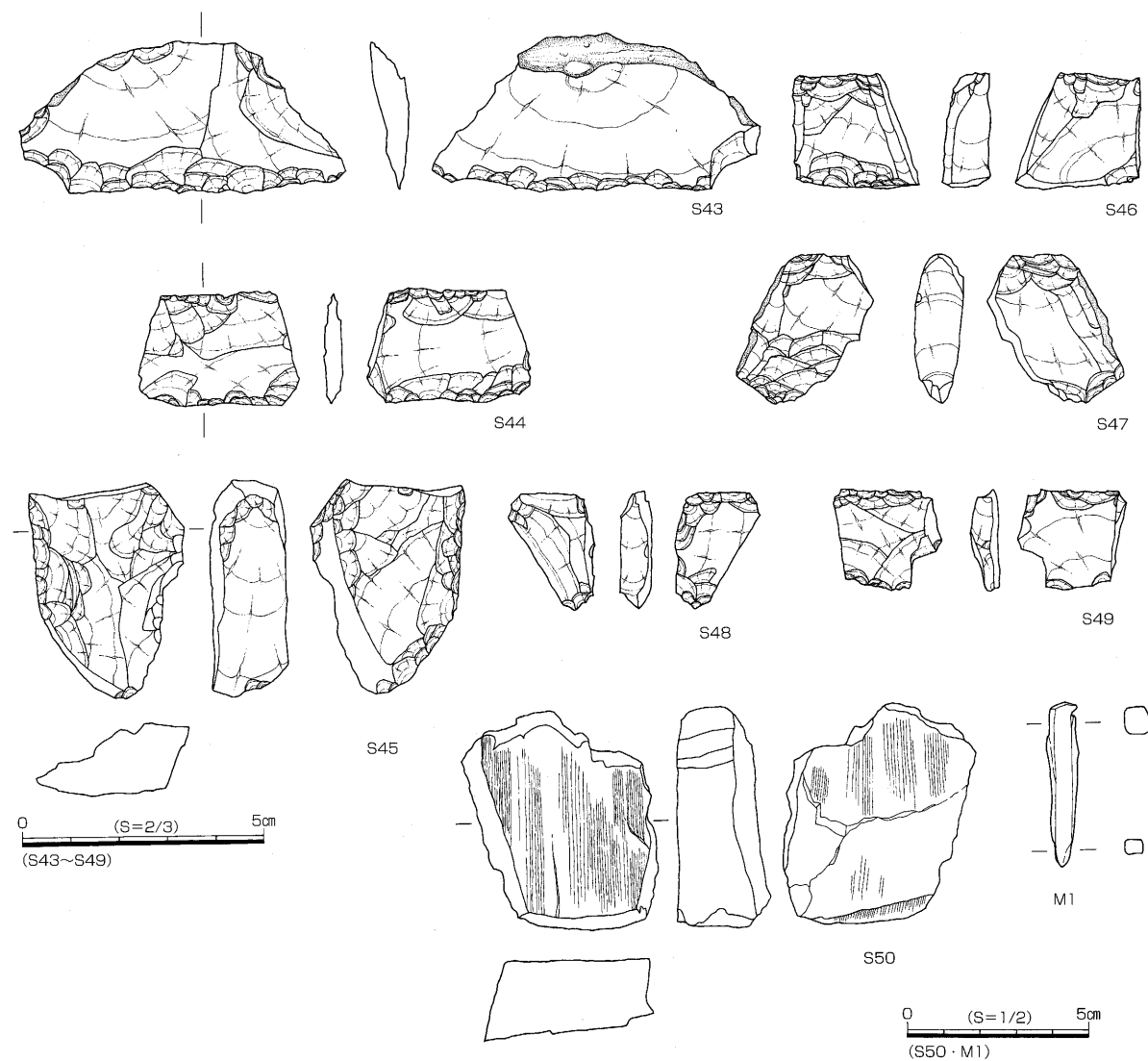
番号	出土層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S27	10層	石鏃	1.66	1.56	0.31	0.6	サヌカイト	基部欠損、凹基式
S28	10層	石鏃	2.04	(1.35)	0.35	0.6	サヌカイト	基部欠損、凹基式
S29	10層	石鏃	(1.39)	1.68	0.33	0.5	サヌカイト	先端破損、凹基式
S30	8～9層	石鏃	(1.58)	1.86	0.33	0.8	サヌカイト	先端を欠損、凹基式
S31	8～9層	石鏃	2.46	(1.97)	0.38	1.5	サヌカイト	基部破損、平基式
S32	9～11層	石鏃	(2.03)	1.73	0.33	0.9	サヌカイト	先端わずかに欠損、平基式
S33	8～9層	石鏃	(2.00)	(1.59)	0.30	1.1	サヌカイト	先端欠損、平基式
S34	9層	石鏃	2.04	1.42	0.41	0.8	サヌカイト	完形、平基式
S35	9層	石鏃	2.21	1.33	0.36	0.9	サヌカイト	基部を一部欠損、平基式
S36	8～11層	石鏃	2.41	(1.67)	0.44	1.2	サヌカイト	基部欠損、平基式
S37	10層	石鏃	3.12	1.37	0.44	1.3	サヌカイト	完形、平基式
S38	8～9層	石鏃	1.71	(1.40)	0.30	0.5	サヌカイト	基部両側欠損、平基式
S39	8～9層	石鏃	(1.01)	(1.00)	0.24	0.2	サヌカイト	基部側破損
S40	8～9層	石鏃	1.76	(0.99)	0.33	0.4	サヌカイト	基部破損、凹基式
S41	9～11層	石鏃	1.59	(1.13)	0.33	0.4	サヌカイト	基部欠損、平基式、両側縁に挟りが入る
S42	8～9層	石鏃	(4.00)	1.27	0.57	2.9	サヌカイト	基部・先端欠損、凸基有茎式

図38 〈8層〉～〈10層〉出土遺物：石器1

のものは古代層である〈8層〉・〈9層〉から出土した混入遺物である。〈10層〉は、石鏃の存在をもとに判断する限り、弥生時代前期から中期の堆積層と考えられよう。

S43・44は、スクレイパーである。S43には、自然面を残した横長剥片に、表裏両面から調整を施している。S44には、両側縁に二次調整がみられ、打製石剣もしくは打製石庖丁の破損品の可能性がある。S46～49は楔形石器である。いずれの資料にも片側に剪断面がみられる。S50は砥石の破損品である。両面に研磨がみられる。

鉄器 (図39) 図化した1点以外に、〈8～9層〉出土の鉄片が3点ある。M1は鉄釘である。



番号	出土層位	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S43	8～9層	スクレイパー	3.21	6.78	0.92	13.7	サヌカイト	表面にFe沈着、自然面残存
S44	8～9層	スクレイパー	2.38	3.35	0.40	4.7	サヌカイト	石剣・石庖丁の破損品の可能性あり
S45	9～11層	石核	4.49	3.24	1.60	25.1	サヌカイト	
S46	10層	楔形石器	2.48	2.55	0.96	6.9	サヌカイト	片側に剪断面あり
S47	8～9層	楔形石器	3.08	2.81	0.98	8.3	サヌカイト	片側に剪断面あり
S48	8～9層	楔形石器	2.42	1.75	0.66	2.9	サヌカイト	片側に剪断面あり
S49	8層	楔形石器	2.09	2.24	0.61	3.1	サヌカイト	片側に剪断面あり
S50	8～9層	砥石	(6.04)	(5.32)	2.61	105.9	泥岩	
番号	出土層位	器種	長さ (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	特徴		
M1	8～9層	釘 (角釘)	4.5	0.9	4.0	頭部つぶれ		

図39 〈8層〉～〈10層〉出土遺物：石器2・鉄器

第6節 中世の遺構・遺物

中世の遺構は、〈8層〉上面で検出した鋤痕とみられる耕作痕である。〈8層〉は調査区全体に水平堆積しており、断面の観察や検出された遺構から耕作地として利用されていたことが窺える。〈8～9層〉の出土遺物は10～13世紀前半を主体とし、〈4～7層〉では13世紀後半を上限とした遺物が出土している。また、〈8層〉上面の精査中に亀山焼の破片や13世紀後半の青磁片が出土しており、上面の時期はこの頃に求められると考えられる。

a. 耕作痕 (図41)

調査区のほぼ全域にわたって、耕作痕を検出した。幅10～80cm、深さが1～3cm程度の浅い溝で、鋤痕と考えられるものである。19-50ラインより東へ1mを境に西側では南北方向に、東側では東西方向に掘削されており、耕作地の区画の境界を示している可能性が高い。畦畔などは確認できなかった。なお、調査区北西部では耕作痕を検出できなかったが、これについては〈7層〉を除去しきれていなかったことが要因として考えられる。

b. 包含層出土遺物 (図42)

ここでは、中世から近世の包含層である〈4～7層〉出土遺物について述べる。土器を主とする遺物がコンテナ約1箱出土している。

土器の多くは、中世土器の細片で図化できるものは多くない。1は白磁碗である。口縁部を玉縁にするもので、太宰府陶磁器分類の椀Ⅳ類にあたる。13世紀代のものと



図40 中世全景

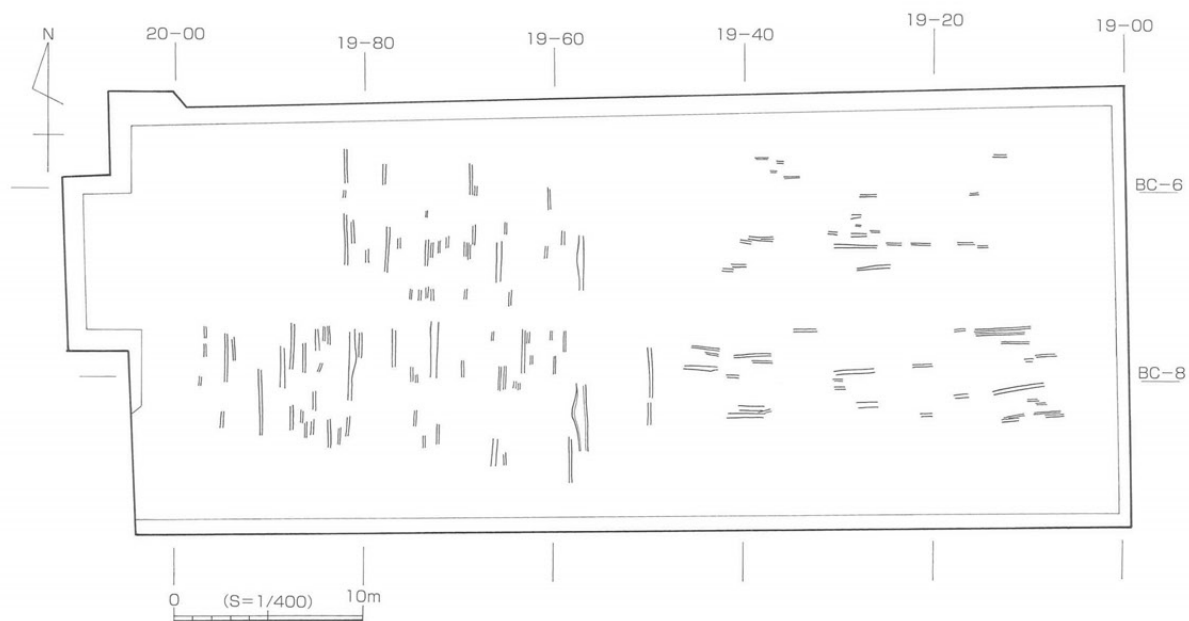
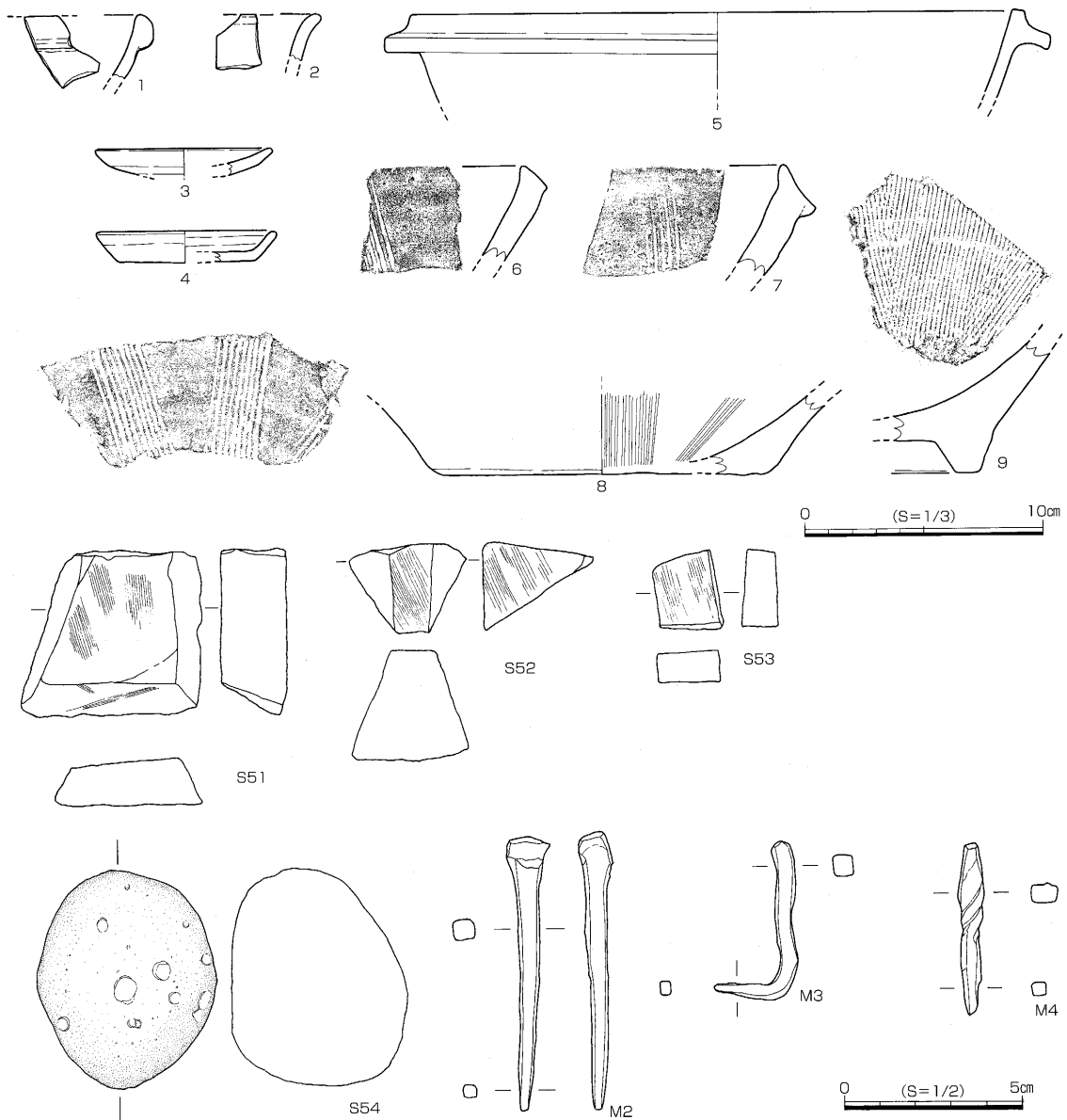


図41 中世検出遺構全体図



番号	器種	法量 (cm)		特徴	色調 (内/外)	胎土
		口径	底径			
1	白磁・碗	-	-	施釉うすく丁寧、光沢あり、椀Ⅳ類	灰白	微砂・堅緻
2	青磁・碗	-	-	(内)貫入、施釉うすく丁寧	淡灰緑	微砂・堅緻
3	白磁・皿	-	-	(内)貫入、白釉、皿Ⅶ類もしくはⅤ類	白	微砂・堅緻
4	土師質・皿	(7.6)	(5.7)	(内)・(外)ヨコナデ、底部は回転ヘラ切り後に粗いナデ	乳白褐	微砂・精良
5	瓦質・釜	(25.8)	-	(内)・(外)回転ヨコナデ	灰黒	微砂
6	備前焼・播鉢	-	-	(内)・(外)回転ヨコナデ	灰/灰黒	粗砂・堅緻
7	備前焼・播鉢	-	-	(内)回転ヨコナデ・6条1組条線、(外)回転ヨコナデ・接合部は粗い調整・自然釉付着	淡茶/淡赤茶	粗砂・堅緻
8	備前焼・播鉢	-	(13.8)	(内)丁寧なナデ→条線9本1組、(外)ヨコナデ	淡茶/淡茶褐	粗砂・堅緻
9	播鉢	-	-	(内)条線(隙間なく)、(外)ナデ・施釉、瀬戸・美濃系か	淡黄褐/(釉)赤茶	微砂・堅緻

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	特徴
S51	砥石	4.65	5.10	1.85	69.4	流紋岩	片面に研磨面あり
S52	砥石	2.49	(3.27)	3.12	21.8	ホルンフェルス	4面に研磨面あり、破損品
S53	砥石	2.20	1.94	1.00	7.8	流紋岩	表裏両面に研磨面あり
S54	磨石	6.09	5.08	4.89	194.7	流紋岩	使用部が平らになっている

番号	器種	長さ (cm)	最大幅 (cm)	重量 (g)	特徴
M2	釘(角釘)	7.6	1.1	5.2	頭頂部つぶれあり
M3	釘	4.5	0.5	2.5	2片接合
M4	釘?(角釘?)	4.8	0.8	2.9	上部に斜めに針金状のものが巻きついて同体化し錆びついている

図42 〈4層〉～〈7層〉出土遺物

みられる。2は青磁碗の小片で、詳細は不明である。3は断片的な資料だが、白磁皿のⅧ類もしくはⅤ類にあたると思われる。13世紀代のものとみられる。4は土師質土器皿で13世紀後半～14世紀のものであろう。5は瓦質釜口縁部で14世紀以降のものである。6～8は備前焼播鉢である。6は13世紀中葉～後葉である。7は6に比べ口縁部が拡大し、やや新しい特徴をもつもので、13世紀後葉～14世紀前半に位置付けられる。8は、6・7の時期におさまるとみられる底部である。9は施釉陶器播鉢で、近世のものともみられる。

〈4～7層〉からの出土遺物は13世紀後半～14世紀が主体となるが、わずかに近世に入るとみられる新しい遺物も含んでおり、〈4層〉は近世の包含層になる可能性がある。

石製品として、砥石が3点（S51～53）出土した。S51・53が流紋岩、S52がホルンフェルスである。中世のものと考えられる。そのほか、磨石が1点出土しており（S54）、弥生時代早～前期の包含層である〈11層〉からの混入であろう。

M2～4は、鉄釘である。図化した3点以外に、鉄片1点が出土している。

第7節 近世の遺構・遺物

近世の遺構は、〈3層〉上面、〈4層〉上面の2面で検出した。ここでは、それぞれ近世上層・下層として報告する。土坑、溝、畦畔、耕作痕と考えられる東西・南北方向の浅い溝など、農耕に関わる遺構を確認した。

1. 近世下層

近世下層では、土坑7基、東西方向の浅い溝7条、耕作痕と考えられる東西・南北方向の浅い溝を検出した（図43、44）。このうち、土坑は調査区南西、東西方向の浅い溝は調査区東半、耕作痕は調査区西半に分布しており、それぞれの遺構の分布範囲は一定のまとまりを示す。

a. 土坑

調査区南西で7基の土坑を検出した。いずれもBC-8ライン沿いに東西に並んで構築されている。そのうち、4基はほぼ同じ位置に重複して掘削されたものである。

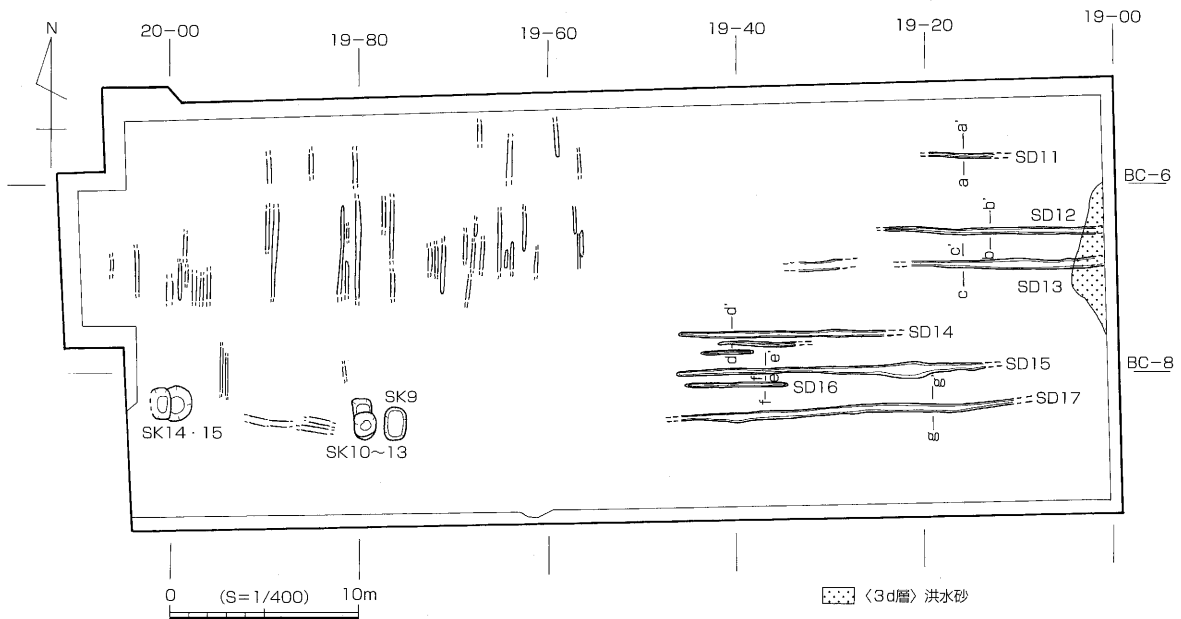


図43 近世下層検出遺構全体図

土坑9 (図45)

BC19-78区で検出した。検出面の標高は約2.7mで、底面の標高約2.1m、深さ約60cmをはかる。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸長164cm、短軸長108cmである。断面形は箱形を呈する。掘り方はほぼ直線的に立ち上がり、底面は平らである。埋土は3層に分層される灰色～茶褐色砂質土で構成される。各層の上面は、中央が緩くたわむものの、ほぼ平らな堆積状況を呈している。土器等の遺物は出土していない。

土坑10～13 (図46)

BC19-78・88区で検出した。検出面の標高は約2.6～2.7mである。4基の土坑がほとんど位置を違えず、重複して掘削されており、土坑10・11ではわずかな痕跡を確認したのみである。

土坑12は土坑13によって南半を切られているが、平面形は隅丸方形、断面形は底面中央がやや窪む逆台形を呈するものと思われる。底面の標高は約2.1m、深さ約60cmをはかる。残存している規模は南北70cm以上、東西92cmとなる。埋土は6層に分層される。

底面に薄く灰褐色粘質土が堆積するが、上層は灰茶褐色土～砂質土で構成される。土坑12の下半に堆積するa断面8～11層、b断面8・10・11層と、それより上位の堆積層では不連続な状況がみられ、使用段階に再掘削されたと考えられる。土器等の遺物は出土していない。

土坑13の平面形はやや不整な円形を呈し、半円形の断面形を有するものである。規模は長軸長132cm、短軸長108cmで、底面の標高は約2.2m、深さ約50cmをはかる。埋土は4層に分層できる。4層が大きくえぐられたかたちで上位に3層が堆積しており、使用段階に再掘削された痕跡とみられる。

4基の土坑が重複して掘削されること、それぞれの土坑において使用段階に再掘削がみられることから、本土坑群では長期の使用や土坑の管理がなされていたことを想定できる。

土坑14・15 (図47)

BC19-98、20-08区で検出した。検出面の標高は2.65～2.7mである。土坑15は土坑14を切っている。

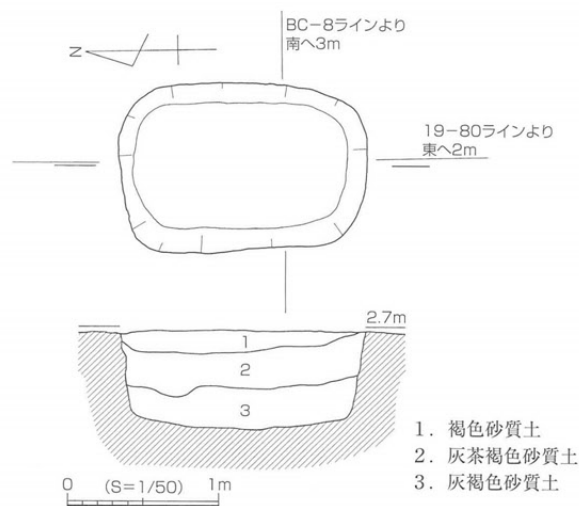


図45 土坑9

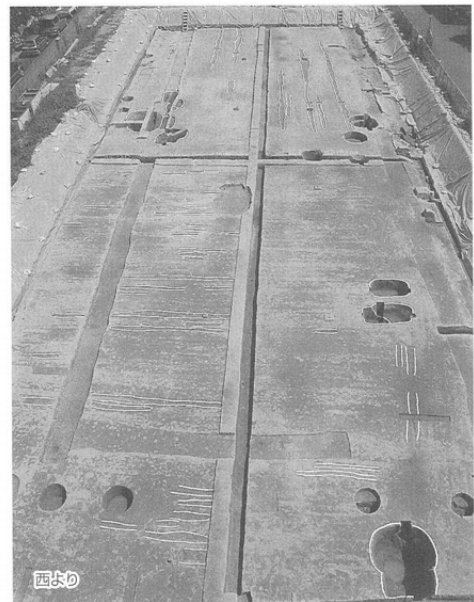


図44 近世下層全景



土坑14は南北にやや長いものの、ほぼ円形の平面形を呈し、断面形は逆台形である。規模は南北176cm、平面形から本来の規模を推測すれば東西は約1.6～1.7m前後となろう。底面の標高は約1.38mで、深さは約130cmをはかる。掘り方は法面に小さな段を有するものの、上方にむかって開きながら立ち上がるものである。埋土は7層に分層される。最下層の12層は青灰色砂が厚く堆積したものである。その直上には青灰色粘土（11層）が堆積するものの、それより上位はすべて灰茶褐色系砂質土で埋没している。

土坑15は、平面形は長方形で長軸長は144cm、短軸長94cmをはかる。底面の標高は約1.75mで、深さは約95cmである。断面形は逆台形を呈する。掘り方は上方にむかって開きながら直線的に立ち上がるものである。埋土は5層に分層され、灰褐色～茶褐色系の土～砂質土で埋没している。

なお、遺物は完形の縄文時代のサヌカイト製石匙1点が出土した。横長剥片を素材とし、上辺に突起を有するもので、刃部は急角度の片面調整によって作出する。

b. 溝

溝11～17（図48）

検出された7条の溝はいずれも調査区東半において東西方向に掘削された浅い溝である。本調査区の南に位置する第8次調査地点では、近世下層面で南北方向の耕作痕が検出されているが、本調査区では南北方向の耕作痕は検出されていない。本調査区の南辺付近が里境にあたっており、本調査区と第8次調査地点の耕作地は区画の異なる耕作地である。そのため、溝や耕作痕の方向が一致しないものと考えられる。

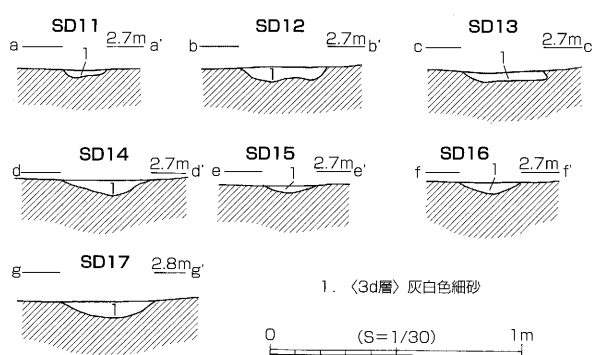


図48 溝11～17

溝はいずれも東西方向に掘削される。幅は16～36cmで、ばらつきがあり、断面形は底面がやや平坦になる浅い皿状のものと、丸底状のものがあるが、深さは3～7cmでいずれも浅い。皿状の断面形をもつ溝は北側の溝11～13の3条、丸底の断面形をもつ溝は南側の溝14～17の4条である。埋土はいずれも灰白色細砂である。これらの溝はすべて調査区中央までの間で途切れ、それより西では確認されないこと、溝の幅が狭いこと、掘り方が浅いことなどから、耕作にともなう溝の可能性もある。

c. 耕作痕

調査区北西で南北方向の耕作痕が密に検出されたほか、調査区東半や南西でも東西方向のものがわずかに確認されている。調査区北西の耕作痕はいずれも幅約10～20cmで、深さ約3～5cmの浅いものである。

2. 近世上層

近世上層では、土坑13基、溝10条、南北方向の畦畔1条、耕作痕と考えられる東西・南北方向の浅い溝を検出した（図49）。溝のうち、調査区南辺に東西方向に掘削された溝は、岡山平野の条里地割のなかでは里境の区画溝にあたると思われるものであり、それ以外の溝はいずれも小規模で浅いものである。

a. 土坑

近世上層に属する土坑13基は、調査区中央の19-30～50ラインの周辺に集中して掘削されている。これらの土坑を平面形に基づいて次の三類に分類した（図50）。

近世土坑A類：円形プランを呈するもの。

近世土坑B類：楕円形プランを呈するもの。

近世土坑C類：隅丸長方形を呈するもの。

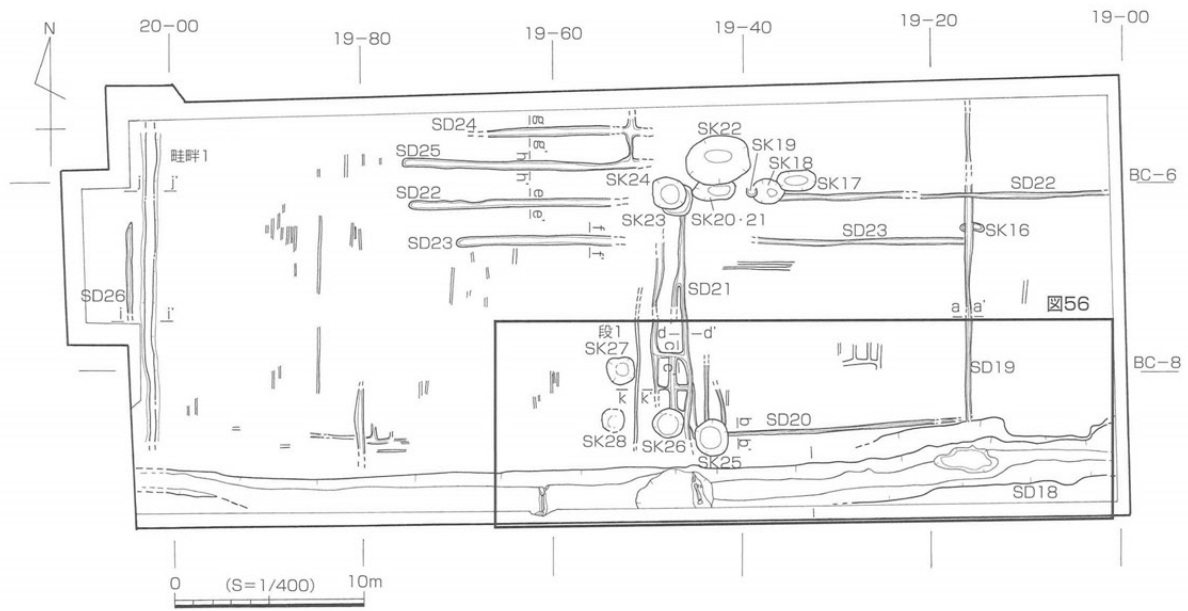
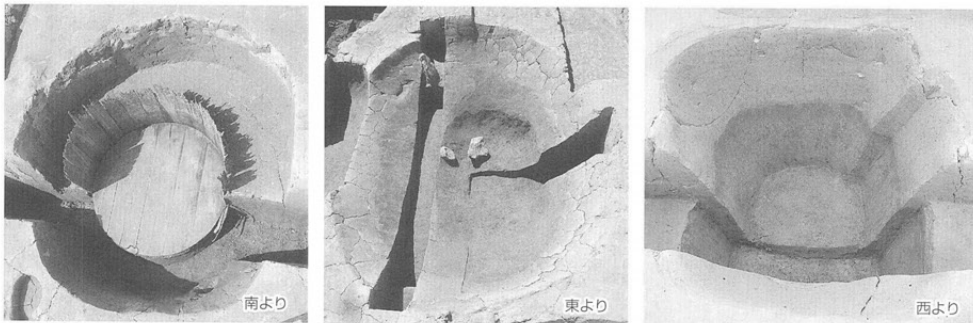


図49 近世上層検出遺構全体図



左：A類（土坑25）
中：B類（土坑22）
右：C類（土坑27）

図50 近世土坑の分類

近世土坑A類（図53）

土坑23・24・25・26がある。規模は直径1.5～1.8m前後、深さは約0.4～0.8mのもので、いずれも箱形の断面形を呈する。土坑25では、中に円形の大形桶が残存していた。

埋土の状態をみると、桶が残存していた土坑25では、桶の外側と掘り方の間に裏込めの埋め立て土が充填されている。土坑23・24・26でも中心部と周縁部の土層間で縦方向に不連続面が観察されるため、土坑25と同様、桶状の構造物を設置し、周縁に裏込め土が充填されていたと考えることができる。したがって、これらの土坑はいずれも桶状の構造物を内包する水溜め状の施設であったことが推測できる。分布は調査区中央で土坑23・24、土坑25・26が南北に2基ずつに分かれて位置している。切り合いや埋土の内容から、対をなす2基の土坑はいずれも新古の関係にあるため、南北に1基ずつが並存していたと推定される。

土坑A類と周辺施設との位置関係をみてみよう。土坑25・26の南には、東西方向の溝18に構築された水門が位置し、南北方向に掘削された溝21が南北のA類土坑群を結んでいる。土坑A類が水溜めを目的とした土坑であれば、基幹水路に設置された水門からの揚水を蓄え、また土坑群を連結する溝による耕作地内への導水と基幹水路から離れた位置での貯水という機能面での有機的な関係を想定できる。近世・近代の耕作地における水利・灌漑体系を良好に示すものとみられる。

なお、土坑25では桶内の埋土が1907（明治40）年の陸軍駐屯地造成のための造成土であり、造成直前まで使用されていたことを示している。

近世土坑B類（図54）

土坑17・18・20・21・22がある。土坑16は平面形が著しく長楕円形を呈し、小規模で掘り方もわずかなものであるため、B類に準ずるものとしておきたい。B類に属する土坑の規模は、長軸長1.2～3.0m前後、深さ約0.4～0.9m前後で、平面的な規模に大きな差が見られる。断面形は多くで底面が緩く湾曲するU字形を呈しているが、土坑17のみ逆台形の断面形を呈する。埋土の状況を見ても、土坑17・18では再掘削の可能性があるが、土坑22では単純な堆積状況を示し、一様ではない。分布は小形で浅い土坑16をのぞけば、いずれも調査区中央北側のBC19-35、45、46区に集中している。



図51 近世土坑A類と溝18・水門1の位置関係

近世土坑C類（図53）

土坑27・28がある。土坑19は隅丸方形の平面形を有しているが、小規模で掘り方も浅いため、C類に準ずるものとしておきたい。土坑の規模は、長軸長1.0～1.2mである。土坑28は側溝や攪乱にかかっており、断面は著しく東に寄った位置で記録したが、最終的な掘り方の形状は北に近接する土坑27と同様、逆台形の断面形を有する土坑である。深さは0.35～0.9mである。分布は、土坑19をのぞけば、調査区中央南半に位置している。

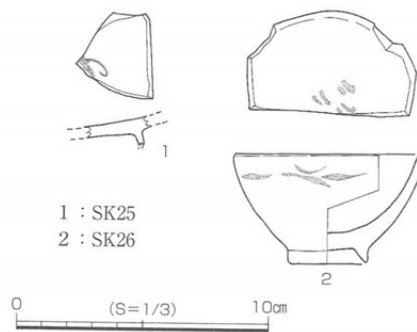
本層で検出された近世土坑A～C類は、平面形に基づいた分類と断面形の形状とが相関関係を有している。また、A類のように土坑内に桶の設置が想定されるものもあり、土坑の平面的な形状は土坑の機能と密接な関係にあることがうかがえる。また、これらの土坑の分布が類型ごとにまとまりを有することや、A類が水溜め状の施設であることを想定できることから、それぞれの類型が異なる機能を有し、それぞれが耕作地内で適した位置に構築されたものとみることができる。

なお、本調査区の周辺では東約200mの地点に位置する第26次調査地点で近世土坑が多数確認され、溝や区画沿いに分布することが指摘されている。本調査区においても溝沿いに土坑が展開しており、第26次調査地点と類似した様相を呈している。

また、第26次調査地点における近世土坑の密集は構内座標の15-20ラインを中心とする坪墳の想定される範囲にあたる。本調査区における近世土坑の密集は19-40～50ラインの範囲に展開し、その間隔は約210～220m、約2町分の距離にあたる。したがってこれらの土坑群の展開した範囲のそばに条里の坪境の区画が存在した可能性が高い。

土坑出土遺物（図52）

これらの土坑群からの遺物は僅少であり、土坑25・26から出土した2点を掲載した。1は染付けの磁器片の高台部分である。見込み中央に文様があるが、意匠は不明である。



番号	器種	法量 (cm)			特徴	色調 (内/外)	胎土
		口径	底径	器高			
1	施釉磁器・染付皿or碗	-	-	-	見込み中央、内面中央に文様、意匠不明	淡白	微砂・堅緻
2	肥前磁器・小碗	7.6	3.2	4.3	畳付のみ露胎、残りは全面施釉	白	微砂・堅緻

図52 土坑25・26出土遺物

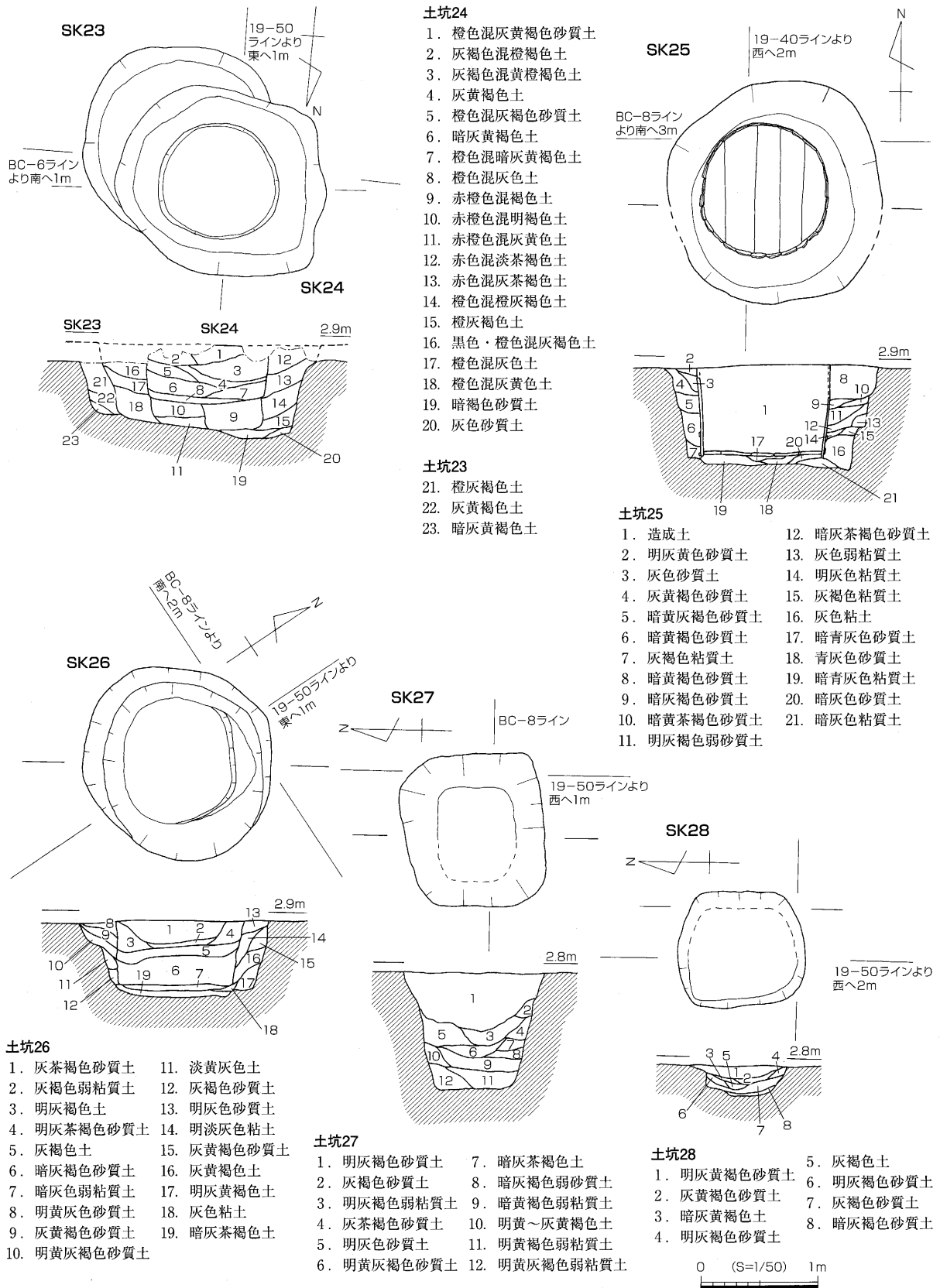


図53 近世土坑A類 (土坑23～26)・C類 (土坑27・28)

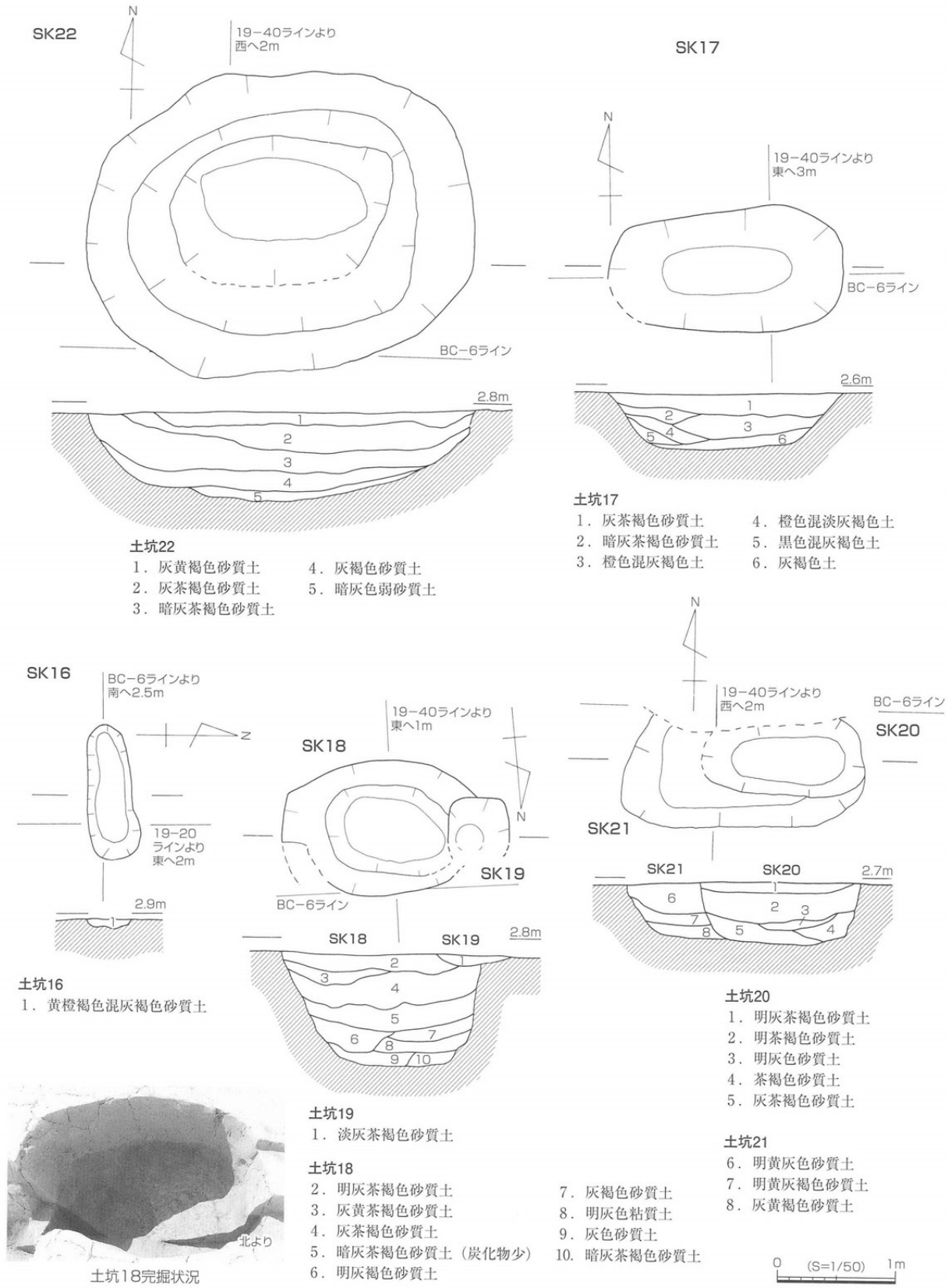


図54 近世土坑B類 (土坑16~22)

2は肥前磁器の小形の碗である。内外面に文様を施す。畳付以外は全面施釉されている。

b. 溝

近世上層では溝9条を検出した。これらはいずれも東西・南北方向に掘削された溝である。これらの溝を規模と断面形で以下の通りに分類する。この分類に基づき、それぞれの溝を報告する。

溝1類：幅約3m、逆台形～U字形の断面形を呈する。溝18が該当する。

溝2類：幅50cm未満で、箱形～逆台形の断面形を呈する。溝19・20・21・27が該当する。

溝3類：幅60cm未満で、皿状の断面形を呈する。溝22・23・24・25が該当する。

溝1類 (図55、56)

溝18が該当する。この溝は岡山平野の条里地割では里境にあたりとみられる。南西部の上半と、北辺の上部では陸軍歩兵隊兵舎建物の基礎による攪乱をうけていた。また、溝南辺の大半が調査区外にあっており、南辺の掘り方上端は調査区東側のみで確認できた。

BC-9ライン沿いに東西に掘削されているが、やや湾曲しており、完全な直線に掘削されてはいない。溝の主軸の方位については、南辺の多くが調査区外に広がり、中心を割り出せないことや、溝が弓なりに湾曲して掘削されており、計測軸を設定できないため正確な数値を導き出すことはできない。溝の上端は多くが攪乱をうけているが、残存部での検出面の標高は約2.85～3.03mであった。溝の規模は、幅約2.9m、深さ約0.7mで、底面の標高は約2.35～2.43mである。溝の断面形は逆台形～U字形を呈している。

溝には2ヶ所に水門が設置され、杭の密集が1ヶ所で確認された。底面は杭の密集地点や水門設置地点の周辺などで、水流の作用によるとみられるえぐれなどの凹凸がある。また、水門1の東側では、19-30ライン付近から水門1の間の掘り方が2段掘りとなっている。最深部の幅は約1.2mで、水門1の支柱間の幅にほぼ等しい。

溝内の埋土の堆積状況を見てみると、堆積の不連続面から、最も溝幅の広がるa-a'断面では4段階、b-b'、c-c'断面では3段階の堆積に大きくまとめることができる。いずれも最終段階には造成土(1層)が単一の埋土として観察されており、1907(明治40)年の陸軍駐屯地造成直前まで溝としての機能を有し、その後、一帯の造成とともに短期間に埋め込まれたことを裏付けるものである。

遺物は近世の遺物を中心にコンテナ2箱分の土器・陶磁器等が出土しており、水門や杭の密集地点での出土が多い傾向がうかがえる。そのほか、寛永通宝が1点出土している(図56)。

以下、溝18内に設置された水門、杭の密集地点について詳細にみていきたい。

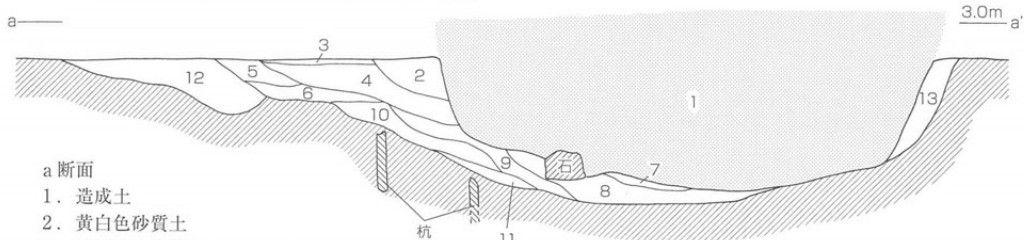
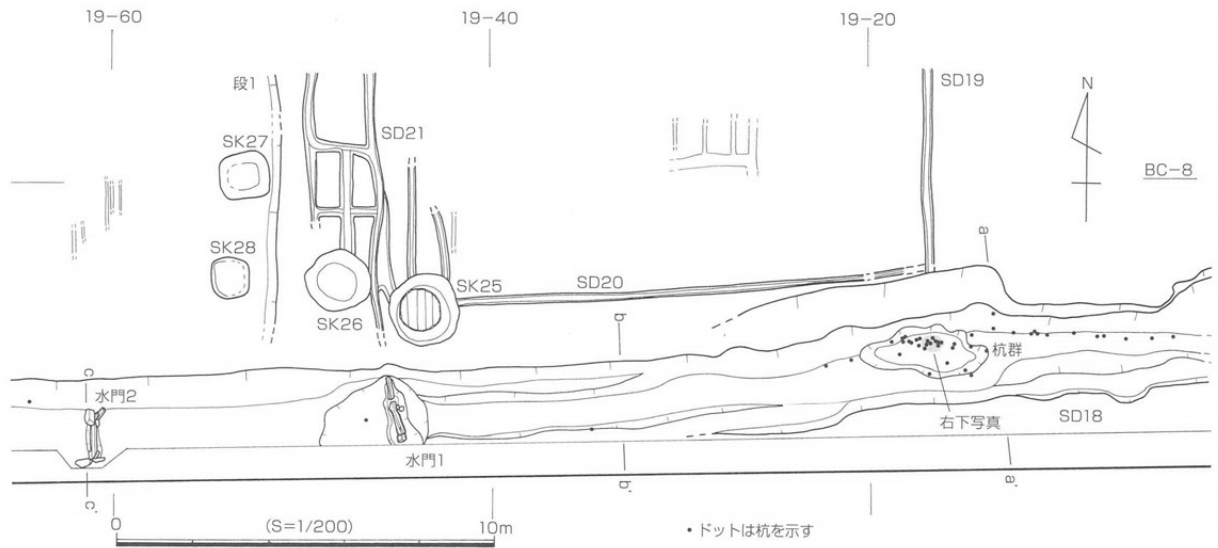
水門1 (図57) BC19-49区に位置する。検出高は約2.42mで、水門の前後の溝底面標高は、下流にあたる西側で約2.1m、上流にあたる東側で約2.25mである。

水門は2本の角材を支柱とし、支柱間に梁となる角材を渡した「H」字状の枠組みと、梁となる角材の下位に嵌めこんだ堰き止め用の板材、2本の支柱の外側に嵌めこまれた横矢板状の脇板材で構成される。支柱には板材を嵌めこむための溝が掘りこまれている。

水門1の前面は大きく窪んでいる。水門前面北側の法面形状は溝の上端から3段構造となっている。最上段に



図55 溝18完掘状況

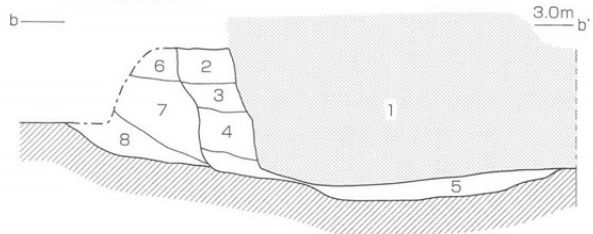


a断面

1. 造成土
2. 黄白色砂質土
3. 淡黄白色砂質土
4. 黄灰色砂質土
5. 暗黄灰色砂質土
6. 橙灰褐色砂質土
7. 青灰褐色砂質土
8. 青色混黄灰色砂質土
9. 黄褐色砂質土
10. 淡灰黄褐色砂質土
11. 灰褐色粘質土
12. 灰色混橙褐色砂質土

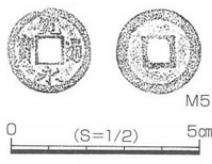
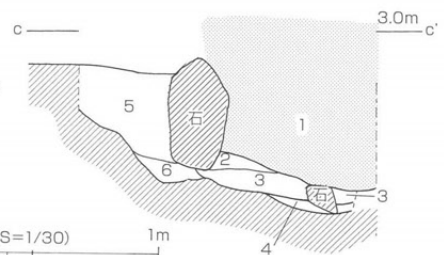
b断面

1. 造成土
2. 暗黄灰色砂質土
3. 黄灰色砂質土
4. 灰褐色砂質土
5. 橙灰褐色砂質土
6. 白褐色砂質土
7. 暗黄灰褐色砂質土
8. 黄灰褐色砂質土
9. 暗黄灰色砂質土



c断面

1. 造成土
2. オリーブ灰色砂質土
3. 灰褐色砂質土
4. 黄褐色土
5. 淡黄灰褐色砂質土
6. 黄灰褐色砂質土



番号	種類	径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	特徴
M5	寛永通宝	2.3	0.1	3.9	非常に残りがよく光沢を保つ



a断面北側肩部 東より



杭群密集部 南東より

図56 溝18・出土遺物

は北側の脇板材より北西方向に「ハ」字状に開く横矢板が設置され、角礫によって押さえられている。中段の法面も角礫が並んでいる状態が観察されるため、礫による護岸がなされていたとみられる。最下段には上段・中段の護岸に用いられたと思われる多量の礫が落ち込み、その間に土器・陶磁器片を多く含む粗砂層が形成されていた。

水門1の背面では、溝の掘り方が2段掘りの形状となっており、深く掘りこまれた中央の流路の両法面に杭が並んで打ち込まれている状況が確認される。

水門1の北側には、大形の桶を内包する土坑25が位置しており、水門で堰き止めた水を土坑25に供給することが想定されるが、水門の検出高と土坑25の上端の標高では約40cmの比高がある。支柱の上部はすでに破壊されて失われており、水門1の本来の高さを知ることはできないが、水門2の柱材では梁材用のほぞ穴より約30cm上位まで板材嵌めこみ用の溝が切られており、水門1も現状よりは高い位置まで水を堰き止めていたものと考えられる。

水門2 (図58) BC19-69区に位置する。この地点では溝18の南辺が調査区外に延びており、法面の一部をカットすることで南側支柱まで確認できた。

水門2は南北支柱および、溝底面近くに設置された梁と水門前面の両脇に置かれた護岸用のものと思われる角礫が残存していたのみであり、上部構造等は不明である。

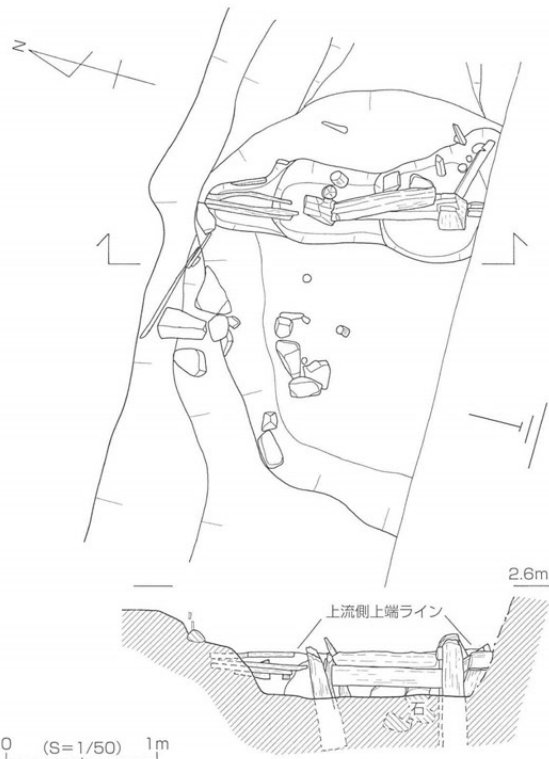


図57 水門1

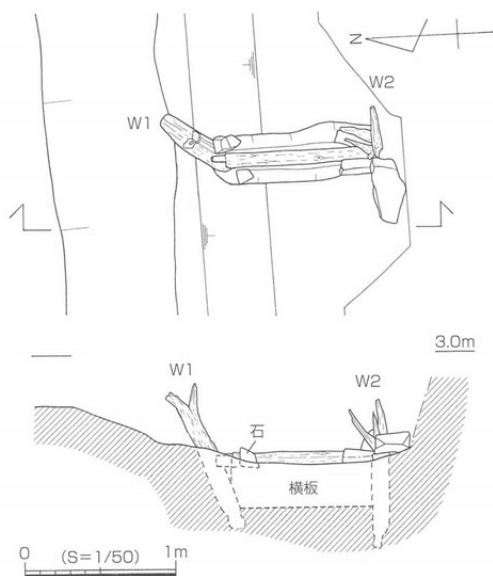
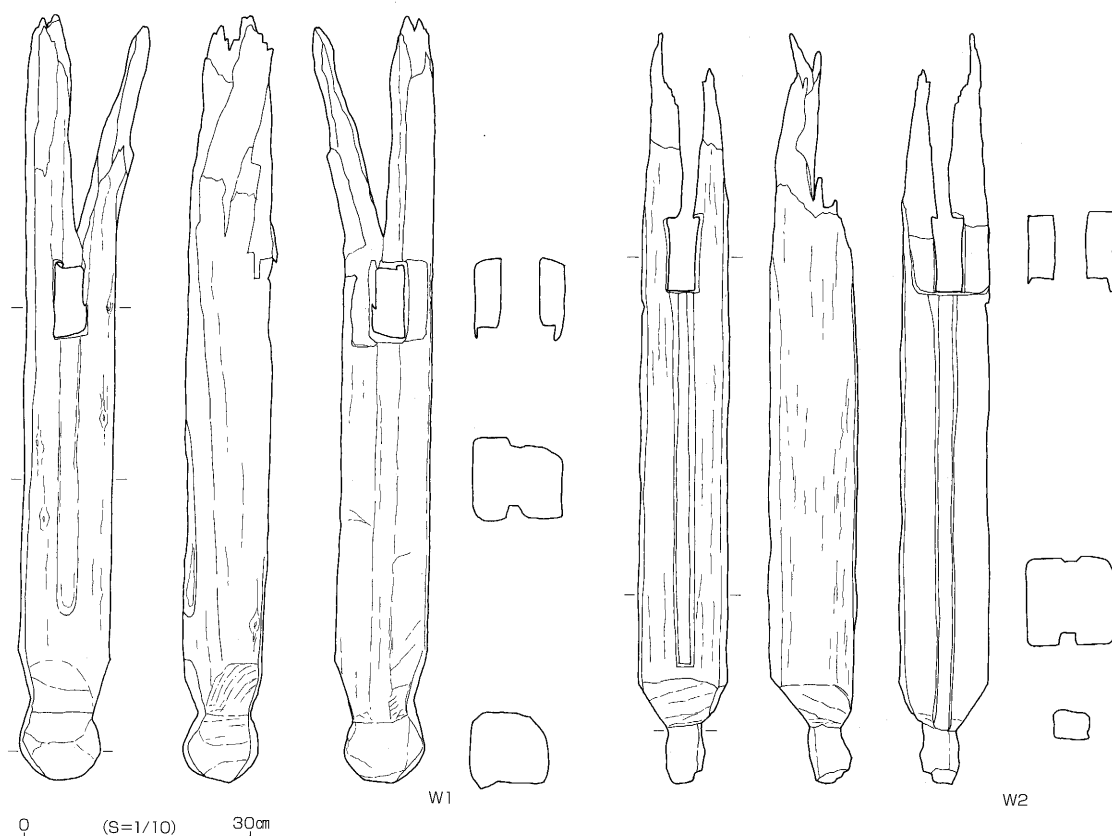


図58 水門2



番号	器種	木取り	法量 (cm)			形態・手法ほか
			長さ	幅	厚さ	
W1	水門部材	芯持ち削り出し	101.6	16.4	12.1	下端を擬宝珠状に加工しており、欄干の親柱からの転用とみられる
W2	水門部材	芯持ち削り出し	99.4	12.0	11.7	W1と同一材とみられるが接合せず、W1と同様の転用材とみられる

図59 水門2部材

水門2の前後の溝底面の標高は前面、背面ともに約2.3mで、ほとんど差がなく、溝底面の形状も水門1のように前面が深くえぐれるような形状ではない。

水門2の構成部材のうち、北側の支柱として用いられたW1は端部を擬宝珠状に加工した角材を転用したものである。擬宝珠部分を地中に打ち込んで本来の天地を逆転させて転用していた。梁材を渡すためのほぞ穴が切られ、両側縁には堰き止め板や横矢板状の脇板を嵌めこむための溝が切られている。W2は南側の支柱である。両側縁には板材を嵌めこむ溝を切る。端部は細い角柱状を呈するが、W1同様、細い角柱部の基部にむかって材が斜めに削られており、W2についても本来は擬宝珠状の端部を有する材を転用した可能性がある。

杭群 (図56) 杭の密集はBC19-19区を中心にみられる。溝18北側法面に沿って列状に打ちこまれた杭列と、溝内の窪み部に密集して打ちこまれた杭群を合わせ、約40本の杭で構成される。特に杭が密集して打ち込まれる窪み部の北側では、溝が北側に幅を広げることや、北・西に延びる溝19・20がとりつくことなど、本地点が水利にかかわる機能を有した可能性を考慮する必要もある。

溝2類 (図60)

溝19・20・21・26が該当する。いずれも溝の幅が約20~30cm前後、深さは6~15cmで、箱形から逆台形の断面形を呈する。幅・深さともに小規模な溝である。調査区西側の畦畔に沿って掘削された溝26以外は調査区東半の耕作地のなかで南北、東西方向に掘削されたものであり、いずれも大形の桶が設置されていたと考えられる近世土坑A類に接続する。特に溝21は調査区中央の南北に分かれて分布する近世土坑A類を連結するように掘削され

ており、耕作地の中の給水網を構成する役割を担うものであったと考えられる。

溝3類 (図60)

溝22・23・24・25が該当する。幅30～60cm前後で、浅い皿状の断面形を呈する。いずれも調査区北半で検出した。東西方向に並行する浅い溝である。特に調査区中央西寄りではほぼ2m間隔で検出している。調査区西端までは延びず、いずれも19-70ライン前後で途切れるため、耕作にともなう痕跡の可能性もある。

c. 畦畔・段

畦畔1 (図60)

調査区西側の20-00ライン付近で南北方向の畦畔を検出した。検出できた長さは約8m、幅約40～60cm、高さ約3～5cmで、低平な畦畔である。西側には畦畔に沿うように溝26が掘削されている。溝26は本畦畔の脇溝とみられる。

段1 (図60)

調査区中央の19-50～60ライン間で約7mにわたり南北方向にのびる段を確認した。この段を境とする東の耕地の標高は約2.85m、西の耕地は上面約2.75mであり、約10cm前後の高さを有する段である。

d. 耕作痕

調査区西半において、幅約10～20cm、断面は緩い弧状に凹む深さ3cm前後の南北方向に走行する浅い溝状の遺構を検出した。東西方向の溝18に近接する位置では、一部東西方向のものも確認している。鋤痕など、耕作にともなう痕跡と考えられる。

e. 包含層出土遺物

近世上層〈3層〉では土器・陶磁器が1箱出土し、そのうち2点を掲載した(図61)。1は施釉陶器碗の高台部片である。2は土師質鍋とみられる口縁部小片で、外面に鋤状の突起が巡るものである。

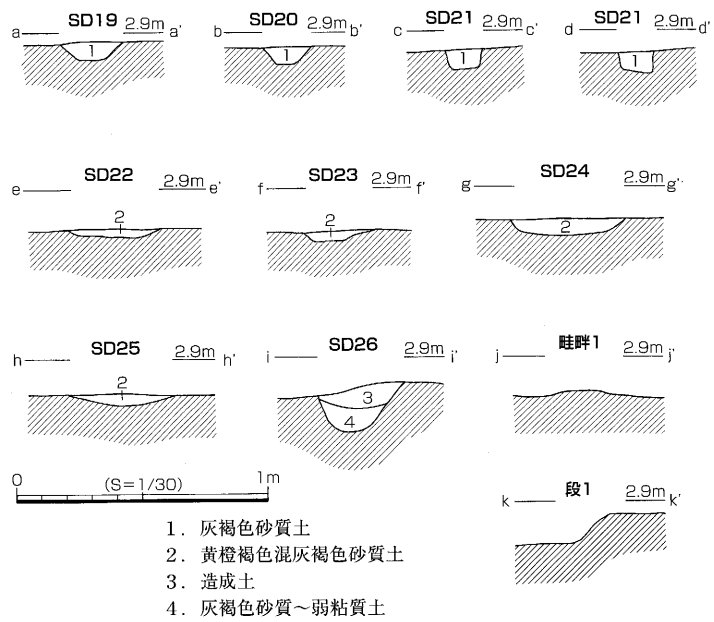
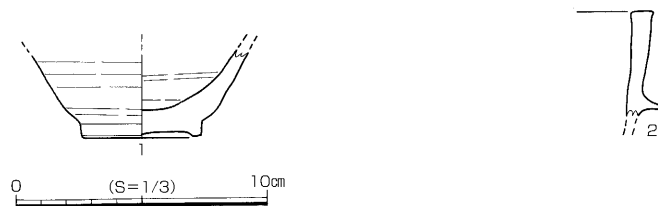


図60 溝19～26・畦畔1・段1



番号	器種	法量 (cm)	特徴	色調 (内/外)	胎土
		底径			
1	施釉陶器・碗	4.7	(内) 回転ナデ・薄く施釉、(外) 回転ナデ・底部回転ヘラ切り	黄褐灰/淡茶	微砂・堅緻
2	土師質・鍋	-	(内) 丁寧なヨコナデ、(外) 工具によるやや粗いナデ	茶褐	微砂

図61 〈3層〉出土遺物

第4章 自然科学的分析

本調査地点では、弥生時代早期の突帯文土器片を共伴した土坑5出土の炭化物(図62A)、および調査区東半の窪地部底部の(12層)中で検出した焼土・炭化物集中部1の大型炭化材(図62B)について、放射性炭素年代測定を実施した。また、焼土・炭化物集中部1を検出した窪地部の堆積環境に関する情報を得る目的で、珪藻分析を実施した(図62C)。放射性炭素年代測定・珪藻分析は(株)古環境研究所に依頼して実施した。炭化物サンプルの採取は2008年12月17日に、土壌サンプルは12月14日にそれぞれ実施している。

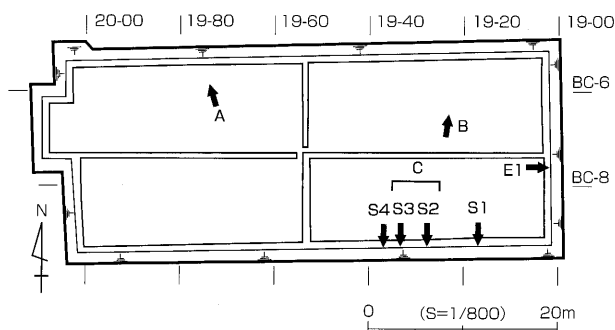


図62 自然科学分析サンプル採取地点

プラント・オパール分析は、宮崎大学の宇田津徹朗氏に依頼し、2007年12月18日にサンプル採取を実施した⁽¹⁾。採取地点は調査区東壁断面で1箇所(図62E1)、南壁断面で4箇所である(図62S1~4)。

註

(1) 文部科学省科学研究費補助金「縄文時代の稲作マップ作成にむけた実証的調査研究」(研究代表者：宇田津徹朗)による。

1. 放射性炭素年代測定

(株)古環境研究所

a. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(^{14}C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約5万年前までの年代測定が可能である。

b. 試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理	測定法
A	3区、土坑5	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS
B	1区、焼土・炭化物集中部1	炭化物	超音波洗浄、酸-アルカリ-酸処理	AMS

AMS：加速器質量分析法 (Accelerator Mass Spectrometry)

c. 測定結果

試料名	測定No (PED-)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (較正年代)	
				1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
A	10932	-26.04 ± 0.12	2545 ± 25	BC800 - 750 (49.3%)	BC800 - 740 (53.3%)
				BC690 - 660 (16.7%)	BC690 - 660 (19.0%)
				BC610 - 600 (2.2%)	BC650 - 550 (23.1%)
B	10933	-27.73 ± 0.12	3915 ± 25	BC2470 - 2400 (43.2%)	BC2480 - 2300 (95.4%)
				BC2390 - 2340 (25.0%)	

註

(1) $\delta^{13}\text{C}$ 測定値

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)。この値は標準物質 (PDB) の同位体比からの千分偏差 (%) で表す。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を -25 (‰) に標準化することで同位体分別効果を補正する。

(2) ^{14}C 年代測定値

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、現在 (AD1950年基点) から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。BPはBefore Physics (Present) を示す。

(3) 暦年代 (Calendar Age)

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動および ^{14}C の半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な ^{14}C 測定値およびサンゴのU/Th (ウラン/トリウム) 年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線データはIntCal 04、較正プログラムはOxCal 3.1である。

暦年代 (較正年代) は、 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、OxCalの確率法により 1σ (68.2%確率) と 2σ (95.4%確率) で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。()内の%表示は、その範囲内に暦年代が入る確率を示す。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

d. 所見

加速器質量分析法 (AMS法) による放射性炭素年代測定の結果、試料Aでは 2545 ± 25 年BP (2σ の暦年代でBC800~740、690~660、650~550年)、試料Bでは 3915 ± 25 年BP (BC2480~2300年) の年代値が得られた。

文献

- Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy, The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), pp.425-430.
Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43(2A), pp.355-363.
Paula J Reimer et al., (2004) IntCal 04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, pp.1029-1058.
中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代, pp.3-20.

2. 珪藻分析

(株)古環境研究所

a. はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所をもっている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

b. 試料

分析試料は、2区C地点 (図62) の〈11a層〉(弥生早期~前期)、〈11c層〉(弥生早期~前期)、〈12b層〉(縄文後期) から採取された試料1~試料3の計3点である。

c. 方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

- 1) 試料から1cm³を採量
- 2) 10%過酸化水素水を加え、加温反応させながら1晩放置
- 3) 上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗 (5~6回)
- 4) 残渣をマイクロピペットでカバーガラスに滴下して乾燥
- 5) マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
- 6) 検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600~1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

d. 結果

(1) 分類群

出現した珪藻は、貧-中塩性種（淡-汽水生種）1分類群、貧塩性種（淡水生種）7分類群である。表3に分析結果を示し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に表記した主要な分類群を記載する。

〔貧-中塩性種〕

Achnanthes brevipes

〔貧塩性種〕

Achnanthes hungarica, *Aulacoseira granulata*, *Fragilaria capucina*, *Gomphonema spp.*, *Navicula cryptocephala*, *Pinnularia borealis*, *Synedra ulna*

(2) 珪藻群集の特徴

分析の結果、〈11a層〉（試料1）では、真・好止水性種の*Aulacoseira granulata*, *Synedra ulna*、流水不定性種の*Achnanthes hungarica*, *Fragilaria capucina*などが検出され、〈11c層〉（試料2）では、貧-中塩性種（淡-汽水生種）の*Achnanthes brevipes*、陸生珪藻の*Pinnularia borealis*が検出されたが、いずれも少量である。〈12b層〉（試料3）では、珪藻が検出されなかった。

e. 珪藻分析から推定される堆積環境

縄文後期とされる〈12b層〉では、珪藻が検出されなかった。珪藻が検出されない原因としては、1) 珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境であったこと、2) 水流や粒径による淘汰・選別を受けたこと、3) 土層の堆積速度が速かったことなどが考えられるが、ここでは土層の堆積状況や植物珪酸体分析の結果（本章第3項参照）などから、1) の要因が大きいと考えられる。

弥生早期～前期とされる〈11a層〉と〈11c層〉では、少量ながら珪藻が検出されることから、何らかの要因で一時的に滞水していた可能性が示唆される。珪藻があまり検出されない原因としては、前述のようなことが考えられる。

文献

- Lowe, R.L. (1974) Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. National Environmental Research Center, p.333
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 東北地理, 42, pp.73-88.
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, pp.23-45.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境解析とその意義-わが国への導入とその展望-. 植生史研究, 第1号, 植生史研究会, pp.29-44.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27, pp.1-20.
- 渡辺仁治 (2005) 群集解析に基づく汚濁指数DAI_{po}, pH耐性能. 淡水珪藻生態図鑑. 内田老鶴圃, p.666

表3 珪藻分析結果

分類群	1	2	3
	11a層	11c層	12b層
貧塩性種（淡水生種）			
<i>Achnanthes hungarica</i>	2		
<i>Aulacoseira granulata</i>	1		
<i>Fragilaria capucina</i>	1		
<i>Gomphonema spp.</i>	1		
<i>Navicula cryptocephala</i>	1		
<i>Pinnularia borealis</i>		1	
<i>Synedra ulna</i>	1		

貧-中塩性種（淡-汽水生種）			
<i>Achnanthes brevipes</i>		1	
合計	7	2	0
未同定	3	0	0
破片	7	4	0

試料1 cm ² 中の殻数密度	4.0	8.0	0.0
	×10 ³	×10 ²	

完形殻保存率 (%)	-	-	-

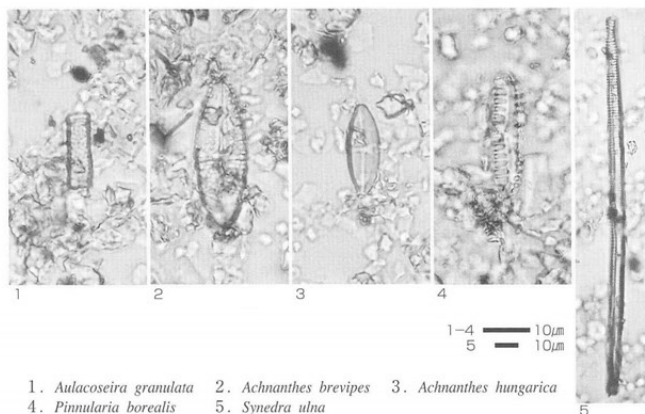


図63 珪藻顕微鏡写真

3. 植物珪酸体分析

宮崎大学農学部 宇田津徹朗

a. はじめに

イネ科などの草本やクスノキ科などの木本の中には、土壤中の珪酸 (SiO_2) を細胞壁内に蓄積する性質をもつものがある。珪酸の蓄積が進むと、植物珪酸体 (silica body) と呼ばれる細胞の形をとどめた珪酸の殻が植物体内に形成される。植物珪酸体は植物体が枯死し、分解された後も、その形態的な特徴をとどめたまま、土壤中に残留する。これがプラント・オパール (plant opal) である。

プラント・オパールはその組成から化学的、物理的な風化に強く、条件がよければ半永久的に土壤中に残留する。プラント・オパールの形や大きさは、由来する植物や細胞によって違いがあり、遺跡土壌などから検出されたプラント・オパールを調べることで、土壌が堆積した期間に存在した植物 (給源植物) を同定することができる。中でも、イネ科植物については、葉身中の機動細胞に由来する植物珪酸体 (機動細胞珪酸体) から同定できるものが多く、イネなど農耕に関わる植物の同定も可能である。また、耐熱性に優れていることから、焼成温度が低い土器の胎土中からも抽出・同定することができる。このようなプラント・オパールの特性を利用して古代の植生や環境、農耕を推定・復元する方法をプラント・オパール分析法という⁽¹⁾。

ここでは、岡山大学構内遺跡である津島岡大遺跡 (第30次調査) の土壌について、プラント・オパール分析を行った結果について報告する。なお、今回の分析は、筆者が代表者である文部科学省科学研究費補助金による研究課題「縄文時代の稲作マップ作成にむけた実証的調査研究」の一環として実施したものである。

b. 試料採取の概要

試料採取は、2007年12月18日に実施した。調査地点は、津島南区西南の薬学部棟西側 (構内座標BE19・20区) に位置する。今回の発掘調査は、岡山大インキュベータ新営にともなうものである。以下、調査の概要を述べる。

(1) 試料採取地点の設定

試料採取地点については、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの発掘担当者と検討を行い、図62に示す東壁1地点 (E1)、南壁4地点 (S1~S4) の合計5地点を設定した。東壁からは、基本土層の土壌、南壁からは、当該遺跡の鍵層である「黒色土」から縄文時代後期の基盤層までの土壌を採取した。今回、南壁について4地点からの土壌採取を行ったのは、採取地点による分析結果の相違を検討するためである。

(2) 分析試料の採取

分析試料の採取は、図64に示すように、各地点について層厚に応じて各土層から1~6試料を採取した (合計69試料)。なお、試料採取の際には、土層面および採取土壌塊を十分に観察し、木の根などの上層土壌の影響が懸念される部分が入らないように行った。

c. 試料の分析

採取した土壌試料は、以下に述べるプラント・オパール定量分析用試料に調整し、分析を行った。

【プラント・オパール定量分析法】^{(1),(2),(3)}

プラント・オパール定量分析法は、土壌1gあたりに含まれる各種イネ科植物由来のプラント・オパールの数を求める方法である。

定量法には、ガラスビーズ法を用いる。ガラスビーズ法では、土壌1gあたりに約30万個のガラスビーズを混入する。混入するガラスビーズは、直径が機動細胞由来のプラント・オパールと同じ30~40ミクロンであり、組成も同じガラスである。そのため、ガラスビーズは、分析試料の調整作業にともなう物理的・化学的影響をプラント・オパールと同じように受けると考えることができる。したがって、土壌中のガラスビーズとプラント・オパールの数の比は、調整前と調整後で変化しないという仮定が成り立つ。

この仮定から、顕微鏡観察によって計数されたプラント・オパールの数とガラスビーズの数から、土壌1gに

含まれる各種イネ科植物由来のプラント・オパールの量を算定することが可能である。

土壌にガラスビーズを混入した後は、水と水ガラスを加え、超音波（250W, 38KHZ）を20分程度、照射する。水ガラスを混入するのは粒子を分散させ、超音波処理の効果を高めるためである。また、超音波を照射することにより、プラント・オパールに付着した粘土粒子を除去することができる。超音波を照射した後、ストークス沈底法により、10ミクロン以下の粒子を除去する。その後、試料を乾燥し、定量分析用試料とする。

検鏡用プレパラートは、封入剤に試料を展開し作成する。封入剤には、カナダバルサムなどいろいろなものがあるが、火山ガラスとほぼ同じ屈折率をもつオキットを用いる。オキット中に試料を展開すると、火山ガラスが光学的にマスク（mask）される（見えにくくなる）ため、テフラが多い地域の分析では検鏡効率を高めることができる。

プラント・オパールの給源植物の同定（検出されたプラント・オパールがどの植物に由来するものかを決定する）は、光学顕微鏡を用い、100倍～400倍に拡大したプラント・オパールの大きさ、形状、裏面の模様などを総合して行う。今回、定量を行ったイネ科植物は、イネ（*Oryza sativa* L.）、ヨシ属（*Phragmites*）、タケ亜科（*Bambusoideae*）、ウシクサ族（*Andropogoneae*）、キビ族（*Panicaceae*）である。

d. プラント・オパール定量分析の結果

図66および表4～表8は、プラント・オパール定量分析結果を示したものである。

イネプラント・オパールの検出状況を見ると、〈2層〉～〈7層〉のほとんどが、水田遺構の存在の目安となる5,000個/g以上の検出密度を示しており、中世から近代に稲作が営まれていた様子が推定される。この結果は、これらの層を含むE1とS3地点で共通しているとともに、発掘調査の所見とも符合する。〈8層〉は検出密度の高い〈7層〉の影響が考えられるが、〈9層〉、〈10層〉と検出密度が上昇することから、これらについては、弥生時代から古代の稲作の存在を反映したものであると考えられる。

弥生時代早～前期に相当する〈11層〉については、4カ所からイネプラント・オパールが少量検出されている（図65-上左・上中）。検出箇所については、全てヨシ属のプラント・オパールが検出されており、乾燥の指標となるタケ亜科の密度の減少も3カ所で確認できる（図66）。また、検出層は垂直方向で不連続であることから、上層の落ち込みの影響は低いと考えられる。これらの結果からは、イネが短期間栽培された可能性を含め、〈11層〉の時代に当該地点および近傍で稲作が営まれた可能性が推定される。しかし、今回、同一層位で採取した試料におけるイネの検出状況は、一致していない。このことから、上層の土壌の踏み込みによる試料汚染の可能性も否定できないことも申し添えておきたい。縄文時代後期に相当する〈12層〉については、E1地点だけ検出されている（図65-上右）。検出されたイネプラント・オパールは風化もかなり受けており、顕微鏡観察の所見からは、試料汚染などの可能性は考えにくい。また、イネが検出された層は、他の地点と異なり、湿潤指標のヨシ属のプラント・オパールが高く、乾燥指標のタケ亜科やウシクサ族の密度が低いことから、イネの存在を捉えた結果である可能性は高い。しかしながら、検出密度も低く、検出地点も限られるため、縄文時代後期の稲作については、今回の結果でその存在を裏付けることは難しく、さらに追加分析や考古学的な検討を行う必要があろう。

次に、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族、キビ族のプラント・オパールの検出状況を見ると、〈1層〉～〈10層〉ま

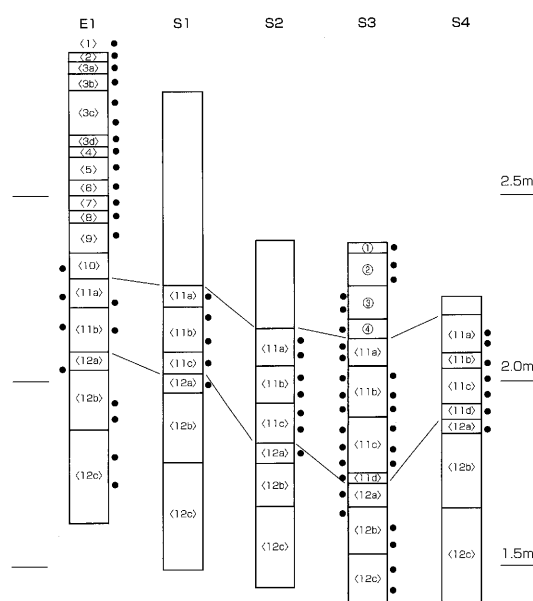


図64 各採取地点における試料の採取箇所

では、人によって管理された環境を反映し、ヨシ属は低い検出密度でイネに対応した盛衰を示し、他の植物は〈11層〉以下に比べて検出密度が低く抑えられている。〈11層〉以下になるとタケ亜科やウシクサ族が圧倒的な量を占めるようになっていく。発掘調査から採取地点は窪地になっており、周辺の微高地からの土壌の流れ込みなどの影響も視野に入れておく必要があるが、ヨシ属の検出密度が低いことを考慮すると、基本的には縄文時代後期から弥生時代までは当該地点は比較的乾燥した環境であったと推定される。

e. まとめ

津島岡大遺跡（第30次調査）の土壌についてプラント・オパール分析を実施した結果をまとめると、以下のとおりである。

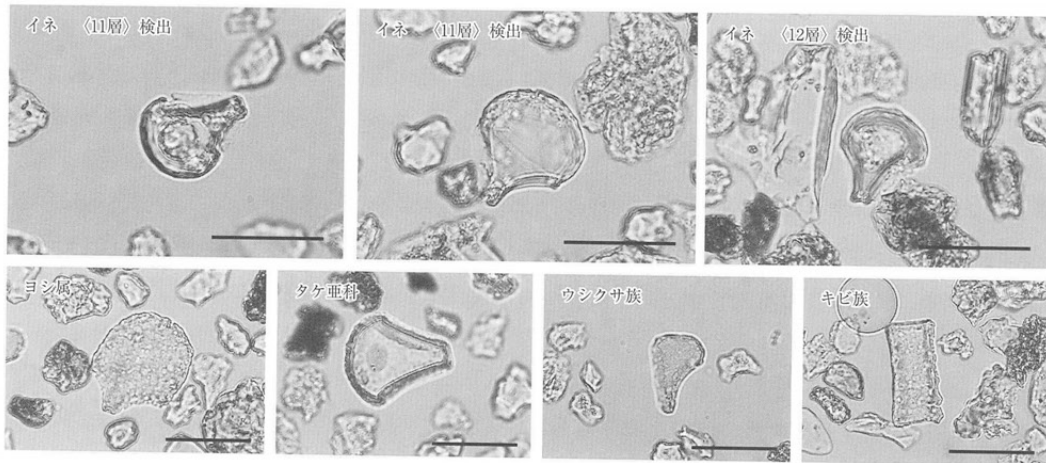
- ① 中世から近代に相当する〈2層〉～〈7層〉の時代には、調査地点で稲作が継続的に営まれていたと推定される。
- ② 〈8層〉～〈10層〉についても、イネプラント・オパールが一定密度検出されており、調査地点またはその近傍で稲作が営まれていたと考えられる。
- ③ 弥生時代早期～前期に相当する〈11層〉の土壌からイネプラント・オパールが検出され、稲作の存在が推定される。
- ④ 1地点であるが、縄文時代後期に相当する〈12層〉からもイネプラント・オパールが検出され、稲作がさらに遡る可能性が考えられる。
- ⑤ 各種植物のプラント・オパールの検出状況から、〈11層〉および〈12層〉の時代、調査地点は比較的乾燥した状況であったと推定される。

イネの検出についてであるが、〈2層〉から〈10層〉については、検出密度が高く、同一層位における検出状況にも違いがない。事実、発掘調査の所見ともよく符合している。

一方、〈11層〉および〈12層〉については、検出密度が低く、同一層位における検出状況に一致が見られないことから、上層からの踏み込み等による試料汚染の可能性を否定することはできない。しかし、イネ以外の植物の検出状況からは、検出状況について一定の説明も可能であり、今後、追加分析および考古学的な検討を進める必要があると考える。

註

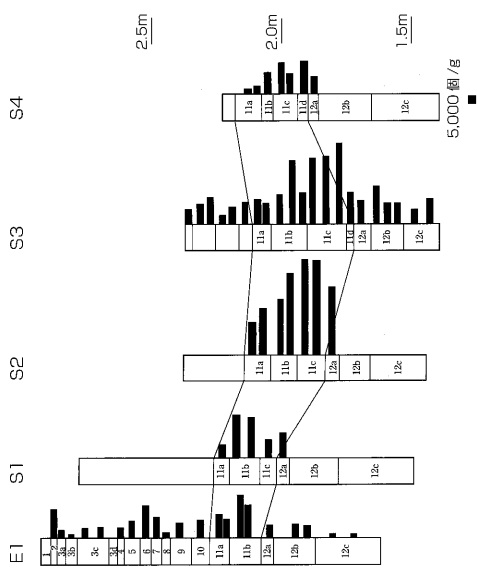
- (1) 宇田津徹朗, プラント・オパール分析, 環境考古学マニュアル (編集 松井章), 同成社, 138-146, 2003
- (2) 藤原宏志「プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) - 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-」『考古学と自然科学』9, pp.15-29, 1976
- (3) 藤原宏志, 杉山真二「プラント・オパール分析法の基礎的研究 (5) - プラント・オパール分析による水田址の調査-」『考古学と自然科学』17, pp.73-85, 1984



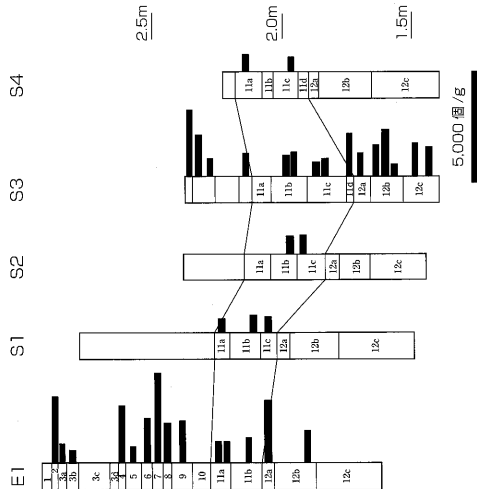
※写真中のスケールは50ミクロン

図65 プラント・オパール顕微鏡写真

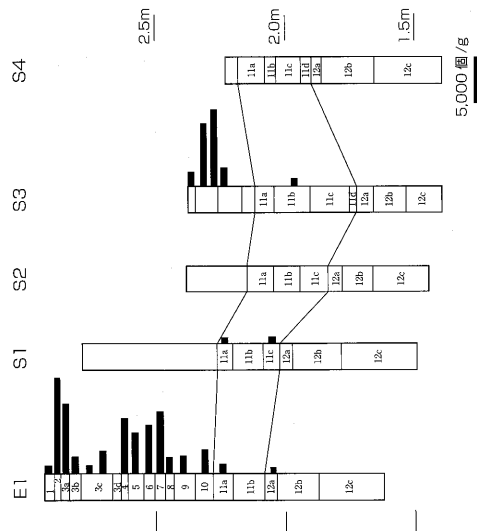
タケ亜科 (*Bambusoideae*)



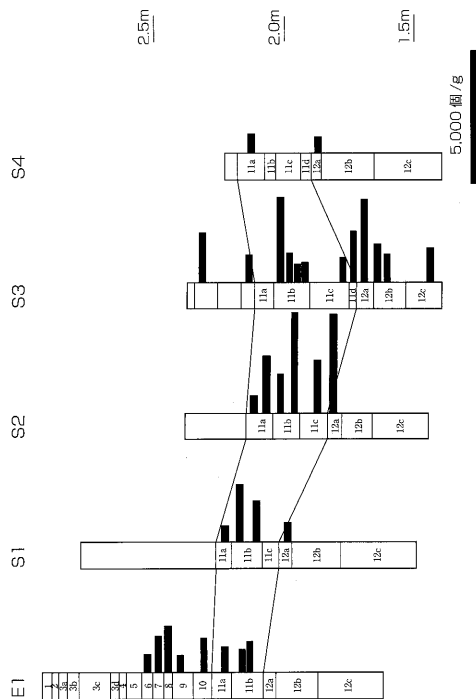
ヨシ属 (*Phragmites*)



イネ (*Oryza sativa* L.)



キビ族 (*Panicaceae*)



ウシクサ族 (*Andropogoneae*)

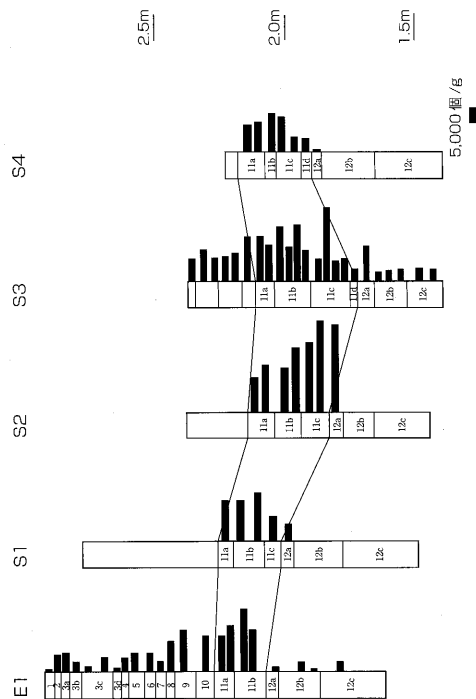


図66 プラント・オパール検出状況

表4 E1地点のプラント・オパール定量分析結果

層名	イネ (<i>O.sativa</i>)	ヨシ属 (<i>Phrag.</i>)	タケ亜科 (<i>Bamb.</i>)	ウシクサ族 (<i>Andro.</i>)	キビ族 (<i>Pani.</i>)
〈1〉	767	0	0	767	0
〈2〉	10,519	3,005	18,784	5,259	0
〈3a〉	7,670	852	5,114	5,966	0
〈3b〉	1,815	605	2,419	3,024	0
〈3c〉-1	817	0	6,540	1,635	0
〈3c〉-2	2,452	0	6,540	4,905	0
〈3d〉	0	0	0	1,158	0
〈4〉	6,000	2,571	6,000	4,286	0
〈5〉	4,467	744	11,166	5,955	0
〈6〉	5,333	2,000	21,333	6,000	667
〈7〉	6,818	4,091	13,636	3,409	1,364
〈8〉	1,747	1,747	3,494	9,610	1,747
〈9〉	1,912	1,912	9,558	13,381	637
〈10〉	2,564	0	11,538	11,538	1,282
〈11a〉-1	962	962	15,385	11,538	0
〈11a〉-2	0	935	12,150	14,953	935
〈11b〉-1	0	0	28,746	20,035	871
〈11b〉-2	0	1,136	21,591	13,636	1,136
〈12a〉	701	2,804	7,710	1,402	0
〈12b〉-1	0	0	8,488	2,829	0
〈12b〉-2	0	1,453	7,989	726	0
〈12c〉-1	0	0	2,222	2,963	0
〈12c〉-2	0	0	1,974	0	0

(単位: 個/g)

表5 S1地点のプラント・オパール定量分析結果

層名	イネ (<i>O.sativa</i>)	ヨシ属 (<i>Phrag.</i>)	タケ亜科 (<i>Bamb.</i>)	ウシクサ族 (<i>Andro.</i>)	キビ族 (<i>Pani.</i>)
〈11a〉	594	594	8,317	13,069	594
〈11b〉-1	0	0	28,467	13,139	2,190
〈11b〉-2	0	783	26,632	15,666	1,567
〈11c〉	699	699	11,888	7,692	0
〈12a〉	0	0	16,310	5,673	709

(単位: 個/g)

表6 S2地点のプラント・オパール定量分析結果

層名	イネ (<i>O.sativa</i>)	ヨシ属 (<i>Phrag.</i>)	タケ亜科 (<i>Bamb.</i>)	ウシクサ族 (<i>Andro.</i>)	キビ族 (<i>Pani.</i>)
〈11a〉-1	0	0	20,405	11,190	658
〈11a〉-2	0	0	30,072	15,036	2,148
〈11b〉-1	0	0	36,375	14,105	1,485
〈11b〉-2	0	761	52,538	20,558	3,807
〈11c〉-1	0	828	61,273	22,356	0
〈11c〉-2	0	0	60,905	29,449	2,008
〈12a〉	0	0	43,789	27,950	3,727

(単位: 個/g)

表7 S3地点のプラント・オパール定量分析結果

層名	イネ (<i>O.sativa</i>)	ヨシ属 (<i>Phrag.</i>)	タケ亜科 (<i>Bamb.</i>)	ウシクサ族 (<i>Andro.</i>)	キビ族 (<i>Pani.</i>)
①	1,489	0	20,405	11,190	658
②-1	6,794	0	30,072	15,036	2,148
②-2	8,372	0	36,375	14,105	1,485
③-1	1,989	761	52,538	20,558	3,807
③-2	0	828	61,273	22,356	0
④	0	0	60,905	29,449	2,008
〈11a〉-1	0	0	43,789	27,950	3,727
〈11a〉-2	0	0	13,274	11,504	0
〈11b〉-1	0	0	19,035	17,978	3,173
〈11b〉-2	0	932	18,634	20,497	0
〈11b〉-3	0	1,113	14,472	11,132	1,113
〈11b〉-4	862	0	26,724	16,379	0
〈11b〉-5	0	0	41,032	18,394	707
〈11b〉-6	0	0	20,103	10,052	773
〈11c〉-1	0	613	42,331	7,362	0
〈11c〉-2	0	802	34,492	12,834	0
〈11c〉-3	0	0	43,881	24,179	0
〈11c〉-4	0	0	37,324	6,338	0
〈11c〉-5	0	0	52,173	7,453	0
〈11c〉-6	0	0	30,589	7,198	900
〈11d〉	0	1,931	20,272	3,861	1,931
〈12a〉	0	1,034	15,517	11,379	3,103
〈12b〉-1	0	1,442	24,519	2,885	1,442
〈12b〉-2	0	2,108	13,700	3,161	1,054
〈12b〉-3	0	553	13,261	3,868	0
〈12c〉-1	0	1,555	9,331	3,888	0
〈12c〉-2	0	1,296	16,204	3,889	1,296

(単位: 個/g)

表8 S4地点のプラント・オパール定量分析結果

層名	イネ (<i>O.sativa</i>)	ヨシ属 (<i>Phrag.</i>)	タケ亜科 (<i>Bamb.</i>)	ウシクサ族 (<i>Andro.</i>)	キビ族 (<i>Pani.</i>)
〈11a〉-1	0	736	2,945	8,834	736
〈11a〉-2	0	0	5,221	9,571	0
〈11b〉	0	0	13,753	12,944	0
〈11c〉-1	0	0	20,048	11,456	0
〈11c〉-2	0	595	13,079	4,756	0
〈11d〉	0	0	21,333	4,000	0
〈12a〉	0	0	10,800	600	600

(単位: 個/g)

第5章 考 察

津島岡大遺跡における古代から近代の条里遺構

1. 問題の所在

a. 第30次調査の成果と問題の所在

今回の第30次調査地点における第一の成果として、古代の道路状遺構の検出が挙げられる(図33~35)。道路状遺構は、両脇に側溝を伴い、ほぼ正方位に北・東・西にのびる逆T字状の三叉路となるものである。側溝から出土した遺物は、土器小片44点で10世紀の須恵器片2点を含んでいる。道路状遺構の上を10~13世紀前半の遺物を包含する〈8~9層〉が覆っていることから、層的な関係からも下限となる時期を限定可能である。また、側溝を有すること、南北方向では路面部が明瞭に周囲より高まること、正方位を指向するなど、道路として安定した構造を認めることができ、調査区東側の一部で検出が困難であったことを除けば、この種の遺構の評価に際してしばしば直面する曖昧さの多くは排除できるものと考えられる。

周辺遺跡では、条里遺構とされるほぼ同時期の畦畔⁽¹⁾や溝⁽²⁾が検出されており、津島岡大遺跡においても坪境にあたる大溝が複数の調査地点で確認されている⁽³⁾。また、道路としての機能が推定される「柵列状遺構」の類例が県内の複数遺跡で古墳時代後期に確認できることが知られているものの⁽⁴⁾、岡山平野において条里地割とその種の遺構との関係は現在のところ不明確である⁽⁵⁾。したがって、正方位を指向する確実な道路としては、本調査地点のものが岡山平野では初例になると思われ、当地域における条里制の導入・推移を検討する上で有益なデータとなろう。

いま一つの成果は、古代から近世にいたる耕作面を確認し、遺跡西端部において各時期の地割の推移を知りうるデータを蓄積できた点である。本調査地点では、中世の〈8層〉上面では耕作痕の指向方向の変化から(図41)、近世上層の〈3層〉上面では東西溝(溝18)や段(段1)、土坑の配置から(図49)、地割の状況を推察することが可能である。その中で注意すべきは、古代から中世にかけて南北方向の地割が東に10mほど位置を移している点である。もちろん、溝や土坑・耕作痕の配置は、単独で地割の検討材料とするには問題の多い資料である。津島岡大遺跡ではこれまでの継続的な調査によって、複数の地点で条里に関連するとみられる遺構を確認しており、地下の地割痕跡のみからでも一定の精度をもって条里を議論することが可能となりつつある⁽⁶⁾。しかし、古代と中世以降の条里遺構の間に、本調査地点で窺われるような地割のずれが比較的明瞭な状況で観察された地点はなく、今回の成果の検証も含めて、他の調査地点で条里に関連する遺構としてきたものとの連関を改めて検討してみる必要がある。

一方で、今回の成果は、通時的な地割の変化だけでなく、同じ時期に機能していたとみられる条里遺構においても相当のずれが存在する可能性を示している。近世上層の〈3層〉上面で検出した溝18は、第26次調査地点で検出した、里境にあるとされる溝11と方向・時期が一致し、埋土の堆積状況・構造などの類似性から同一の溝とみられる⁽⁷⁾。しかし、構内座標で溝の芯々間を計測すると、本調査地点の溝18は第26次調査地点の溝11の約11m南側に位置している。近世の条里を復原した先行研究において、地割の南北軸線が座標北から約0°19'西偏することが指摘されているものの⁽⁸⁾、約200m離れた調査地点間での11mの食い違いを、地割本来の傾きとして説明するのは困難であろう。したがって、これらの溝を一連の遺構とみなすなら、この食い違いには別の要因を検討する必要があることになる。

b. 本稿の目的

本調査地点の成果は、以上のような点から、既往の調査成果・研究成果に新たな検討材料を加えると同時に、整合的でない事実をいくつか提示するものである。そこで本稿では、今回の成果の位置付けに際して、津島岡大遺跡で確認されている古代から近代の条里遺構を整理し直し、地割の時間的推移について検討することにした。

検討に際して遺構間の同時性を厳密に検証する作業が重要であることは当然だが、ここでは古代・中世・近世・近代という一般的な時代区分にしたがって時間軸を設定した。時期の細分を行えなかったのは筆者の力量不足のためではあるが、一方では、津島岡大遺跡が弥生時代以降に主に生産域として利用されており、遺構・遺物が概して少ないこと、耕作活動が各層にわたって連続し攪拌が頻繁に生じていたと推定される堆積環境では耕作面の厳密な時期決定が難しいことにも起因している。また、本稿では条里の復原においてやや精度に欠ける溝や畦畔・耕作痕といった遺構、限られた面積でしか遺構の方向を観察できない立会調査の成果についても検討の対象に含めたが、分析に際しては道路状遺構（可能性あるものを含む）や大畦畔を優先的に扱うことにした。

遺構間の計測は以下の方法で行った。なお、津島岡大遺跡の調査次と参照文献については表1にまとめている。

- ①遺構の種別に関わらずすべて中心からの距離を計測する。すなわち、道路状遺構の場合は、側溝の芯々の中心線、溝は両肩部の中心線、畦畔は下端傾斜変換の中心線を基準とする。既刊の報告書掲載の平面図を計測の資料として用いたため、50cm以内の誤差を含む。遺構が調査範囲外に広がるなどの理由で中心線が求められず、それ以上の誤差を含むと判断される計測値を記載する際は小数点以下の値を示していない。また、立会調査については精度が確保できないため1桁目を四捨五入して示した。
- ②位置の記載に際しては、構内座標の区割りでAU00 (X=-145,500.0000m、Y=-37,000.0000m、日本測地系)を基準にした計測値を示した(図2)。
- ③構内座標からの傾きが比較的大きい遺構については計測の最小値～最大値を示す。

2. 古代の条里遺構

まず、古代から検討を始めた(図67)。古代の条里遺構は、現在のところ遺跡の北側でよく確認されており、第1・3・6・7・9・12・22次調査で確認された大溝は一連のものとみられる。南西側では今回の第30次調査地点と、古代に遡る可能性のある溝が第2次調査A地点で確認されている。

a. 南北軸の遺構

南北方向の遺構は、第6・28・30・31次調査で確認されている。

6次一溝13排水溝 00ラインから西へ231.4mに位置する。後述の東西大溝の排水溝を構成するものである。

28次一溝8 00ラインから西へ335.0mに位置する。10世紀の須恵器小片が出土している。溝の底部にピットが一定の間隔で連続し、柵列の可能性が指摘されている。これに類似する遺構は、津島岡大遺跡においても複数地点で確認され、整理も試みられている⁽⁹⁾。近江俊秀は最近の研究で道路遺構に伴う凹凸痕跡の分類・問題点の整理を行っているが⁽¹⁰⁾、それを参照する限り、この種の遺構は道路の痕跡と考えて差し支えないと思われる。

30次一道路状遺構 00ラインから西へ986.8mに位置する。道路の側溝となる溝9から10世紀の須恵器小片が出土している。

31次一古代溝 00ラインから西へおよそ227mに位置する。未報告資料であるため詳細については触れないが⁽¹¹⁾、南北方向の溝が数条確認されており、底面にピット状の凹凸がみられる。道路の痕跡と考えられるものである。

b. 東西軸の遺構

2次A地点一溝1 AUラインから南へおよそ553mに位置する。層位から古代～中世のものとされている。

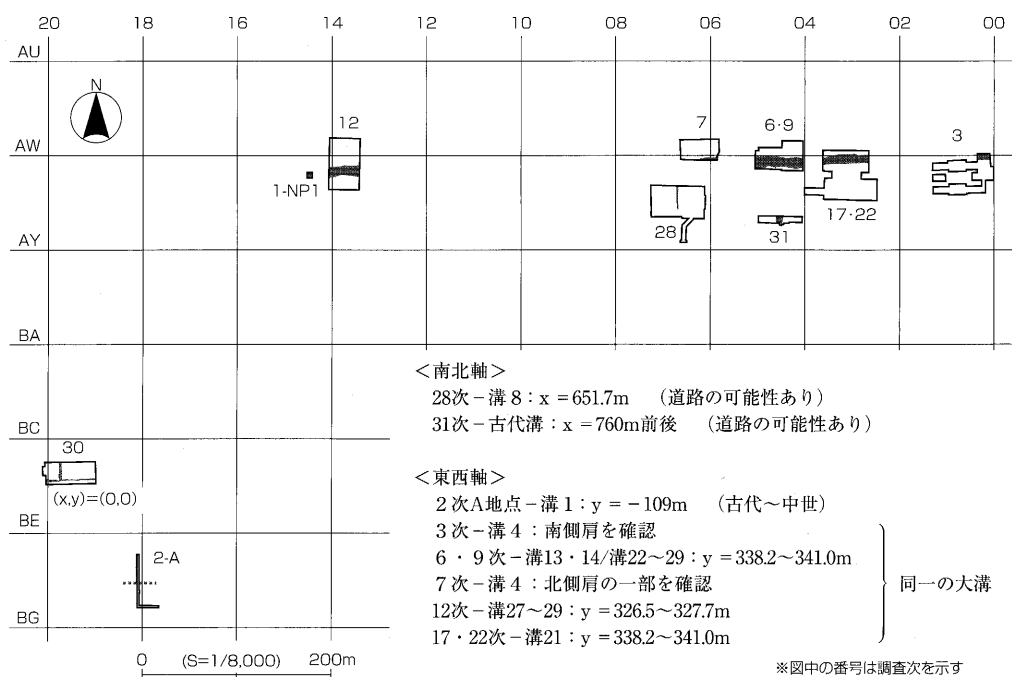


図67 古代における条里遺構の分布

3・6・7・9・12・22次一大溝 AUラインから南へ103.3~117.8mに位置する一連の溝と考えられる。西へいくほど南へ振っており、第22次調査地点と第12次調査地点では芯々間で14.5mの開きがある。時期は10~11世紀初頭で、数段階の改修が確認されている。

30次-道路状遺構 AUラインから南へ443.7~444.7mに位置する。東西軸には、三叉路を境にして1.0mほどの歪みがみられる。

c. 方一町区画の長さとお軸線の傾き

図67には古代の条里遺構の分布と、先述の構内座標での計測値を第30次調査地点の三叉路地点に原点を置いて読み替えた値を示している。東西がx軸、南北がy軸である。ここで第30次調査地点に原点を置いたのは、実際の遺構を基準にした計測値を示した方が遺構間の距離を把握しやすいからである。

1町の長さ 東西軸の遺構は、今回の成果を除けば現状では溝しか確認されておらず、これらを基準に1町の長さを割り出すのはほとんど不可能である。一方、南北軸の遺構はいずれも道路の可能性のあるもので、これらの遺構間の距離を検討することにしたい。28~30次間では651.7m、28~31次間で108.3m前後を測る。28~30次間を6町分とみなすと、1町108.6mの値が得られ、近似の値を示す。したがって、これらの遺構を条里に関連するものと判断してよいだろう。

軸線の傾き 次に問題となるのは、地割の軸線の傾きである。傾きを検討するには、ある程度距離の確保できる一連の遺構、もしくは本調査地点の三叉路のように交点で地割の位置を限定できる地点が2か所以上は必要となる。しかし、現状で確認されている遺構はどちらの条件にも適うものではない。第3・6・7・9・12・22次調査で確認されている東西大溝では一定の距離は確保されるが、幅の広い遺構であるうえに数段階の改修が確認されているため、基準として用いるのは難しい。そこで、ここではやや変則的な方法ではあるが、周辺遺跡で確認されている条里遺構を基準にして軸線の傾きを割り出すことにしたい。津島岡大遺跡の南南東約1,200mに位置する南方釜田遺跡では、坪境にあたとされる南北方向のほぼ同時期の大畦畔が確認されている⁽¹²⁾。時期の詳細

や正確な位置については正式報告を待たねばならないが、相当の間隔が得られるため一定の精度で傾きを割り出すことが可能である。

先述の検討から、津島岡大遺跡内の南北軸の遺構については、道路もしくはその可能性のある遺構で構成されており、かなりの精度が得られている。そこで、仮に108.5m間隔で構内座標（座標北）に合わせて南北の区画線を復原してみると、第31次調査地点の古代溝から1町東側の軸線が南方釜田遺跡の坪境の線とつながることになる。しかし、実際にはこの軸線を延長していくと、南方釜田遺跡の調査範囲から20mほど西へ外れることになる。したがって、南方釜田遺跡の成果と整合するように津島岡大遺跡の軸線の傾きを補正するなら、少なからず座標北から西へ軸線を傾けなければならないことになる。

このようにして、仮の復原線の傾きに調整を加えると、当然ながら1町の長さもそれに合わせて微増することになる。微調整を繰り返した結果、現在確認されている南北軸の遺構を基準にする限り、以下の数値が得られる。

1町区画の長さ：109.2m、軸線の傾き（座標北から）： $N-1^{\circ}12'-W$

軸線の傾きについては、南方釜田遺跡の正確な座標値がわからないため多少変動の可能性はあるが、 $10'$ の範囲に収まるものである。この数値をもとに第30次調査地点を基点にして、東西軸についても一町区画を復原すると、方格線は第3・6・7・9・12・22次調査の大溝の北側の肩部を通ることになる（図69）。この地割は、現在の津島構内を東西に貫流する座主川の流路とよく一致するものである。

3. 中世以降の条里遺構

次に、中世から近代の遺構を検討する。結論から先に述べると、各時期の分布を図上で重ねてみても大きな地割の変化は看取されないことから、図中の表示は時期別に色を変えているが一括して示すことにした（図68）。

a. 中世

(1) 南北軸の遺構

3次一溝7 00ラインから西へ1.4～2.4mに位置する。西脇で小溝（溝9）および畦畔が確認されている。

6次一南北畦畔 00ラインから西へ232.0mに位置する。東脇に本畦畔に沿って走る溝16が確認されている。層位から14世紀後半～15世紀代と考えられている。

8次一溝状遺構 00ラインから西へ926.0mに位置する。南北に2条の溝が並行し、溝の間が道路になる可能性がある。幅は溝の芯々間で2.0m程度である。層位から14世紀頃と考えられている。

10次一溝13 00ラインから西へ541.6mに位置する。13～14世紀頃のものと考えられる。

23次一溝9・10 00ラインから西へ768.4mに位置する。南北方向に並行するやや不定形の溝が2条確認されている。削平を受けているため詳細については不明だが、溝の間が道路になる可能性がある。層位から中世と考えられている。

27次一大畦畔 00ラインから西へ762.4mに位置する。この畦畔は近世まで存続していた可能性がある。なお、大畦畔の下層のほぼ同じ位置に、底部に凹凸痕跡のある溝9が確認されており、道路の痕跡になる可能性が高い。

30次一〈8層〉上面耕作痕 00ラインから西へ973.9mに位置する。〈8層〉上面で耕作痕の指向方向の変化が確認されたのみである。上面の出土遺物から13世紀の状況を示すと考えられるが、時期の比定は難しく、さらに新くなる可能性もある。

(2) 東西軸の遺構

3・6・9・12・22次一中世溝 AUラインから南へ105.2～115.8mに位置する一連の溝と考えられる。西へいくほど南へ振っており、第22次調査地点と第12次調査地点では芯々間で10.6mほどの開きがある。時期は14～15世紀代だが、22次調査地点では、14世紀代に埋没し、南脇に新しく溝が掘り直されていることが確認されている。

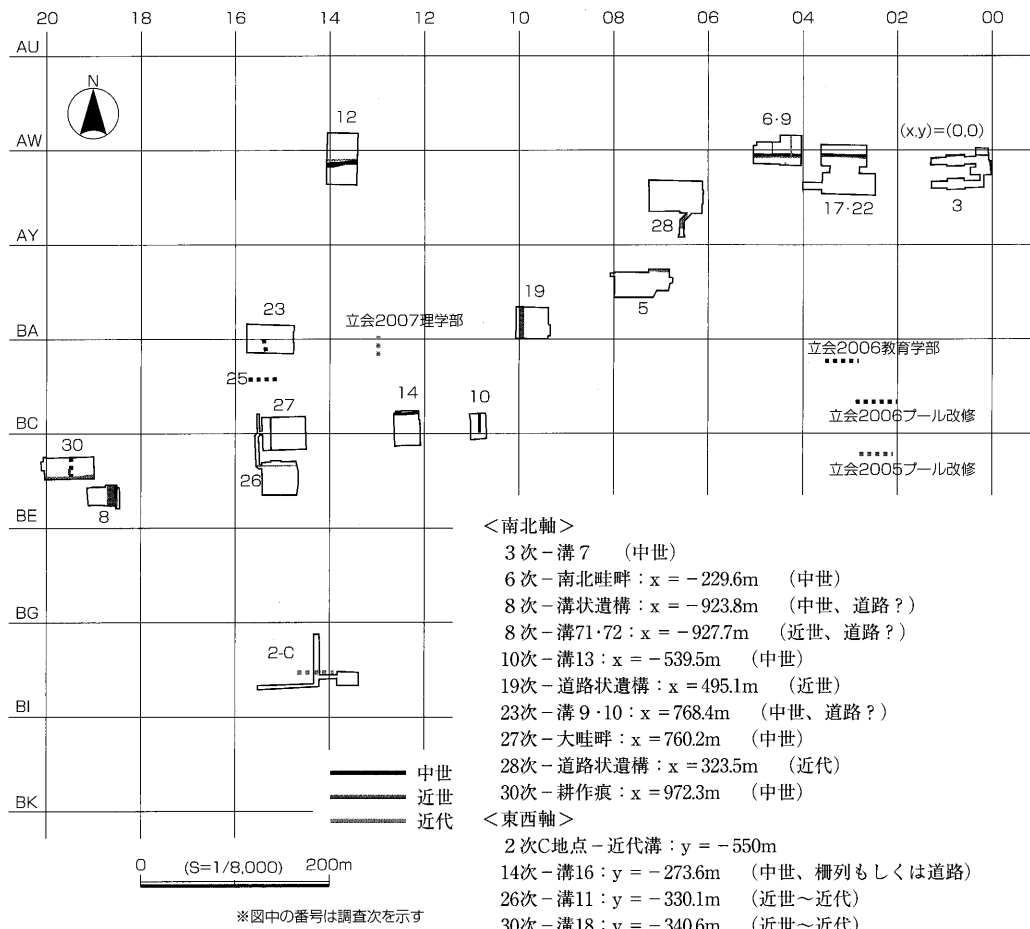


図68 中世～近代における条里遺構の分布

14次-溝16 AUラインから南へ377.6mに位置する。溝の底部に円形のピットが連続し、柵列もしくは道路の痕跡であった可能性がある。時期は層位から13世紀後半が考えられている。

25次-中世溝 AUラインから南へおよそ343mである。限られた面積の調査のため詳細は不明だが、中世の東西溝の南側肩が検出されている。近世まで踏襲されているようである。

2006年度立会(教育学部公共下水道)地点⁽¹³⁾ AUラインから南へおよそ320mを測る地点である。中世の東西溝の北側肩が確認された。

2006年度立会(プール改修)地点⁽¹⁴⁾ AUラインから南へおよそ370mを測る地点である。層位から中世とみられる東西方向の溝が確認された。

b. 近世

(1) 南北軸の遺構

3次-溝15 00ラインから西へ1.2mに位置する。西側肩を確認している。溝の西脇に畦畔を伴う。

8次-溝71・72 00ラインから西へ930.2mに位置する。南北に2条の溝が並行しており、溝の間が道路になる可能性がある。幅は溝の芯々間で計測して13mと、かなり広くなる。

19次-道路状遺構 00ラインから西へ497.0mに位置する。両脇に側溝を有するもので、幅は側溝の芯々間で計測して6.0mである。

30次一段1 00ラインから西へ975.4mに位置する。耕作面に10cmほどの比高差を作り出しており、耕作域の区画を示すものとみられる。

(2) 東西軸の遺構

3・6・9・12・22次-近世溝 AUラインから南へ106.2～110.0mに位置する一連の溝と考えられる。西へいくほど南へ振っており、第3次調査地点と第12次調査地点では芯々間で3.8mほどの開きがある。

26次-溝11 AUラインから南へ434.1mに位置する。

30次-溝18 AUラインから南へ444.6mに位置する。先述のように第26次調査地点の溝11と一連の溝になる可能性が高いものだが、10.5m南側にずれて位置する。

2005年度立会（プール改修）地点⁽¹⁵⁾ AUラインから南へおよそ420mを測る地点である。幅60cmを測る東西方向の溝が確認されている。

2006年度立会（プール改修）地点⁽¹⁶⁾ AUラインから南へおよそ370mを測る地点である。層位から近世とみられる東西方向の溝が確認された。

c. 近代

溝については、陸軍造営の際の造成土で埋没するものをこの時期のものとして扱った。

(1) 南北軸の遺構

9次-南北畦畔 00ラインから西へ212.8m（北側）・218.9m（南側）に位置する。東西溝（溝34）を挟んだ両岸にそれぞれ畦畔がみつかり、6mほどの食い違いがみられる。

28次-道路状遺構 00ラインから西へ325.8mに位置する。造成土中で検出した、両脇に側溝をもつものである。幅が側溝の芯々間で7.1mを測る。

2007年度立会（理学部公共下水道）地点⁽¹⁷⁾ 00ラインから西へおよそ650mを測る地点である。造成土を埋土とする南北方向の溝の東側肩を確認している。

(2) 東西軸の遺構

3・6・9・12・22次-近世溝 AUラインから南へ106.2～110.0mに位置する一連の溝と考えられる。近世の一連の溝をほぼ同じ位置で踏襲している。

2次C地点-近代溝 AUラインから南へおよそ655mを測る地点に位置する。造成土を埋土とする東西溝が確認されている。

5次-溝1 AUラインから南へおよそ230mに位置する。東西溝の南側肩を確認している。

26次-溝11 AUラインから南へ434.1mに位置する。近世溝を同じ位置で踏襲するものである。

30次-溝18 AUラインから南へ444.6mに位置する。近世溝を同じ位置で踏襲するものである。

2005年度立会（プール改修）地点⁽¹⁸⁾ AUラインから南へおよそ420mを測る地点で確認した東西溝である。南側に畦畔を伴う。

2006年度立会（プール改修）地点⁽¹⁹⁾ AUラインから南へおよそ370mを測る地点である。造成土で埋まる東西方向の溝が確認された。ほぼ同じ位置で中世、近世の東西溝も確認されている。

d. 方一町区画の長さとお軸線の傾き

中世～近代においては、第30次調査地点の道路状遺構のような地割の交点を明示する遺構は確認されていない。古代と同様に遺構間の計測値を図68に示すにあたって、中世～近世の間で継続的に踏襲されている第3次調査地点の中世溝6・7の交点を原点に設定する⁽²⁰⁾。原点は第3次調査地点のわずかに外に位置し、各溝の延長上に設定した仮定の点である。仮定の点を計測の基準にするのは好ましいものではないが、これは遺構間の距離を示す

ための便宜的な措置である。

1町の長さ 1町の長さを求める際に、中世～近代の場合は、どの遺構を重視するかによって数値のばらつきが大きくなる。ここでは、中世の南北軸の遺構を主体に検討を進めたい。3次-溝7～10次-溝13では539.5m、3次-溝7～27次-大畦畔では759.9mを測る。それぞれ5町、7町分とみなすと、1町は107.9m、108.6mの値が得られる。

ここで注意しなければならないのは、中世の条里遺構が古代のものと別の地割を採用しているとみられる点である。これらの遺構を第30次調査地点の古代の道路状遺構から計測した場合、27次-大畦畔では224.4m（1町が112.2m）、10次-溝13では444.8m（1町が111.2m）、3次-溝7では984.3m（1町が109.4m）を測る。つまり、30次-道路状遺構と中世の主要遺構との距離を検討すると、1町の値がかなり大きくなるうえに遺構間が等分されない結果となるのである。したがって、古代と中世の条里遺構には少なからずずれが存在すると考えられよう。ちなみに第30次調査地点で確認した中世の耕作痕の方向が変化する地点は、3次-溝7から972.3mを測り、9町分とみなすと1町が108.0mとなり、他地点の中世の条里遺構と近似の値を示すことになる。

軸線の傾き 中世の主要な南北方向の遺構を基準にする限り、1町が108.2m前後の数値が得られる結果となる。古代の場合と同様、この数値で座標北に合わせた復原線を引いた場合、3次-溝7の1町西側の軸線が南方釜田遺跡で確認されている中世の大畦畔につながると考えられる⁽²¹⁾。ところで、南方釜田遺跡の中世の大畦畔は古代のものから西へ5mほどずれた位置に確認されている。興味深いのは、津島岡大遺跡においては、これまで検討してきた復原地割でみると、中世のものが先述の古代よりも東側に10m前後ずれる点である。つまり、津島岡大遺跡と南方釜田遺跡では古代から中世にかけて地割にずれが生じているという点では同じ現象がみられるものの、ずれの方向が逆になっているのである。この現象の説明として、津島岡大遺跡と南方釜田遺跡の間で少なくとも1つの里境をまたぐことになるために、軸線の途中で歪みが生じている可能性も考えられる。しかし、第3・6・9・12・22次調査でみつまっている東西溝が古代から中世にかけて振幅を減じることを考慮すると、この現象は古代と中世で地割の軸線の傾きが異なるために生じる現象と考えるのが現状では妥当であろう。したがって、古代と中世の軸線は、津島岡大遺跡と南方釜田遺跡の間のどこかの地点で交差していると考えられる。

座標北に合わせた仮の復原線を南方釜田遺跡に向けて延長していくと、調査範囲から10m程度外れる結果となる。したがって、古代より西偏の度合いは弱まるものの、中世についても座標北から西へ傾ける必要がある。結果、1町の長さも微増することになり、中世の遺構に最も適合するように得られた数値が以下のものである。

1町区画の長さ：108.5m、軸線の傾き（座標北から）：N-0°24'-W

3次-溝6・7を基準にした方格線については図69に示した。東西軸についてもこの復原線に適合する遺構があり、第3・6・9・12・22次調査の一連の東西溝はほぼ線上に位置する。また、第14次調査の溝16はちょうど半町の軸線上に位置する。2006年度立会（教育学部公共下水道）地点の中世溝もほぼ適合する。

近世以降の地割 中世の地割は近世以降においても基本的には適用可能と考えられる。適合する遺構を挙げると、南北軸では3次-溝15、9次-南北畦畔（南側）、28次-道路状遺構、30次-段1、2007年度立会（理学部公共下水道）地点である。東西軸では、3・6・9・12・22次-東西溝、26次-溝11、2次C地点-近代溝である。一方で、中世の地割に合致しない遺構が一定数認められ（5次-溝1、8次-溝71・72、19次-道路状遺構、30次-溝18、2005年度立会（プール改修）地点）、それは中世段階の遺構においてすでにみられるようである（6次-南北畦畔、23次-溝9・10、2006年度立会（プール改修）地点）。最後に、これらの地割に合致しない遺構について検討することにしたい。

4. 古代～近代の条里地割の推移

図69には古代・中世の方格線を1町単位で示している。中世以降にみられる地割に合致しない遺構の多くは、

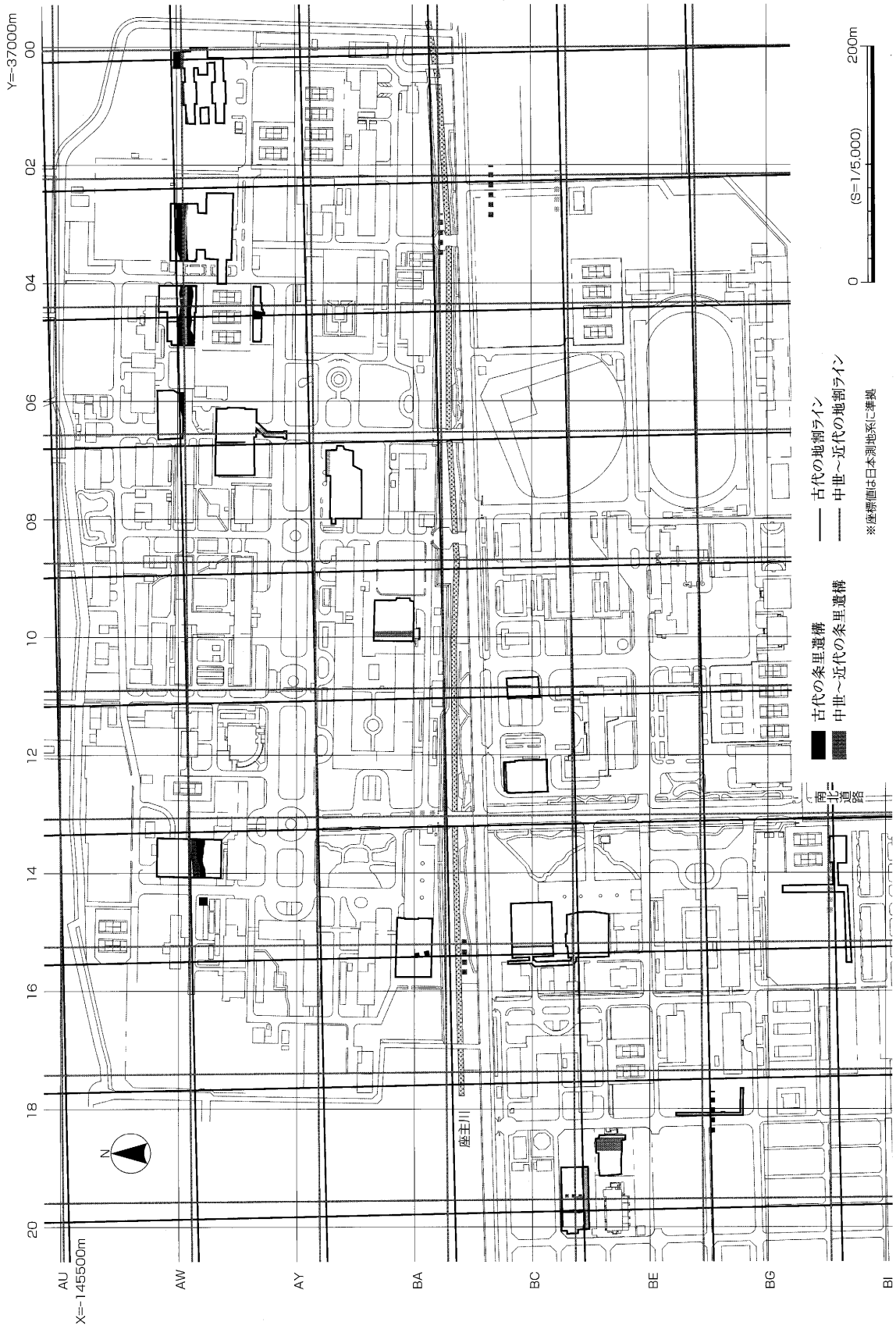


図69 津島岡大遺跡における古代～近代の条里地割

古代の地割に適合する傾向がみられる。8次-溝71・72は溝の間が道路になる可能性があるが、ほぼ中心を古代の半町の軸線が通る。19次-道路状遺構についてもほぼ中心を古代の半町の軸線が通り、誤差は1m程度である。30次-溝18については、下層のほぼ同じ位置に道路状遺構を確認したように、古代の軸線からわずかに南にずれているだけである。また、6次-南北畦畔（誤差4m程度）、23次-溝9・10（誤差3m程度）についても中世より古代の地割で誤差が小さくなる。

以上の分析から、古代から中世の間に地割の再編があったことが窺え、それは軸線の傾きを変更し、おそらくは1町区画の長さをも変更する大規模なものであったと推察されるが、一方では既存の古代の地割を踏襲しつつ施行された部分もあったものと考えられる。津島岡大遺跡では既往の調査で中世後半に大規模な造成の痕跡が確認されており⁽²²⁾、ここで指摘した地割の再編と関連する可能性がある。時期の特定は難しいが、13~14世紀頃と思われる。南方釜田遺跡においてもほぼ前後する時期に大畦畔が付け替えられており、再編が平野北部の広範囲に及んだ可能性もあろう。

今回の検討によって津島岡大遺跡の条里遺構の大半については一通りの位置付けができたと思われるが、一方では古代・中世のどちらの地割とも関係が判然としない遺構（例えば5次-溝1）も存在する。これらについては、現在のところ近代にしかみられず、古代以来の地割を正方位に修正して区画し直した、比較的新しいものではないかと考えている。

5. まとめ

本稿では津島岡大遺跡における古代から近代の条里遺構を検討した結果、以下の2点が結論として得られた。

- ①中世に地割の再編が存在し、古代のものとは1町の長さ・軸線の傾きが異なる可能性が高い。
- ②中世の地割の再編は部分的に古代の地割を踏襲しており、その結果、施行時期の異なる2つの地割が近代まで並存していたと考えられる。

2つの仮説は、冒頭に挙げた第30次調査地点の位置付けにおける問題点をよく説明するものである。第30次調査地点の中世から近世の各耕作面から窺うことのできる南北区画線が、古代の道路状遺構の南北軸よりも東に10mほど移動する現象は、この地割の再編を1地点において観察しているものと理解できよう。また、近世から近代の東西溝である第30次調査地点の溝18と第26次調査地点の溝11にみられた11mの南北方向の食い違いは、前者で古代の地割を引き継ぐ一方で、後者では中世の地割を採り入れたために、生じたものと考えられる。したがって、直線上にはないものの、これらの溝はやはり一連のものとなる可能性が高い。

本稿では、津島岡大遺跡の条里遺構の整理と分析の結果、古代から近代において施行時期の異なる2つの地割の存在を指摘した。これらの地割と周辺域の地理・地形との関係、周辺遺跡の調査成果や蓄積されてきた先行研究との対応関係など、今回十分に検討できなかった課題は多い。また、地割の再編としてここで把握した現象は、検討対象とした津島岡大遺跡内の1×0.5kmほどの範囲で10m内外のずれが生じているにすぎず、その広がりや歴史的な性格は今のところ不明といわざるをえない。従来指摘されてきたように本遺跡内を山陽道が横断していた可能性を視野に入れるなら⁽²³⁾、当地域における条里の歴史的推移を辿る作業は幹線道路と土地開発との関係を議論するうえでも重要な意義をもってくる可能性がある。地割痕跡の大半はなお地中に埋もれており、今後のデータの増加を待つのが何よりの検証法ではあるが、ここでの粗削りな仮説が少しでも今後の研究に資すれば幸いである。

本稿をなすにあたって、新納泉・山本悦世・岩崎志保・野崎貴博・光本順の各氏から貴重なご教示を頂いた。記して感謝申し上げる。

考 察

註

- (1) 日本考古学協会静岡大会実行委員会 1988「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』岡山市教育委員会 1986『南方釜田遺跡現地説明会資料』
- (2) 岡田 博 1998『北方下沼遺跡 北方横田遺跡 北方中溝遺跡 北方地藏遺跡 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126』岡山県教育委員会
島崎 東ほか 2003『津島遺跡4 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173』岡山県教育委員会
高田恭一郎 2000『北方地藏遺跡2・北方藪ノ内遺跡 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告149』岡山県教育委員会
平井 勝 2000『津島遺跡2 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151』岡山県教育委員会
- (3) 家田淳一・吉村 健 1985『岡山大学津島北地区小橋法目黒遺跡(AW14区)の発掘調査』岡山大学埋蔵文化財調査室
岩崎志保 2005『津島岡大遺跡16』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
小林青樹・野崎貴博 1998『津島岡大遺跡10』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
土井基司・山本悦世 1995『津島岡大遺跡6』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
山本悦世 1992『津島岡大遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
山本悦世・岩崎志保 2003『津島岡大遺跡11』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (4) 平井泰男 1995「第4章まとめ 第1節発掘調査成果の概要」『南溝手遺跡1 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告100』岡山県教育委員会
- (5) 津島岡大遺跡第6・7・9・22次調査地点では古墳時代後期に遡るほぼ正方位の東西溝が確認されているが、本稿では9世紀以後の条里遺構を検討対象とした。
- (6) 野崎貴博 2003「津島岡大遺跡における近世の条里遺構について」『津島岡大遺跡12』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (7) 光本 順 2005『津島岡大遺跡15』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (8) 前掲註6文献
- (9) 光本 順 2005「古墳時代後期から中世における遺構群の変遷」『津島岡大遺跡15』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (10) 近江俊秀 2006『古代国家と道路』青木書店
- (11) 津島岡大遺跡第31次調査については、『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』に報告予定である。
- (12) 前掲註1文献
- (13) 岩崎志保 2008「3. 公共下水道接続工事(教育学部)に伴う立会調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』
- (14) 岩崎志保 2008「4. プール改修(排水管改修)工事に伴う立会調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』
- (15) 野崎貴博 2007「2. プール改修(排水管改修)工事に伴う立会調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2005』
- (16) 前掲註14文献
- (17) 岩崎志保2008「2. 公共下水道接続工事(理学部ほか)」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』
- (18) 前掲註15文献
- (19) 前掲註14文献
- (20) 近世の条里を復原した前掲註6文献では、3次・溝7の位置を踏襲する近世溝15を、西側8.8mに位置する溝16とともに道路状遺構を構成していたものとして基準線の設定を行っている。この道路状遺構は、溝15の幅・深さが不明なため、位置付けに問題を残している。本稿では、中世溝7・近世溝15ともに西側の際に畦畔を伴う点を重視して、道路状遺構としてではなく、溝の芯自体に基準を置いている。
- (21) 前掲註1文献
- (22) 山本悦世・岩崎志保 2003『津島岡大遺跡11』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- (23) 岩崎志保 2005「条里の溝について」『津島岡大遺跡16』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
高重 進 1989「山陽道」『岡山県史 第三巻 古代Ⅱ』

【参考文献】

- 石田 寛 1962「岡山市域の条里」『岡山市史(古代編)』
高重 進 1989「条里制」『岡山県史 第三巻 古代Ⅱ』
永山卯三郎 1952『岡山縣農地史』農地改革記録編纂委員会

第6章 結 語

津島岡大遺跡第30次調査では、縄文時代～弥生時代前期、弥生～古墳時代、古代、中世、近世・近代における遺構・遺物の様相が明らかとなった。本調査地点の南東約10mに位置する第8次調査地点の成果と併せて、遺跡西端部の土地利用の推移に関するデータを新たに蓄積することができた。以下に、各時期の概要をまとめる。

縄文時代～弥生時代前期 縄文時代後期までには形成されたとみられる微高地と南北に谷状にのびる窪地部を確認した。縄文時代～弥生時代前期に帰属する土坑・ピットは、西側微高地上を中心に分布している。一方、窪地部底部付近の基盤層〈12層〉中で焼土・炭化物集中部を検出した。珪藻・プラント・オパールの分析では、〈12層〉時は比較的乾燥した堆積環境であったことが推定されており、検出地点で火を焚く活動のあった可能性はあるが、既往の調査で確認されている炉を基準にする限り、安定的な遺構としての積極的な評価は難しい。

遺物は、小片が大半だが〈11層〉上部から出土した突帯文土器がもっとも多い。深鉢は、口縁部に幅狭・低めの突帯を有し、突帯下に細めの沈線文をもつものが多くみられる。第2次調査・事務局本部棟立会調査出土の資料に類似し、津島岡大遺跡第3次調査出土のいわゆる津島岡大式よりもやや新相に位置付けられる可能性が高い。当該期の生活域が本遺跡北東部とは別に、南西部にも存在することを示唆する資料が新たに追加されたといえよう。なお、突帯文土器片の出土した土坑5の炭化物の年代測定（AMS法）では 2545 ± 25 BPの値が得られている。

プラント・オパール分析では、上面で弥生時代前期の水田畦畔がみつかる〈11層〉および基盤層〈12層〉から少量ではあるがイネのプラント・オパールが検出されており、他地点の成果を併せて検証していく必要がある。

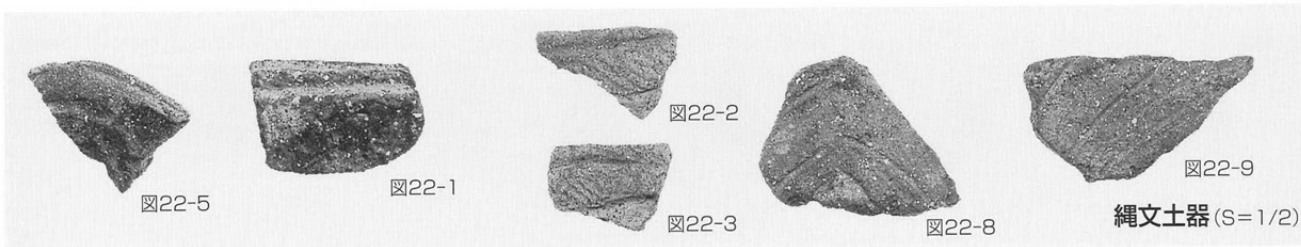
弥生時代～古墳時代 溝6条を確認した。そのうち5条は切り合い関係をもちながら、調査区北辺を東西に横断している。これらの溝群は、調査区内で北西と南西に向かう方向に分岐する点で、非常に似た流路をとっている。いずれも東から西へ向かう用水路として、場所をわずかに移しながらも同じ目的のもとに繰り返し掘削されたものと考えられる。これらの溝群の下限は古墳時代後期である。他の調査地点の成果を併せ考慮すると、これらの溝は微高地間の谷状に低まった地形に沿うように走っていたものとみられ、この時期までは少なからず縄文時代以来の自然地形の起伏が残存していたと考えられる。

古代 正方位を指向する溝5条を確認し、これらはいずれも条里に関連する道路状遺構の側溝として機能したのと考えられる。古代遺構の検出面で調査区内はほぼ平坦となるため、この時期に起伏を均す土地造成の及んだことがわかる。道路状遺構は、北・東・西にのびる三叉路となっており、幅は側溝の芯々間で測ると南北方向で3.7～4.1m、東西方向で1.6～3.6mである。溝出土遺物から10世紀頃の所産とみられる。

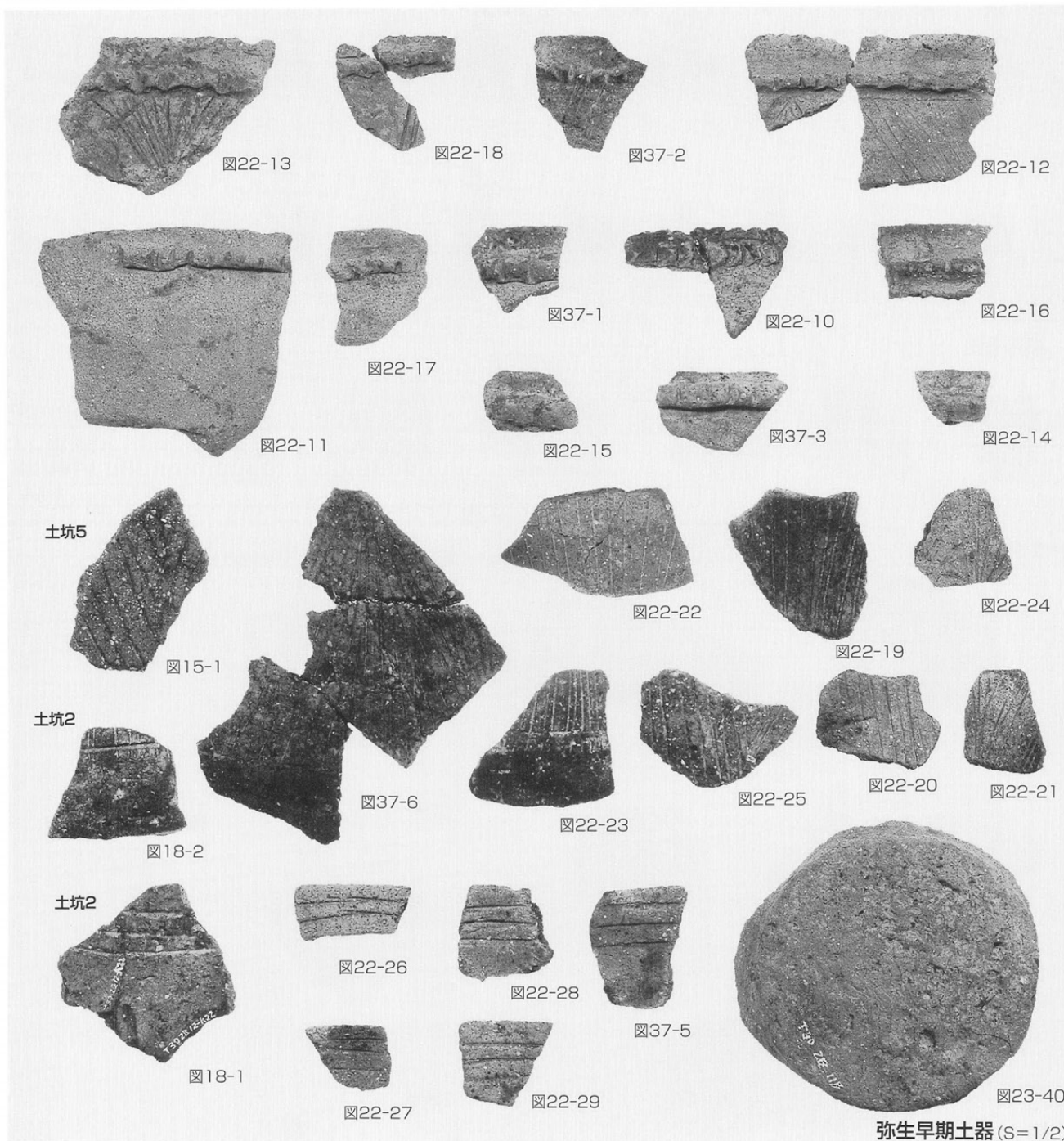
検出位置は岡山平野の推定地割に一致しており、南北方向が坪境、東西方向が里境に相当することになる。岡山平野の推定地割に合致する地点において、古代の区画を明示する遺構を確認できた点は、構内遺跡の当該期の条里復原において有益なデータを提供するものである。また、周辺遺跡である北方遺跡群や津島遺跡において溝による区画しか確認されていない現状では、当該期の道路状遺構の検出は岡山平野北部における条里の導入・推移を検討するうえでも重要な成果といえよう。

中世 調査区のほぼ全域で鋤溝とみられる耕作痕を確認した。調査区のほぼ中央部を境にして耕作痕の指向方向が変わっており、耕作地の区画の境界を反映している可能性がある。この境界線の位置は、古代の道路状遺構にみる地割から東へ12～13mほど移動しており、注意を要する。

近世・近代 近世の耕作面を2面確認した。上層の耕作面では里境に相当する東西溝が走っており、第26次調査で確認した近世～近代の溝と同一のものとみられる。溝・土坑・耕作痕の分布から推定する耕作地の区画は、先述の中世の区画境界線の位置とほぼ一致し、近代の旧陸軍による造成まで同じ地割が継続したようである。



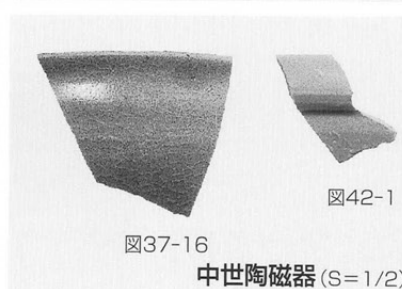
縄文土器 (S=1/2)



弥生早期土器 (S=1/2)

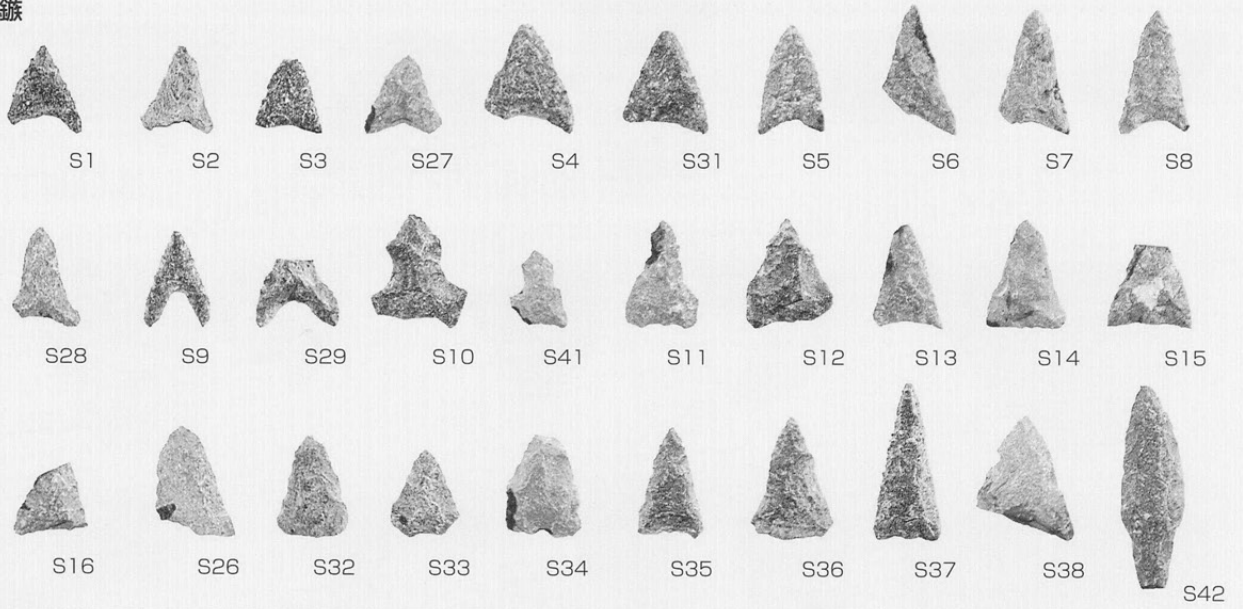


弥生前期土器 (S=1/2)



中世陶磁器 (S=1/2)

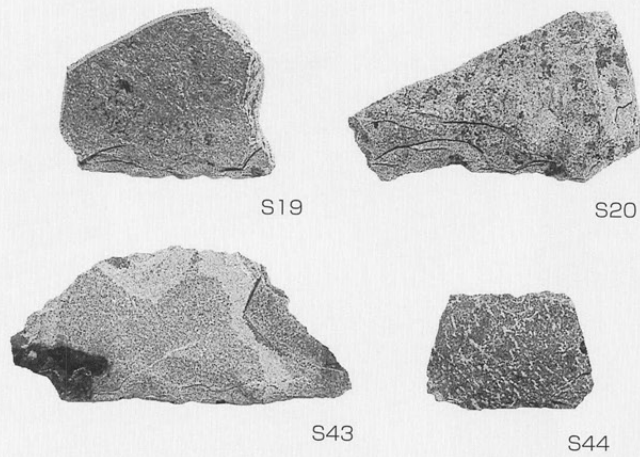
石鏃



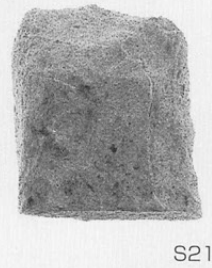
楔形石器



スクレイパー



石斧



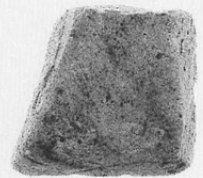
石核



磨石

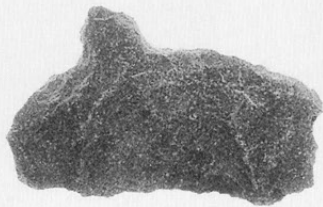


砥石



(S=1/2)

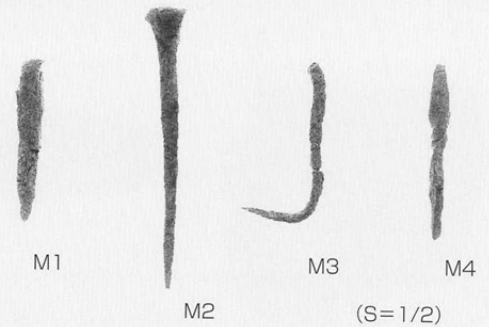
石匙



S55

(S=2/3)

鉄器



(S=1/2)

報告書抄録

ふりがな	つしまおかだいいせき							
書名	津島岡大遺跡19 ー第30次調査ー							
副書名	岡山大インキュベータ新営							
巻次								
シリーズ名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告							
編著者名	池田 晋 (編集)・野崎貴博・宇田津徹朗							
編集機関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒700-8530 岡山県岡山市津島中3丁目1番1号 TEL 086-251-7290							
発行年月日	2009年3月19日							
ふりがな	ふりがな	コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村		(世界測地系)	(世界測地系)			
津島岡大遺跡	おかやまけんおかやまし 岡山県岡山市 つしまなか 津島中1丁目 1番1号	33201		34度41分 12秒 ～ 34度41分 13秒	133度54分 57秒 ～ 133度54分 59秒	2007年8 月1日～ 12月17日	1035.4㎡	岡山大イ ンキュベ ータ新営
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
津島岡大遺跡 第30次 調査地点	その他の生産 遺跡	縄文時代～ 弥生時代早期	土坑8基、ピット15基、焼土・ 炭化物集中部1箇所		縄文土器・突帯文土 器・石器			
	その他の生産 遺跡	弥生～古墳 時代	溝6条		須恵器・土師器			
	田畑	古代	道路状遺構 (溝5条)		須恵器・土師器・鉄 器			
	田畑	中世～近世	土坑20基、溝17条、畦畔1条、 段1箇所		土器・陶磁器・鉄器・ 杭			

2009年3月19日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第25冊

津島岡大遺跡19

編集・発行 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市津島中3丁目1番1号
(086) 251-7290

印刷 西尾総合印刷株式会社
岡山市津高651
(086) 254-9001

